令和３年度

しずおか中部連携中枢都市圏地域課題解決事業

～大学連携による地域課題への取り組み～

研 究 成 果 報 告 書

令和４(2022)年３月

しずおか中部連携中枢都市圏

令和３年度　しずおか中部連携中枢都市圏地域課題解決事業　成果報告書

1 温泉水を活用した水耕栽培モデルの探索に関する研究 ・・・ 1
（静岡大学農学部教授　切岩　祥和）（静岡市　市民局井川支所）

2 幼児期における生物多様性学習プログラムの開発に関する研究 ・・・ 5
（静岡大学教育学部准教授　郡司　賀透）（静岡市　環境局環境創造課）

3 人生１００年時代、高齢者の地域活動・社会参加を促進したい！
「繋ぐ・私たちの言葉―静岡を笑顔に―」 ・・・ 11
（静岡大学教育学部教授　杉崎　哲子）（静岡市　保健福祉長寿局健康福祉部高齢者福祉課）

4 植物を通じた地域および世代間の交流 ・・・ 15
（静岡大学理学部准教授　天野　豊己）（静岡市　保健福祉長寿局健康福祉部高齢者福祉課）

5 静岡県立川根高等学校の魅力化向上 ・・・ 19
（静岡大学情報学部教授　永吉　実武）（川根本町　教育委員会教育総務課）

6 家庭や地域にある果樹を用いた地域創生 ・・・ 25
（静岡大学農学部准教授　松本　和浩）（川根本町　企画課）

7 「かけこまち七間町」を拠点とした認知症予防の展開 ・・・ 29
（静岡県立大学経営情報学部教授　東野　定律）（静岡市　保健福祉長寿局地域包括ケア推進本部）

8 静岡県立川根高等学校の魅力化向上 ・・・ 33
（静岡県立大学薬学部講師　刀坂　泰史）（川根本町　教育委員会教育総務課）

9 「しずまえ」ブランド普及拡大のため、近隣地域の消費者ニーズ調査 ・・・ 37
（東海大学海洋学部准教授　清水　宗茂）（静岡市　経済局農林水産部水産漁港課）

10 「静岡市はマグロ王国」であることの認知度向上 ・・・ 43
（東海大学海洋学部教授　後藤　慶一）（静岡市　経済局農林水産部水産漁港課）

11 新たな働き方に対応した移住促進施策 ・・・ 47
（常葉大学経営学部教授　小豆川　裕子）（静岡市　企画局企画課）

12 人口減少が続く中山間地の移住者増加策の検討
～　移住マップとあおいくんちゃんねる制作を通して　～ ・・・ 51
（常葉大学経営学部講師　山田　雅敏）（静岡市　葵区役所地域総務課）

13 住民主体の効果的介護予防プログラムについて ・・・ 55
（常葉大学健康科学部教授　磯崎　弘司）（静岡市　保健福祉長寿局健康福祉部地域リハビリテーション推進センター）

14 「静岡市はマグロ王国」であることの認知度向上に関する研究 ・・・ 59
（常葉大学健康プロデュース学部　准教授　中村　俊哉）（静岡市　経済局農林水産部水産漁港課）

15 「町民一人一スポーツの実現」に向けた事業運営戦略 ・・・ 63
（常葉大学健康プロデュース学部准教授　村本　名史）（吉田町　教育委員会事務局生涯学習課）

16 地域のことばの保存と継承を目指して ・・・ 67
（静岡英和学院大学人間社会学部講師　大槻　知世）（静岡市　保健福祉長寿局健康福祉部高齢者福祉課）

17 牧之原市「魅力ある公園づくり」に関する研究
－日本古典文学と桜の花－ ・・・ 71
（静岡英和学院大学人間社会学部教授　畑　恵里子）（牧之原市　建設部公園公共建築課）

18「藤枝セレクション」を起点とした藤枝市のシティ･プロモーションへの取り組み ・・・ 77
（静岡産業大学情報学部講師　植松 頌太）（藤枝市　産業振興部産業政策課）

19 島田市の地域観光資源を連携・周遊させる手法の提案 ・・・ 85
（静岡文化芸術大学文化政策学部講師　石本 東生）（島田市　産業観光部文化資源活用課）

20 地域ブランド「しずおか葵プレミアムAWARD」認証品の
プロモーション（販売促進）戦略に関する研究 ・・・ 91
（大正大学地域構想研究所　教授　北條 規）（静岡市　経済局商工部産業振興課（市長公室東京事務所））

（成果報告書）

温泉水を活用した水耕栽培モデルの探索に関する研究

静岡大学 農学部 生物資源科学科 野菜園芸学研究室
教　　員：教授 切岩祥和
参加学生：杉本雄大、廣利洸樹、山川高明

（以下本文）

１要約

温泉水を活用した水耕栽培の仕組みとして、温泉水を肥料成分と混合して使うのではなく、収穫直前の数日間に温泉水を利用して育成する栽培方式でより簡便な作業で葉菜類を生産できることを確認した。

２研究の目的

養液栽培は省力化を目的とした技術であり、従事者の生活と密着したシステムの提案も可能となる。この地域の財産である温泉水の特性や自然環境を理解して地域のニーズに叶う作物を選定し、その特性に応じた栽培システムを構築して、新たな特産品の確立にむけた取り組みを目指す。

３研究の内容

本課題における調査研究として①温泉水の水質評価を行い、栽培に利用するための水を調製する。②温泉水の特長を活かした作物生産システムを検討し、井川地区での温泉水を活用した作物生産の仕組みを構築した。

４研究の成果

(1) 当初の計画

本課題における調査研究として①温泉水の水質評価を行い、栽培に利用するための水を調製する。②温泉水の特長を活かした作物生産システムを検討し、井川地区での温泉水を活用した作物生産の仕組みを構築することを目的とした。

養液栽培は省力化を目的とした技術であり、従事者の生活と密着したシステムの提案も可能となる。この地域の財産である温泉水の特性や自然環境を理解して地域のニーズに叶う作物を選定し、その特性に応じた栽培システムを構築して、新たな特産品の確立にむけた取り組みを目指す。なお、本事業は井川振興会との協働事業により展開し、当該研究室に所属する学生とともに、水質評価や作物の選定に関する栽培試験を行い、温泉水を活用した栽培システムの開発に向けた仕組みの提案を行う予定である。

(2) 実際の内容（Ｂ　一部修正）とその理由

本事業を進めるに当たり井川振興会と意見交換を行い、温泉水を活用して井川特産の作物を生産したいとの意向を確認した。温泉水を作物の生産に利用することを考えると、①作物の栄養源として利用すること、②豊富な水をシステムの一部として利用することが想定された。作物生産にとって重要な栽培管理として作物の生育に適した環境を構築する必要があるため、井川地区での周年生産にとっては冬期低温を克服する必要がある。温泉水の熱源を利用した暖房利用が考えられたが、温泉水は低温であったため、栽培システムでの熱源利用はできないことが確認された。したがって、①のような

利用法を前提とした生産システムを検討する方向とした。

①-1　温泉水の水質評価

まず温泉水の水質を把握するため、生産に必要な水質調査を行った。水質としては、pH、電気伝導度（EC）を、肥料成分としては、イオンクロマトグラフィー（IC）を用いてNO3-N、PO_4、SO_4、HCO_3を、高周波誘導結合プラズマ発光分光分析装置（ICP）を用いてK、Ca、Mg、Fe、Mn、Zn、Cuを分析した。

その結果を第1表に示した。温泉水はpHが9前後と高く、このまま栽培利用すると肥料の吸収に悪影響を及ぼす可能性がある。ECは0.8dS/m程度と高かったが、その組成から判断しても植物の育成に悪影響を及ぼすほど過剰に含まれる肥料分はなかったため、栽培に利用する水として用いることが可能であることが確認された。

第1表　温泉水成分の組成

サンプル	EC (dS/m)	pH	NO_3-N	NH_4-N	PO_4-P	K	Ca	Mg	SO_4	Na	Cl
			(me/L)								
A	0.81	8.92	0.64	0.38	0.00	0.39	0.01	0.00	0.37	8.40	6.65
B	0.76	9.14	0.41	0.28	0.00	0.16	0.00	0.00	0.24	8.21	6.78
A (pH6)	0.82	6.49	0.06	0.29	0.00	0.08	0.04	0.00	3.08	6.85	5.67
B (pH6)	0.83	6.49	0.16	0.33	0.00	0.08	0.01	0.00	4.11	7.20	6.30

サンプル	EC (dS/m)	pH	Mn	Cu	Zn	B	Fe	Mo
			(ppm)					
A	0.81	8.92	0.01	0.01	0.00	1.76	0.23	0.01
B	0.76	9.14	0.01	0.01	0.00	1.76	0.22	0.09
A (pH6)	0.82	6.49	0.00	0.01	0.02	1.62	0.30	0.02
B (pH6)	0.83	6.49	0.00	0.01	0.01	1.67	0.30	0.01

また、この温泉水を用いる場合にはpH調整が必要であることから、希硫酸を用いてpH6.5に調整したサンプルについても同様に分析を行った。その結果、硫酸が3me/L添加されたが、栽培上支障はない程度であった。またpHの調整によりFe濃度が0.3ppmとわずかに上昇し、Znも検出された。

①-2　温泉水がコマツナの生育に及ぼす影響

実験１）発芽に及ぼす影響を調査した。処理は20℃の条件下でφ90mmシャーレに3mlのpH6.5とした温泉水を入れて‘楽天’の種子15粒を播種して1週間調査した。その結果を第1表に示した。コマツナの発芽率と幼根長に差はなく、温泉水のままでも植物の発芽と初期生育に対する影響は小さいと考えられた。

第1表　発芽率と幼根長に及ぼす温泉水の影響

	発芽率 (%)	幼根長 (mm)
水道水	93.3	36.2 ±18.4
温泉水	86.7	32.7 ±7.3

実験２）苗の生育に及ぼす影響について調査した。ロックウールの育苗用マットに‘楽天’と‘里ごころ’の2品種を播種し、温泉水（pH6.5）と水道水に1日1回浸漬した処理により苗の生育に及ぼす影響について10日間調査した。播種後は苗テラス（明期23℃・16h/暗期18℃・8h）にて生育させ、播種10日後の様子を観察した結果を写真1に示した。いずれの品種においても初期生育においても温泉水を利用しても水道水と変わりなく生育することが確認された。

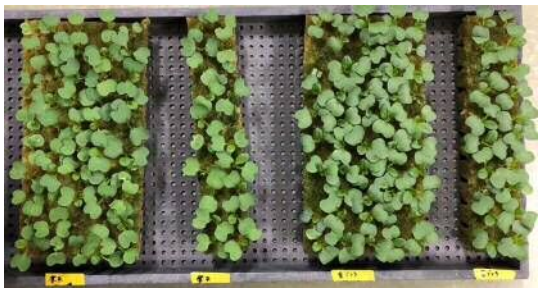


写真1　温泉水で育苗したコマツナの様子
（左から，‘楽天’水道水・温泉水，‘里ごころ’水道水・温泉水）

実験３）初期生育に及ぼすpH補正の有無による影響について調査した。実験２で育成した‘楽天’水道水の株を供試し、室内にてグリーンファームキューブ（(株）ユーイング）にて水耕栽培を行った（写真2)。温泉水はpH調整してpH6.5とした調整区とpH9のままの未調整区とした。処理して14日後の生育の様子であるが、いずれも生育は良好であったが、未調整区の葉色がわずかに薄い傾向が観察された。

写真2　温泉水のpH調整がコマツナの生育に及ぼす影響
（左　pH未調整区、右　pH調整区）

このように、井川の温泉水は、堆肥等の食害試験で供試されるコマツナを用いた初期生育の試験においては生育に対して悪い影響となるような結果が確認されなかったことから、pHの補正をすることで栽培利用が可能であることが確認された。

② 温泉水を利用した作物生産システムの検討

温泉水を利用して養液栽培するためには、pHの補正と肥料成分の調整を必要とする。作物を生産する仕組みを構築するためには、生育環境の管理に加え、潅水管理における肥料組成の調整に関するノウハウがない場合には何らかのトラブルを発生させる原因にもなり得る。そこで、養液栽培における手間を極力抑えて温泉水を利用した生産を行うために、慣行法で養液栽培した葉物野菜を収穫前1週間温泉水にて栽培する方法について検討した。

第２表は温泉水を活用した葉菜類の栽培計画に用いる計画表である。エクセル上で播種予定日を入力すると各栽培を行う予定日を把握でき、生産計画を立てることができる。本事業では、コマツナとクウシンサイを供試して静岡大学で播種から水耕栽培（写真3）を行い、温泉処理の開始日に苗を井川地区の白樺荘に運んで温泉水をかけ流して収穫までの1週間栽培を行った（写真4)。

第２表　温泉水を活用した葉菜類の栽培計画

作業		日数	予定日
播種		0	10/1
育苗	開始	10	10/1
	終了		10/11
水耕	開始	14	10/11
	終了		10/25
温泉	開始	7	10/25
	終了		11/1
合計		31	31

写真3　静岡大学での水耕栽培の様子

このように播種、育苗から水耕栽培を慣行の養液栽培で行い、収穫前1週間を温泉水を処理することにより収穫物にトラブルを発生することなく生産することが確認された。

これらのことから、山間地でも可能な温泉水を利用したかけ流し栽培の仕組みを構築することで、温泉水を活用した生産の仕組みが活用できると考えられる。

以上のように、計画の一部を修正したが、温泉水を活用した仕組みを考案することができた。

写真4　井川地区で温泉水をかけ流して水耕栽培した様子

(3) 実績・成果と課題

本事業により、温泉水を葉菜類の養液栽培に利用できることが明らかとなった。生産システムとして利用するためには培養液として理想的な状態に調整する必要があるが、高度な分析と調整が必要となり、現地で生産システムを構築するためにはそれなりの設備費を要する。しかし、本事業で検討したような、あらかじめ慣行の方式で生産し、生育のためにある程度調整された養分を吸収する必要がなくなった時期から収穫までの間のみを温泉水で育成する生産方式はより簡易な栽培方式として有用で、このような生産の仕組みを活用して、白樺荘の客数に応じて野菜を現地調達が可能にできるなど、採れたて野菜を活用したビジネスを展開する可能性もある。しかし、周年生産を行う上では生産システムを構築する必要があり、特に冬の暖房対策と出荷計画に応じた生産体系の構築が課題である。また現状の温泉水は植物栽培するには水温が高いため、かけ流し温泉水を利用した栽培方式に適した作目を選定することや、それによる品質等への効果や、衛生面等についての検証を行う必要もあるだろう。

(4) 今後の改善点や対策

養液栽培で多くの作物を生産することは可能である。しかし、周年生産を目的とした場合での出荷計画を達成するための準備が必要である。冬にはそれなりの暖房施設が必要とされ、年間を通じた稼働状況の想定も必要であろう。また山間地での生産には鳥獣害対策も必要で、地域での取り組みとして様々な対策も求められる。

５地域への提言

温泉水を活用した食材の供給は、本事業で取り組んだ栽培体系の構築によりある程度可能であろう。まずは、露地野菜等現地調達されている仕組みに比べたメリットを明らかにすることと、生産システムの構築に向けた仕組み作りが必要である。山間地でのハウス設置が困難であれば小規模な植物育成システムを活用するなど、ユニークな取り組みも可能かもしれない。

６地域からの評価

井川振興会からの評価は以下のとおりである。

pH値の高い温泉水を培養液として作物を育成することは困難であると予想していましたが、高度な知識や技術を必要としない水耕方法が提示されたことで、温泉水を利用した栽培が実現性を帯びてきたと感じています。周年生産が可能になれば、休耕期でも地元の採れたて野菜を宿泊施設や飲食店で提供できるようになり、井川の魅力増進につながると期待しています。

幼児期における生物多様性学習プログラムの開発に関する研究

静岡大学 教育学部 理科教育講座　郡司研究室
教　　員：准教授 郡司賀透
参加学生：坂田尚子（静岡大学STEAM教育研究所・研究支援員）
吉村有加（静岡大学教育学部研究補佐員）
角谷貴紀　田中豪

１．要約

静岡市は豊かな自然に囲まれていながら、自然と触れ合うことが苦手な保護者や子どもたちがいることが報告されている。幼い子どもとその保護者にとって、自然体験教室などの行事へ参加し自然と親しむ機会に関する情報が十分届いておらず、機会そのものも少なく十分活用されていないのではないかと懸念される。そのため、幼児期に自然に触れあう体験機会を多く保証し、自然を大切にする心を育む幼児教育の役割はますます大きくなっている。そこで、幼い子どもでも体験できる生物多様性の保全につながる体験的な学習プログラムを開発し、保育園・こども園等で実践する必要があると考えた。

市内の保育園・こども園から協力園を抽出して、開発したプログラムを実践し、活動結果の検証とさらなるプログラムの改善という研究過程を経て、市内の幼児教育の現場に、モデルプログラムとして提示することを目指している。今後、このプログラム提案を参考にして多くの園で実践されること、また別のテーマで生物多様性学習プログラム開発をして各園に提示することなどを通して、子どもたちが自然と触れ合う機会が増え、幼児教育の現場で環境教育的な活動が広がっていく可能性を模索した。

２．研究の目的

本研究では、子どもたちの情意面の発達や豊かさとあわせて、自然体験を単なる体験にとどめず、学びの機会に変えていく方策を探っていきたいと考えた。環境教育は、自然科学に基盤をもつものでなくてはならないと考えるので、幼い時期に過度の負担なく自然科学的なものの見方、考え方に触れられるような、生物多様性の学習プログラム開発を目指す。

幼児期にふさわしい、科学的な基盤に立った環境教育のプログラムを協力園の保育教諭たちと開発・実践しながら、より質を高めるための議論を重ねていく。また、開発したプログラムは、他の保育士・先生方に周知し、こども園などの支援を行いながら、現場での実践につなげていくことを目的とする。

３．研究の内容

保育園・こども園で、身近に始められる生物多様性のプログラムのアイデアを提示し（表1)、興味をもった協力園を募って、各園のニーズに合うように研究を組み立てた。本年度から新たに、安倍口こども園、竜南こども園が参加した。横砂こども園、たんぽぽ保育園も昨年度から引き続き協力園となり、4つの園でプログラム開発をすることになった。

提示したプログラムは、子どもたちの活動を科学的・体験的な学びにするために、観察・比較・分類・推論・予想という科学的なプロセス・スキルを内包できるものとなっている。また、子どもたちの興味や関心を高く維持するために、活動が自分事となるよう飼育・栽培、作品作りなど楽しい作業を取り入れることにした。ゲストティーチャーとして、大学側の講師や院生などが関わり、子どもたちと共同作業を通して人間関係を築いていくことも考慮した。幼児教育を担う保育教諭とのネットワークをつくるためであり、今後の幼児教育における環境教育を続けていく連携のためでもあった。

表１．2022年度　生物多様性実践プログラム（案）

テーマ（季節）		Ecology・多様性	備考
1	植物と虫のかかわり(春)	草・木、昆虫、 食物連鎖、繁殖など	チョウ、アブラムシ、テントウムシ、アワフキムシ、春の花
2	水辺の小さな生き物（夏）	川、岸辺の環境、水質など	水棲昆虫、水辺の生き物
3	ビーチコーミング(いつでも)	海、自然、人とのつながり	貝殻、石、砂、海藻、プラスチックなど
4	どんぐり（秋～冬）	木・森林、生き物	どんぐりの多様性、栽培
5	ダンゴムシとミミズ（いつでも）	土の上の生き物、分解者、	落ち葉のコンポスト、ダンゴムシ、ワラジムシ、ミミズなど
6	ビオトープ(いつでも)	草・木、昆虫、 食物連鎖、繁殖など	トンボ、チョウ

４.研究の成果

(1)当初の計画

安倍口こども園では、ビオトープに興味があるということで「身近なビオトープづくり」を、まずはメダカの飼育からスタートすることにした。たんぽぽ保育園でも同様に、「身近なビオトープづくり」を行うことにしたが、子どもたちがダンゴムシに興味を持っていることから、「ダンゴムシのおうちづくり」をとおして、生き物のすみかとしての環境に注目するようなプログラム開発をすることにした。横砂こども園は、昨年度研究終了後も引き続き、園独自で「ビーチコーミング」をやり続けており、「海の学習」を深めながら袖師の海からつながった庵原川の河口付近での観察に移行し、「海から川へ」と観察と学習を拡張していくことにした。生き物のちがいや環境に関して注目し、フィールドワークを重視することにした。竜南こども園は、園に十分に活用・整備されたビオトープがあり、これを使った自然体験・教室が望まれるということで、ビオトープでの観察や遊びのプログラム開発をすることになった。保育教諭たちとともに園の状況やニーズの洗い出し→実践計画立案→プログラムの再デザイン→実践→振り返り→プログラムの改善という研究過程を経て、幼児教育の場で実践可能なプログラムの開発に取り組む。実践する際は、大学からの講師が保育教諭とともにティームティーチングの形態で行う。

(2)実際の内容（Ａは予定どおり、Ｂは一部修正、Ｃは中止など）とその理由

Ｂ　（一部延期）

新型コロナウィルス感染症の状況を注視し判断しながら、各園とも研究計画立案と実践を行った。夏から秋にかけての第5波、年明けの第6波と2回の停滞時期を経て、後半の実践がすべて延期となったため研究計画を修正せざるを得なかった。園によっては、早めに調整ができていたので、実践をかなり進めることができたところもあったが、今年度初めて参加する園などは特に、研究計画を立てるまでに時間がかかり、計画を立てたるのがやっとで、その後の実践を進めるのが難しいことが多かった。中止としたわけではないので、今後、感染状況が落ち着き各園で活動が再開できるようになったら、計画を構築しなおしできるだけ実践していくことになっている。おそらく、当初の研究期間を過ぎてしまい来年度にずれ込むと考えられる。そのため本報告書には、本年度内で実践できたところまで記載した。

(3)実績・成果と課題

＜安倍口こども園＞

今年度になって、メダカを受け入れることになったため、まずは「メダカのすみかづくり」を園独自で行った。その後メダカの飼育に関して、大学と協働で子どもたちの活動プロラムを実践し、園庭にチョウを呼ぼうと「身近なビオトープづくり」をするために、キャベツを植え付けたりした。メダカや野菜の寒さ対策など、子どもたちが知恵を出し合って活動を作り上げていけるように、プログラムを作った。活動を進めるときに、地域のJAとのつながりができ、サポートを受けることができた。まとめの会・プログラム実践の検証は年度内には実施できないため、電話にて、保育教諭にインタビューを行ったところ、日々子どもたちとキャベツやメダカを観察して世話を続けているとのことである。

写真１．　12/16　メダカのお引越し

表２．安倍口こども園での実践研究の進め方

月日	内　　容	研究ステップ
10月7日	研究の概要説明、状況・ニーズの調査	状況把握・ニーズの洗出し
11月24日	「身近なビオトープづくり」プログラムの提示 園に合わせた調整、活動の進め方確認	プログラム再デザイン 計画立案
12月16日	①「メダカのお引越し」	実践
12月20日	②「キャベツの植え付け」	実践
2月3日	③「冬、メダカはどうしてる？」**→延期**	**活動プログラム再構築が必要**
3月1日	④「キャベツにチョウは来たかな？」**→延期**	
	⑤まとめの会・プログラム実践の検証	振り返り、プログラム改善

＜たんぽぽ保育園＞

昨年度は、「ビーチコーミング」に取り組んだが、本年度は「身近なビオトープづくり」として、園庭に衣装ケースを使った手軽なダンゴムシのおうちを作ったり、ダンゴムシのおうちのための落ち葉のコンポストを設置したり、土の中の生き物たちとその役割を意識したプログラムを開発・実践することになった。2回の活動が一端延期になったが、屋外での活動ということもあり、「ダンゴムシのおうちづくり」を当初の予定でスケジュールを合わせていた、3月8日(火)9:30～実施した。

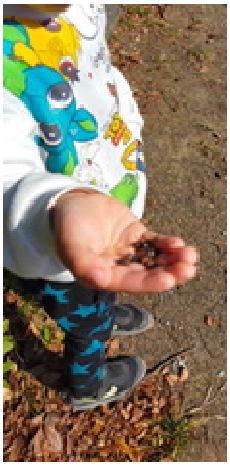


写真2.　写真3.　ダンゴムシはいるかな？

写真4.　写真5.　ダンゴムシのおうち作り

園庭でダンゴムシを観察できるようになったことを子どもたちだけでなく育士もとても喜んでくれた。ダンゴムシのお家を設置したところ、すぐに小さな子どもたちも寄ってきて、みんなだ楽しんでいる様子があった。この後、ダンゴムシのお世話を通して、小さな生き物にふれる機会がさらに増えていくと考えられる。

表３．たんぽぽ保育園での実践研究の進め方

月日	内　　容	研究ステップ
10月19日	研究の概要説明、状況・ニーズの調査	状況把握・ニーズの洗出し
12月9日	「身近なビオトープづくり」プログラムの提示 園に合わせた調整、活動の進め方確認	プログラム再デザイン 計画立案
2月7日	①「ダンゴムシのおうちづくり」**→延期**	
2月22日	②「落ち葉のコンポストをおこう」**→延期**	
3月8日	①「ダンゴムシのおうちづくり」と ③「ダンゴムシの観察１」	延期分の実施 これからの活動確認
	④「ダンゴムシのおうちの手入れ」	**活動プログラム再構築が必要**
	⑤まとめの会・プログラム実践の検証	振り返り、プログラム改善

＜横砂こども園＞

昨年から引き続き、園独自で月に1回～2回「ビーチコーミング」を行って、身近な所から海の学習が根付いてきた。今年度は、海の学習をつづけながら、近くの海に流れ込む庵原川の河口にも興味が出てきた子どもたちのために、川の観察を取り入れることになった。子どもたちは、海と川の環境のちがいをまずは香りから感じていたそうだ。

写真6. 袖師港のテトラポットのすき間を観察

駿河湾の話と海洋プラスチックの問題について「海は泣いているよ（サイエンスぽけっと)」という絵本を読み聞かせてから、これまでビーチコーミングを継続してきて気がついたことなど、子どもたちから話をしてもらった。みんな言いたいことがたくさんあった。マイクロプラスチックを見つける実験も行った。3月9日にはまとめの会をして、保育教諭に活動の振り返りのインタビューをした。今年度の「海の学習プログラム」の実践を通して、子どもたちの学びと育ちを支える活動が、地域を刺激して多くの人々を巻き込んで行えた。そのことが大きな成果として挙げられる。また、子ども一人一人の育ちが感じられることで、保育教諭たちにとって、成果を感じられるものとなった。

表４．横砂こども園での実践研究の進め方

月日	内　　容	研究ステップ
10月21日	研究の概要説明、状況・ニーズの調査	状況把握・ニーズの洗出し
11月24日	「海から川へ水辺の学習」プログラムの提示 園に合わせた調整、活動の進め方確認	プログラム再デザイン 計画立案
1月12日	①「ビーチコーミング」	実践
1月21日	②「ビーチコーミング」	実践

2月9日	③「海から川へ」	園のみで実践
2月21日	④「駿河湾のお話」プラスチック汚染について	実践
3月4日	⑤「庵原川河口の観察」	園のみで実践
3月9日	まとめの会・プログラム実践の検証	振り返り、プログラム改善

＜竜南こども園＞

昨秋に打ち合わせをしたが、園の行事等でスケジュールがうまく組めず、年明けからの活動だけを決めていた。その活動も新型コロナウィルス感染症蔓延のため延期せざるを得ず、その後の日程調整も詳細決定も行えていないが、状況が落ち着いたら再度調整をして改めてプログラムを見直したうえで実践をすると合意している。園には素晴らしいビオトープが設置されている。そこを使った自然観察や活動のプログラムづくりを提案している。実践回数も、他の協力園と同様4回程度確保できればと考えている。

表５．竜南こども園での実践研究の進め方

月日	内　　容	研究ステップ
10月1日	研究の概要説明、状況・ニーズの調査	状況把握・ニーズの洗出し
1月24日	「ビオトープでの活動」プログラムの提示 園に合わせた調整、活動の進め方確認　**→延期**	プログラム再デザイン 計画立案
1月31日	①「冬;生き物はどうしているかな？」**→延期**	
	②「春;生き物はどうしているかな？」**→未定**	
	まとめの会・プログラムの検証　**→未定**	振り返り、プログラム改善

(4)今後の改善点や対策

今回は、協力園のニーズに合わせて「身近なビオトープづくり」「ビオトープでの活動」「ビーチコーミング」の3プログラムを開発・実践しようとした。実践が不十分だったが、今後も自然につながる多くのテーマに沿ったプログラムを開発・実践することを続けることで、子どもたちが自然と触れ合う機会が増え、幼児教育の現場で環境教育的な活動が広がっていく可能性が高まっていくことが見込まれる。屋外で活動することが多いため、活動中の安全確保は重要な視点である。本実践的研究では、大学側からの人員のサポートをつけることができたが、各保育園・こども園で独自に行う際は、園から移動する際の道中の交通安全の確保や、活動中の見守りの密度などを考えると、数人のサポーターを用意することができると良いと思った。

５.地域からの評価と地域への提言

本年度、4つの園での実践は思うように進まなかったが、それでも横砂こども園では、ビーチコーミングの活動を通して、子どもたちと地域の人々とのつながりができたり、安倍口こども園では、地域のJAとつながりができたりしている。子どもたちが地域の温かな見守りの中で、地域の大人を巻き込んだりしながら環境や生物多様性に関する体験的な学びを行えるのは、大人にとっても生涯学習の場となりえる地域のポテンシャルを示すものだと考えられる。本研究は、幼児教育の現場での自然体験・環境教育の視点から進めてきたものであるが、「地域(の大人)を巻き込む」視点を加えれば、自然を大切にし、生物多様性の保全を意識できる地域を作っていくことを模索する手立てになるかもしれないと考える。

（成果報告書）

人生１００年時代、高齢者の地域活動・社会参加を促進したい！
「繋ぐ・私たちの言葉―静岡を笑顔に―」

静岡大学 教育学部杉﨑ゼミ（研究室）
教　　員：教　授　　杉﨑　哲子
参加学生：田端美帆、高橋萌、熊谷咲良、鈴木有紀、山田彩加音、清水彩果、杉本真緒、
宮澤杏佳、青木夢稀、伊藤彩花、川嶋桃子、石黒花、杉山桜蘭子、給田優花

１．要約

生涯にわたる健全な社会生活の実現を目指す静岡市高齢福祉課の「しずおかハッピーシニアライフ事業」に共感し、「語る（交流）、飾る（展示）、綴る（歌集作成）」の流れで「繋ぐ・私たちの言葉―静岡を笑顔に―」の事業を進めた。市内８か所での対面交流の他、メールやFax、手紙などにより100名を超えるシニアの方と語り合い、静岡の自然や日々の暮らし、数々の思い出を毛筆書に表して短歌を詠んだ。それらを展示や歌集の形で可視化し共有できるようにし、更に広く静岡を笑顔にできた。

２．研究の目的

大学生は、下宿生活や遠方からの通学、学業とアルバイト等に時間を要して地域との交流の機会がほとんどなく、高齢者もまた、講座への参加等の受動的な学びに留まっている。そこで、生涯にわたる健全な社会生活の実現を目指す静岡市の高齢福祉課に共感し、高齢者の社会参加の促進に寄与すべく、高齢者と学生とが「共に学び合う」場を設定する。その際、国語に携わる者として、言葉や文字による表現を軸にした活動を行って、静岡の自然や暮らしを見つめながら思いを共有できるよう工夫する。シニア世代の人達にとって、書表現や短歌作り等の創造的な活動は、主体性を呼び起こさせ認知面にも有効に機能する。広い視野が求められる教員志望の学生にとってシニア世代の経験知に触れる機会は貴重であり、シニア世代にとっても学生の支えになれることが幸福感の高揚に繋がると考え、本研究を進める。

３．研究の内容

地域社会では様々なコミュニティ活動が展開されているが、それらは、自治体や学校、企業等、各自の所属によって区分けされた限定的なコミュニティに留まっていることが多い。また、かつては高齢期において幸福感の向上が認められていたが、変化が大きく未曽有の事態に遭遇している現代では、高齢期にも不安が膨らみ、もともと幸福感を抱きにくい若年層の不安感はさらに大きくなっている。

そこで本研究では、高齢化社会の課題の一つであるコミュニティの強化と新たなコミュニティの形成に向けて、高齢者と大学生とが共に学ぶ場を設定する。机上の空論ではなく、研究自体が直接的な地域貢献として広く公平公正に還元できる活動を行いながら、「共に学ぶ」交流の在り方について検証する。

４．研究の成果

⑴ 当初の計画

申請当初は、市内のシニア世代に呼び掛けて20名程度の参加者を募り、シニアの方と学生とが一緒に市内をバスで巡って交流する中で短歌を作り、それを短冊に書いて展示するという計画を立てていた。

⑵ 実際の内容　（Ｓ：状況に応じて適宜修正を加え、申請時の計画の数十倍もの成果を確認できた。）

新型コロナウィルスの感染拡大の中、若者との交流に難色を示されることを懸念していたが、シニアクラブや福祉施設を中心に100名程の申込みがあった。そこで、人数制限をせず市内８ケ所で対面交流を行い、メールやFAXでの参加も可能として、「語る」「飾る」「綴る」の三段階で進めることにした。

◆【語る】

○市内８カ所での対面交流　　＜当日の参加者と担当者＞

・10/29（金）10：00～11：00　於：由比交流センター（入山シニアクラブ）　17名、学生3名、杉﨑
・11/ 4（木）10：00～11：00　於：清水北部交流センター　10名、学生3名、杉﨑
・11/ 8（月）10：00～11：00　於：静岡天満宮　5名、学生2名、杉﨑
・11/15（月）13：00～14：00　於：船越老人福祉センター　16名、学生3名、杉﨑
・11/22（木）10：00～11：00　於：足久保団地公民館　16名、学生3名、杉﨑
・11/25（木）10：00～11：00　於：清水老人憩いの家清閑きらく荘　10名、学生3名、杉﨑
・11/25（木）13：30～14：30　於：清水南部交流センター　10名、学生3名、杉﨑
・11/26（金）10：00～11：00　於：由比交流センター（由比シニアクラブ）　19名、学生5名、杉﨑

○個人参加（メール、Fax、手紙）…　7名

対面交流では、「守りたいもの（自然、暮らし、人…）」を毛筆で書き、それについての思い出や地域の自然の魅力、辛かった戦争体験などが語られた。それを学生が聞き取り書き留めて短歌作りを支援した。時間内にまとめるのが難しい場合は、大学に戻ってから語調を整えて短歌を完成させた。

◆【飾る】　対面時に書いた毛筆書「守りたい」を市街地のSDGsコーナーと市役所ロビーに展示した。

・12/1～1/28　しずおか焼津信用金庫追手町支店ディスプレイ
・1/30～2/ 8　静岡市役所静岡庁舎・葵区役所

「繋ぐ・私たちの言葉ー静岡を笑顔にー」　守りたい　自然 人々 この暮らし 語り歌にし 皆で願う

◆【綴る】

参加者の方と学生の歌を収め、田辺市長、熊倉学部長、高齢者福祉課の皆さんからも短歌を添えた玉稿をいただいて歌集『繋』を上梓することができた。ここには対面交流で生まれた短歌だけでなく、手紙、faxやメールでの交流の方々の歌やメッセージも掲載した。歌集は、参加者全員に配付するとともに、交流会場、大学の図書館にも寄贈した。これを手にした人々が歌の世界に誘われて作者の思いに共感し、誌面上での交流を楽しまれることを期待している。

(3)実績・成果と課題

・**対面交流の実現**／多くの方から申込みがあったが、日程調整をして全ての方と交流できた。ただ、クラブ等は集う日が決まっており部屋の空き状況の都合もあって全て平日実施となったため、対面交流を担当する学生が限られてしまった。出向けなかった学生には学内作業を依頼したが、やはり対面の楽しさには及ばない。今後は事前に日程を調整して多くの学生が担当できるようにしたい。

・**事前アンケート･ワークシートの送付**／可愛いイラスト入りのチラシに親しみを持ってくれたが「短歌作りは難しい」という声も聞かれたので、学生との交流がメインであると伝えた。学生から、事前に書字や文字に関するアンケートと自己紹介を兼ねた歌を送ったところ、参加者の多くが、過去には手書きに拘っていたが実生活では書字の機会がほとんどないと回答した。久しぶりの書字活動を楽しんでくれたようである。和歌作りに抵抗のない方々は、回答と共に自作の短歌を送ってくれた。

・**「語る」当日の流れ**／学生にはシニアの方との会話に徹するように伝えて杉﨑が進行し、時間内に短歌にしようと焦らず「言葉を預かる」ことをゴールと考えて展開した。毛筆で書いて意識化したことにより、スムーズに言葉を紡ぐことができた。どの会場でも学生が寄り添い発話を引き出してくれたので、最初は遠慮がちだった方からも色んな話を聞くことができ、笑顔溢れる充実した時間となった。

・**毛筆書の制作**／「守りたい」というテーマで、自分自身、自分の身近な自然等を見つめるところからスタートした。SDGsを意識化できたことも大きな成果である。自分の脳裏に浮かんだ言葉を文字化することによって、書き手本人がその視覚情報を客観的に再認識することができ、自分の「想い」に関連する言葉を自然に紡ぐことができた。ただしシニアの方は、若者以上に学習に対する規範意識が強く「うまく書けないと恥ずかしい」と思われる人が多いため、書には記名はしないこととした。

・**短歌の作成**／毛筆書や短歌作り等の創造的活動は、認知予防にも効果的であるという。しかし最初は「難しい」と感じる人が多かったため、容易に取り組めるように交流の中から言葉を紡ぐことにした。「今まで自分のことを語ることはなかった。学生さんがじっくり聞いてくれたので凄く嬉しく思ったこの出会いを大事にしたい。」「歌にすると何気ない日常が一つ一つ輝いて見える。」との感想が届いたとおり、具象化された自分の「想い」を他者が受け止め共有してくれると自己肯定感が高まる。
対話している学生にもその気持ちが伝播して、双方が幸福感に包まれていったと考えられる。

・**「飾る」展示**／展示して市街地を彩り、道行く人にメッセージを届けた。多くの参加者は遠方のため、展示後にパネルを交流会場に届ける予定だったが時間的に困難となり、歌集に掲載するとともにラミネートして会場に送付した。展示の目的を明確にし、画像での投影等も含めて検討していきたい。

・**「綴る」歌集**／書作品を展示する際は、作品がどれも輝いて見えるように飾る位置を工夫する。歌集も同様に全ての作品が生きるレイアウトを心掛け、対面交流のページには一人一作品を載せることにし、同一作者の歌が並べないよう編集した。全ての短歌を一冊の歌集に掲載することによって、作者である参加者が、面識のない他者の歌に共感したり知らない風景を感じ取ったりして、一読者としても主体的に関わることができる。ペーパレスが叫ばれデジタル化の進む現代においても、頁をめくる手触りやワクワク感、活字を目で追い読み味わう時間を、「作品との対面の出会い」として大事にしたい。

「共に学ぶ」交流の在り方と可能性

講座などの受け身の学習が多いシニア世代にとって、身近な自然や自分自身の経験を振り返り自分から学生に向けて語り、自らが文字化し言葉を紡ぐという主体的な活動をすることの意味は大きい。指示通りに「もの」を作り上げる体験等も有意義ではあるが、言葉や文字を取り扱う活動は、それ以上に深く強く情動を揺さぶる高度な学びである。しかも、それは他者から与えられるのではなく、自分だけの、自分にしか具象化（書くこと・語ること）のできないものであり、それを活性化するために交流が生きてくる。他者が聞き取り認めることによって、発話者、書き手は自己を肯定できて達成感に結びつく。交流活動を円滑に進めるには、スタート時において双方に共通のテーマを設定するとよいだろう。

シニアの方との交流において、学生には、指導者ではなく支援者として「共に学ぶ」位置にいてもらいたいと考えている。学生が人生の先輩たちに対して敬意をもって接すれば、将来に不安を抱えている自分たちに向けて、シニアの方から温かい眼差しが注がれていることを実感できる。そうして学生自身が救われていく。各々の限定的なコミュニティを異年齢へと拡げ展開する交流は、双方にとって心豊かな生活に繋がる幸せな出会いになる。「共に学ぶ」交流とは、異年齢のみならず、多文化共生、バリアフリーの意識化をも可能にし、他者を認め支え合うインクルーシブ社会の実現に寄与できると考える。

(4) 今後の改善点や対策

学生達は懸命に取り組んでくれており、「もっとよくしたい、喜んでもらいたい」と考えていたが、多忙な時期であったために創意工夫や次に向けての行動が遅れがちで、杉﨑からの指示を待って動くことも多かった。長く敷かれたレールを進んできたからかもしれない。また、残念ながら大学内には、地域貢献に消極的で自らの指導範囲のみに学生を集中させたがる教員がおり、その影響を受けた学生は、本事業への参加にあたって時間の使い方に苦労していた。今後は、学生の主体性を喚起させられるよう教員側にも働きかけ男子学生にも声掛けをして、「ＳＤＫＧｓ＝静大国語の学生達」として活動したい。

今回、更に広い交流をと考えて、試みにHP上に掲示板を開設した。しかしシニアの方にとっては誰（学生個人または数名）と関わるかが重要であって、不特定多数との繋がりを躊躇される様子が見て取れる。円滑にスタートして交流を深められるよう、予め担当する学生を決めて進めたいと考えている。

５．地域への提言

本学では、ハラスメント防止対策の観点から、直接的か否かを問わず、単位化された授業や学生自身の研究ではない事業への協力について、ボランティアの強要が禁じられている。今回は学生の協力が不可欠だったが、大学と市とでは予算執行の規定に差があり大いに混乱した。協議をお願いして解決できたが、既に分かっていることなので、事前に事務業務の担当者間で解決しておいていただきたい。

また、学内業務との両立に努めながら費用対効果を最大限にすべく懸命に進めたが、助成の承認時期が遅くて後学期しか活動できないため会計処理上等の事務作業が短期間に集中し、歌集編集では徹夜の作業が続いて大変だった。実施可能な期間に幅を持たせ、事務作業の簡素化を強くお願いしたい。

６．地域からの評価

学生の皆様とシニアの皆様の交流会場では、地域特有の言葉が響き、参加された方の笑顔とともに言葉が丁寧に紡がれていく様子を拝見することができました。また、交流会後も携帯メール等でコミュニケーションを取りながら冊子を完成させており、学生･シニア双方にとって貴重なふれ合いの機会となったのではないかと感じています。会場となった施設等から次年度以降も継続したいとの意見もあり、今回のような交流の機会が今後も続いていくよう市としても支援していきたいと思います。

（静岡市高齢者福祉課）

（成果報告書　記載方法）

植物を通じた地域および世代間の交流

静岡大学 理学部 植物生化学研究室
教　　員：准教授 天野 豊己
参加学生：上野 萌子、渡邉 大翔

１．　要約

静岡市健康文化交流館 来・て・こより徒歩で５分ほどの場所にある小鹿モデル児童遊園から植物を採取して、植物の種名の同定を行った。これを押し花にして、レジン（樹脂）に封入することで標本を作成した。植物の採集方法、分類と同定の方法、標本の作り方などの説明を行った。

２．　研究の目的

植物の採集方法、標本の作り方、分類法、同定の仕方を通じて交流を行う。

３．　研究の内容

本事業は、静岡市健康文化交流館「来・て・こ」にて行った。感染拡大防止のために、3人掛けの長机一つに一人ずつ座って頂いた。長机の間には、アクリル製の透明な飛沫防止板を設置した。受付は、会場外に設置して展会場に入る前にアルコールにて手指の消毒を行って頂いた。この時にテキストと名札を配布した。事業開始後の数分間は、静岡市の高齢者向けの事業の紹介を市職員の方より行った。その後、本事業の開始となった。

講義の様子

本事業は、まず「来・て・こ」の近所にある小鹿モデル児童遊園に行き、そこで植物採集を行った。ここは「来・て・こ」より歩いて3分ほどの距離にある公園である。公園の使用許可は、共同で事業を進めて下さっている市職員の方々が取って下さった。

公園での植物採集

公園に参加者がついた後は、植物が群生している部分をひとつひとつ報告者が参加者に説明しながら巡った。当日はつくしも多く見られた。つくしは参加者たちの興味を強く引いた。

その後トウカイタンポポやセイヨウタンポポが生育している場所で、両者の見分け方の説明をした。カラスノエンドウやクサイチゴ、キランソウなどが生育していたので、それぞれの特徴や名前の由来などの話をした。その他、この公園にはヒメウズも生育していた。ヒメウズは比較的人の往来の少ないところに生育する。街中の公園としては、あまり荒らされていない良い公園であることが分かった。

参加者による採集

公園内の植物の説明が終了した後に、約15分の植物採集の時間を取った。植物採集の方法は、大学の実習で行なっているものと同じく剪定鋏とビニール袋を持ち、植物は大きめにとって、花、茎、葉、根などを残すように伝えた。10分ほどで大体の採集が終了してきたようであったので、予定通り15分で公園を出た。帰り道には、路傍にある野草に

参加者の方々の目が向いて、植物の種名を多く問われた。それらに答えつつ、交通安全に注意しつつ「来・て・こ」まで戻った。

「来・て・こ」の会場に戻ると、新聞紙を広げて採集した植物を広げてもらった。プラスチックのカップを一人に10個ほど配布し、取ってきた植物を生けてもらった。１つのカップに１つの種類となるように植物を分類してもらった。新聞紙の上に乱雑に並べられていた植物が、カップに分類されることで、種ごとに整理されていく過程が見られた。分類された植物を見て植物図鑑のようだなどの声が上がった

学生たちによる説明

ここで自分の気に入った植物を押し花としてもらった。押し花には、早く乾燥させるためのシリカゲルのシートを用いた。ここに植物を挟み5人分ずつのシートを積み上げて、約5kgの重りを置いた。この状態でしばらく吸水する必要があるため、この間に図鑑を用いて種の同定を行った。

同定作業

図鑑の見方はテキストに記載しておいたが、初回から同定するのは難しいため、参加者の机間を巡視しながら出現した植物をホワイトボードに記載して行った。合計で24種が採取された。参加者は、その名前と図鑑を見比べて自分の取った植物の同定を行っていた。同定した種は付せんに種名を書いてカップに貼ってもらった。種名は何度か聞いて覚えることが多いため、このようにしておくと種名を書いておくと覚えやすいためである。

参加者同士の相談

私自身が予想していなかったこととして、初対面同士の参加者が同じ植物の名前を調べるために協力するということがあった。例えば、スズメノカタビラを採取してきた参加者が、それの入ったカップを持ち寄って参加者同士で図鑑を見ながら相談しつつ同定を行っていた。参加者同士の交流は良いことであるため、次回以降は、種の同定の作業の時に参加者同士で相談すると楽しいと思いますなどを伝えてで交流を促すようにしたいと思う。

分類された植物

種名の同定がだいたい済んできたところで、レジン（樹脂）に押し花を包埋する作業を始めた。レジンが手につかぬようにニトリル手袋をつけて行なった。机の汚損防止のため、カレンダーの裏紙の上に作業用のクリアファイルを置いて作業を行った。直径9cmほどの円型のシリコンモールドを参加者に配布した。その他、楕円形や四角形なども用意した。円型のモールドは扱いやすいため、円型で作業を行ったあとに、その他の形を使用してもらった。

植物の解説

円型のモールドにはレジン（樹脂）を８割ほどいれて、配布したピンセットで自分の作成した押し花をレジンの中に沈めた。この時デザイン的に工夫しつつ押し花を置いていく。レジンの中に花を置き終わったら、紫外線照射装置に入れて表面2分、裏面2分の紫外線を照射することで固化させた。紫外線照射後は発熱するのでしばらく待って冷えてからモールドより取り出すとうまく行く。この冷やしている間に次の作品を作成した。

冷えて固まったところでレジンをモールドより取り出し、キラキラとした装飾の入った袋に入れてもらった。これは本日の作品として持ち帰って頂いた。これと同時に自分が同定した植物の名前の書いてある付せんも希望に応じて持ち帰って頂いた。

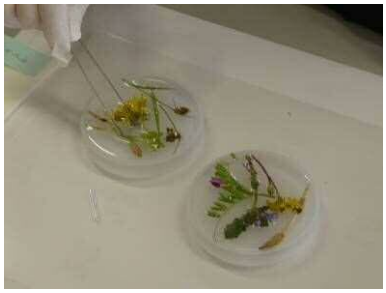
作業時間は約2時間を予定していたがレジンへの封入をもう少しやりたいという要望があったため２０分ほど延長して15時20分頃に終了した。参加者より帰り際に楽しかったとのお礼の言葉を多く頂いた。

押し花にする前

４．　研究の成果

(1)当初の計画

参加者の方々には積極的に植物の分類を行われた。本事業の当初の目的は果たされたと思う。このことに加えて、本事業では新たな発見があった。



レジンへの包埋作業

(2)実際の内容（A、予定どおり）

植物の分類は大学で行う場合、学生たちが植物を見慣れていないことが多い。このため図鑑を見る時に植物の特徴から検索することは一般に難しい。本日のシニアの方々との植物の同定を行ってみて感じたことは、植物について既に多くの経験を持っておられるということであった。

例えば春の野草の一つにキュウリグサというものがある。これはワスレナグサと同じムラサキ科の植物であるため、花の形がワスレナグサとよく似ている。これを採取された方が「先生、このワスレナグサみたいな植物は何というのでしょうか」と質問された。ワスレナグサと同じムラサキ科の春の野草を図鑑で探せば確実にキュウリグサにたどり着ける。このセンスが素晴らしいと思った。

固化前の作品１

もう一点、参加者の方々の植物に対する経験が豊富であると思ったところは、植物の切り方である。植物が花、茎、葉、根によりなっている。このことを既に体験的に知っておられ、根の一部を含めて採集されている方が多かった。大学生と植物採集を行うと、葉を一枚だけ取ってきたり、花のみを取ってきたりすることが時々見受けられる。これまでのたくさんの経験の中で、例えば草むしりや家庭菜園の世話などを通じて植物というものを熟知されているように思われた。

(3)実績・成果と課題

これらのことから、シニア向けのサイエンス講座では、大学生向けの講座とは少し視点を変えた準備が必要であることが分かった。学生向けの講座では、植物体のつくりや各部位の名称などから入る。つまり植物についてゼロから教えるという視点で説明を行う。これに対してシニア向けの講座では、経験をたくさん持っておられる前提でそれらを有機的に結びつける説明が必要であると考えられた。

固化前の作品２

例えばキク科の花の特徴である頭状花序の説明などは、大学生向けの時よりも少し踏み込んだところから説明できると思われた。専門用語を使うというのではなく、頭状花序の形はすでにご存じであるため、模式図を見てもらって「キク科の植物の花はこのような形をしていますよ

ね」という問いかけで十分理解してもらえると思われた。

本講座を通じての自分にとっての大きな収穫はこの点である。大学ではこれからリカレント教育やリスキリングが行われる時代に入っていく。様々な経験を持たれた方々に対しての授業を行うことが増えると思われる。本事業は、経験を持った方々に向けての授業についての勘どころをつかむ良い機会となった。

本事業は本来は２月５日（土）の開催予定であったが、新型コロナウイルスのオミクロン株の蔓延により３月21日（月祝）に延期して行った。本事業の改善点としては、押し花にする時間が少なかったため、次回は電子レンジ等を用いて早く乾燥させる方法を用いることが良いと考えられた。厚みのある植物は、乾燥させることが難しい。この対処法として、粉末状のシリカゲルを用いて乾燥させることができる。このような方法を併用することで改善されると考えられた。

紫外線照射

５．地域への提言

本事業を通じて、強く印象に残ったことは、シニアの方々の学問への熱意の高さである。参加者の皆様は植物が好きで、名前を知っていくことに高い興味があるようであった。もし植物同好会のようなサークルが作られれば、かなりのレベルになると思う。

技術的な成長という点では、単発の講演会もサークルも同等の効果があると思われる。しかしサークルの良さは、技術的な向上に加えて参加者同士の交流や、助け合いながらの上達が可能となる点である。シニア向けの事業として、サークル活動の場があると良いと感じた。

固化後の作品

ここでいうサークルは、大学にあるサークルに近いものである。大学のサークルの良さは、まずは多様性である。学問的なものから体育系また芸術系と活動の幅が広い。そして年に何回かは対外試合を行って他校との交流を行っている。

大学のサークルのもう一つの良い点は、活動の年限が決まっていることである。一年生で初心者として入部し、２年生で技術的な向上、３年生でサークルの中核を担い、４年生で卒業していく。この四年間の間に１つのサークルに打ち込んで１つの技術を磨くものもいれば、様々なサークルを渡り歩いて広い知識と技術それから人間関係を磨くものもいる。

シニア向けのサークルにも、大学と同じく年限を区切った多種多様なサークルがあると良いと思う。例えば本事業で植物に興味を持った人が植物系のサークルに入ることができれば、より深く植物のことを知っていくことができる。年限が区切られない同好会等となると若干敷居が高いかも知れないが、大学のサークルのようなサークルであれば比較的気軽に加入して興味を深めることができる。

シニア向けの講演会等のイベントや深い活動を行っている同好会等は現在でも非常に充実している。この間をつなぐものとしてサークルが発達してこれば、シニアの方々の多様なニーズに応える社会的な基盤が充実してくるものと思われる。

６．地域からの評価

参加者たちは熱心に本事業に取り組んできた。参加者様からの感想として、事業中には時間が経つのが早いとの感想をいただいた。帰り際も楽しかったと言って頂けた。市役所の職員の方からも楽しいイベントであったとのコメントを頂いた。参加者の皆様方に喜んで頂けたのであれば幸いである。

静岡県立川根高等学校の魅力化向上

静岡大学 情報学部・情報学専攻 永吉研究
指導教員：教授 永吉実武
参加学生：花谷すず菜、細貝光、四方大輔、長谷川朝陽
近藤梨々花、大谷佑貴、大崎拓、松野優香
鈴木佳奈子、奥寺瞭介

1.要約

川根高校の魅力向上を通じて川根地域の活性化を目指すには、大学・大学生と連携しながら川根本町を題材としたテーマに、川根高校の生徒が主体的に取り組むことが有効であると考える。これは、生徒（川根本町出身者、川根留学生の双方）の地域への理解（新発見、深化）を促し、卒業後の自らの活躍の道を探索するきっかけとなるだけでなく、社会で活躍するための実践知を学び取るチャンスでもある。

そこで、川根本町の観光資源をより効果的に観光客や地域住民に広報するための施策とその実現手段を、川根高校の生徒と静岡大学情報学部の学生が共同検討した。具体的には、昨年度の本事業にて、静岡大学情報学部の学生が試作した観光客向けのスマートフォン・アプリ（謎解きゲーム）をベースに、改良を繰り返し実施するとともに、川根本町のステークホルダー（川根本町教育委員会や観光課など）の協力を得て実証実験を実施した。また、これらの過程等で得られた観光客に関するデータを用いて分析を行い、川根高校生と静岡大学情報学部の学生が双方に対して発表会を実施した。

2.研究の目的

川根本町が持続的にその魅力を維持・向上させ、川根高校の魅力向上による川根地域の活性化を達成するためには、長期的観点と短期的観点から川根高校のブランド力を高める戦略が必要である。長期的には、例えば、川根高校の生徒たちが主体的に企画を立てて推進するといった川根高校の自立心、地域愛を育む教育の特色を訴求した魅力づくりとその継続的な情報発信による認知度の向上が必要である。短期的には、川根本町地域を題材に川根高校が行っている総合的な探究の時間や課外活動をより充実したものとすることを通じて高校の活動の魅力を高め、川根地域内外からの入学率を高めていくことが必要である。

本事業の目的は、静岡県立川根高等学校の魅力を向上させることを目指し、これらの長期的観点と短期的観点の達成を目指して、バランスよい施策により支援することである。

3.研究の内容

本事業を通じて、2018年度および2019年度は、①川根本町「地域探究」の実施、②川根高校生徒向け動画編集講座の実施、③川根高校Webページのコンテンツ充実、④川根高校紹介動画制作を実施した。また、2020年度においては、川根高校の生徒が総合的学習や課外活動等を通じて、地域の魅力をより主体的に発信できるための基盤を構築することを目標に、スマートフォン・アプリLINEBotを用いた「謎解きゲーム」のプロトタイプ制作を実施した。また、プロトタイプには、川根高校の生徒が検討・考案した観光客向けの寸又峡を題材とした謎解き問題（「ナゾ」）を実装した。

これらを引継ぎ、2021年度は、2020年度に制作したスマートフォン・アプリの「謎解きゲーム」のプロトタイプを用いて、寸又峡の観光活性化を目指した実証実験を実施した。また、その過程で観光客から取得したアンケートデータの分析を実施し、川根本町観光課や川根本町町づくり観光協会に分析結果をフィードバックした。さらに、川根高校の教科「情報」の中で川根高校の生徒と交流を実施し、川根本町寸又峡の観光客に関するデータ分析を実施し、相互発表を行った。

本事業の研究の実施に際しては、川根高校、川根本町教育委員会と協働するほか、川根本町観光課、川根本町町づくり観光協会の協力を得た。

4.研究の成果

本研究では、川根本町の地域活性化を行うためには、川根本町の組織や人々が、世の中の環境変化に対応し、自らが情報・データを収集・分析し、これに基づく施策の検討・実行を行うことが必要であるという認識に立つ。そして、これを円滑に実行するための仕組みとはどのようにあるべきであるかを探索的に探究した。

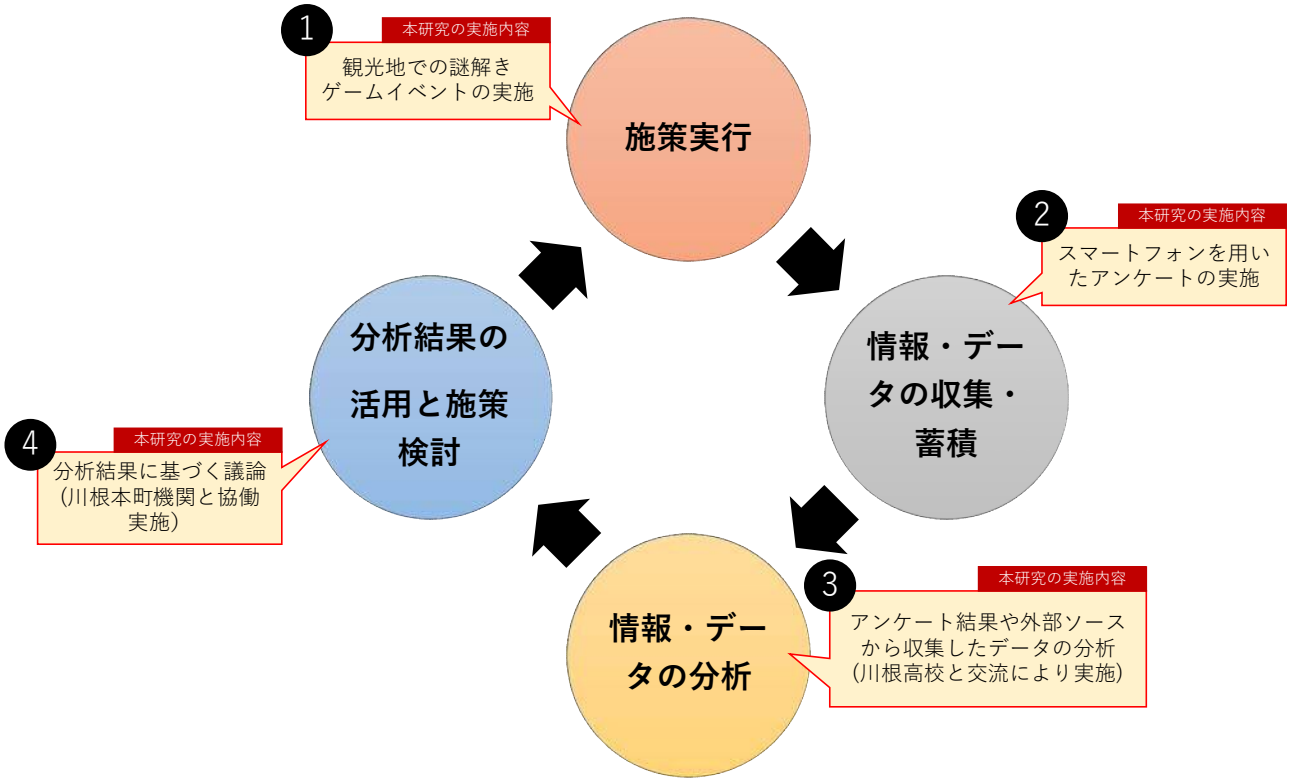


図1:　本研究の実施内容

研究の成果を、①観光地での謎解きゲームイベントの実施（施策実行)、②スマートフォンを用いたアンケートの実施（情報・データの収集・蓄積)、③アンケート結果や外部ソースから収集したデータの分析（川根高校との交流により実施）(情報・データの分析)、④分析結果に基づく議論（川根本町機関と協働実施）(分析結果の活用と施策検討)、の観点から詳述する。

①.観光地での謎解きゲームイベントの実施（施策実行）

(1)　当初計画：

2020年度にプロトタイプとして制作したLINE機能(LINEBot）を用いた「謎解きゲーム」(プロトタイプ）を用いて、観光客向けに紅葉時期に川根本町の寸又峡で実証実験を行う。

このために、寸又峡の視察を再度行うとともに、川根高校の生徒と共同で新しい「ナゾ」を制作する。

(2)　実際の内容：【A：予定通り】

①寸又峡の視察と計画立案

2021年8月2日（月）に静岡大学情報学部(一部、情報学専攻)の学生らが、川根本町観光課や川根本町教育委員会の協力により、寸又峡および夢のつり橋の視察を行った。また、同日に川根本町町づくり観光協会と協議を行い、新型コロナウィルス感染症拡大状況次第ではあるが、今年度の紅葉シーズンに

LINE機能(LINEBot）を用いた「謎解きゲーム」を実施し、これに協力することが合意された。

②2021年度版「ナゾ」および広告物の制作

①の視察結果に基づき静岡大学情報学部学生により実証実験で用いる2021年版の「ナゾ」を制作した。また、実証実験を広報するための広告用「のぼり」、チラシ等の制作を行った。

また、2021年9月12日(土)にオンラインで川根高校の生徒(2名)とオンラインで交流を行い、川根高校生徒と共同で「ナゾ」の制作を行った。

③実証実験

2021年11月17日(水)、20日（土）、21日（日）に川根本町の寸又峡にてLINE機能(LINEBot）を用いた「謎解きゲーム」(プロトタイプ）を用いて、観光客向けに紅葉時期に川根本町の寸又峡で実証実験を実施した。

(3) 実績・成果

①寸又峡の視察と計画立案

寸又峡の視察と川根本町町づくり観光協会との協議を経て図2に示す計画を合意した。

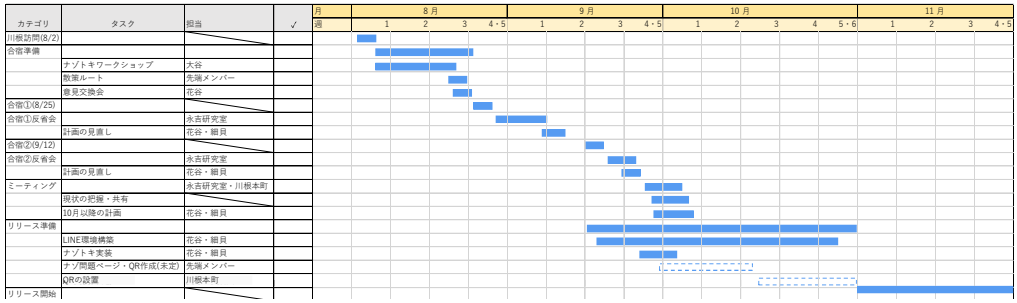


図2：実施計画

②2021年度版「ナゾ」および広告物の制作

川根高校生徒等との協力の下で、2021年度版「ナゾ」および広告物等を制作した。

文字を完成させよう！

つ＋ 小＝③

丨＋え－ 丶＝②

＼＋⊂＋゛ ＝⑤

つ＋⌣ ＝こ

１＋２＝④

③→②→③→②→⑤→こ→④

図3：制作した生徒協力を呼び掛けるチラシ、高校生制作のナゾ、広報用チラシ

③実証実験

実証実験を行った延べ3日間で216人分のLINEアカウント登録者が増加した。

図4：ナゾ(紙版・LINE版)および実施の様子(写真)

(4)　今後の改善点や対策

謎解きゲーム参加者数が予想を下回ったので、参加者数を向上のための施策を検討する必要がある。

②. スマートフォンを用いたアンケートの実施（情報・データの収集・蓄積）

(1)　当初計画：

謎解きゲームにアンケート機能を付帯し、観光客向けにアンケートを実施し、データ蓄積を行う。

(2)　実際の内容：【A：予定通り】

謎解きゲームにアンケート機能を付帯（LINE版、紙版）させ、観光客向けにアンケートを実施し、データ蓄積を行う。

(3)　実績・成果

紙およびLINE（Web）にてアンケートを実施したが、総じて紙によるアンケートの回収率が高かった。

	実証実験一回目 11月17日（水）	実証実験二回目 11月20日（土）・21日（日）
紙	36件/147枚 24.5%	16件/54枚 29.6%
WEB	11件/147枚 7.1%	37件/800枚 4.6%
WEB （LINE登録者のうちの回答者件数）	11件/36人 30.1%	37件/180人 20.1%

図5：アンケート回収数と回収率

(4)　今後の改善点や対策

LINEによるアンケート回収率が予想を下回ったので、その原因を分析する必要がある。

③. アンケート結果や外部ソースから収集したデータの分析（川根高校との交流により実施）（情報・データの分析）

(1)　当初計画：

謎解きゲームにより回収したアンケートの分析を実施する。

(2)　実際の内容：【B：一部修正】

謎解きゲームにより回収したアンケートを分析することに加え、川根高校の教科「情報」の中で川根高校の生徒と交流を実施し、川根本町寸又峡の観光客に関するデータ分析を実施し、相互発表をオンラインで行った(2021年11月16日)。

(3)　実績・成果

図6：オンライン発表会の様子　および　発表資料

【データ分析結果を用いて議論したこと（一例）】

- 2019年9月1日から2021年8月31日までの、2年分の日別の来訪客数と降水量の間には関係性が見られず、降水量が多いからといって、来訪客数が少ないとは言えない
- 宿泊客(遠方からの客)は、雨天でも温泉に行くので、降水量と観光客数に相関がないのではないかユーザーからの返答を想定し、キーワード設定を充実させる必要がある。

(4)　今後の改善点や対策

　静岡大学情報学部学生と川根高校生徒の交流にて、地域に関連するデータ分析を実施し、この結果に基づく議論は有意義であったので、今後も引き続き実施することを検討する。

④．分析結果に基づく議論（川根本町機関と協働実施）(分析結果の活用と施策検討)

(1)　当初計画：

謎解きゲームにより回収したアンケートの分析結果に基づき議論を行う。

(2)　実際の内容：【A：予定通り】

2022年1月24日(月)にオンラインにて報告会を実施した。また、LINE機能(LINEBot）を用いた「謎解きゲーム」に関するノウハウを川根本町まちづくり協力隊のメンバーに引継ぎを行った

(3)　実績・成果

紙幅の関係上、詳細の記述を割愛する。

図7：オンライン報告会資料

(4)　今後の改善点や対策

新型コロナウィルス感染症再拡大によりオンラインにて実施した。

5.地域への提言

本事業では、今年度、川根本町の重要な「目に見える」観光資産である寸又峡の魅力を高めるために川根高校の生徒や町の住民が主体的に活動できるように促すための基盤（LINE機能を活用した「謎解きゲーム」）を、静岡大学情報学部の大学生がプロトタイピングにより試作した。

今年度の事業では、図1に示す「データ・情報の活用による活性化サイクル」を試行したに過ぎない。このため、本事業にて試行した施策を発展させ、川根高校生徒や川根本町の住民の自らの手で活性化策を検討し、実行することを加速化していただきたい。

6.地域からの評価

寸又峡でLINEを用いた「謎解きゲーム」を実施することは観光客にとって魅力的であると想定され、とても良いアイディアであった。また、本来であればアンケート機能を付帯させることにより観光客等からの意見を収集しやすくなるとも考えられる。今後もうまく活用して、情報発信や情報収集に活用したい。

また、これらを検討する際に川根高校の生徒が静岡大学情報学部の大学生と協働することはとても有意義なことであると考える。川根高校の生徒や静岡大学の大学生が積極的・主体的な活動を行うことによって、川根本町の活性化につながるようなアイディアを出してくれることは、町民が歓迎するところであると考える。今後も是非、協力していきたい。

家庭や地域にある果樹を用いた地域創生

静岡大学　農学部　園芸イノベーション学研究室
教員：准教授　松本和浩
参加学生：井関早弥香，井上元，岡愛香梨，中込光穂，
湯澤孝哉，剣持芽依，勝野珠樹，中島彬皓

1．要約

本研究は，川根本町久野脇地区において，「家庭や地域にある果樹」を用いた地域活性化を行うものである．久野脇地区に庭木として存在する果樹を，地域住民と都市住民にとって魅力のあるものに変換し保全するとともに，中山間地域と都市との交流のツールとすることを上位目標に掲げている．本研究室は 3 年間にわたり住民らが行っている「くのわき縁結びプロジェクト」のサポートを行っており，本研究も当プロジェクトの一環として実施した．庭の果樹を用いた地域活性を実現するために，久野脇地区の果樹をプロットした植栽地図を作製した．また，果実調査を行い，品種や各果実品質を決定した．さらに，「聞き書き」の手法を用いて，庭の果樹にまつわる物語を収集し，冊子を作製した．果樹の植栽地図は「縁結びの村くのわき」公式 HP に掲載し更新を行っている．また，カキ，カンキツ類など 20 品目の果実品質を調査し，品種同定を行った．「聞き書き」を行っている南伊豆町の住民からノウハウを学んだ成果を基に，実際に久野脇地区の住民 5 名に対して「聞き書き」を行った．以上の活動の結果，果実を無人販売するようになったり，使っていなかった果実を使うようになったりと，住民が抱える庭の果樹に対する価値が変化したと感じた．地域住民が都市住民との交流が行えるように HP の充実化や活動の継続をしていく予定である．

2．研究の目的

川根本町久野脇では自家消費用の様々な果樹が庭木として保存されてきた．その中には地域の風土と文化を背景に無意識に選抜された在来種も多い．しかし，住民の高齢化や都市部への移住により，それらの管理は行き届かず，放置され荒廃したり，野生動物侵入の原因になったりしている．貴重な遺伝資源を保全しつつ，里山の緑ある風景を守るためには，住民のみに管理の負担を強いるのではない新たな管理・活用システムの開発を目的とする．

3．研究の内容

本事業では，庭の果樹を中山間地域と都市の交流のツールにするために，昨年に続き①庭の果樹の植栽マップ作製，②庭の果樹の果実調査，③庭の果樹にまつわる聞き書きの 3 つの活動を行った．

①については，昨年作成したマップを久野脇の HP 上に掲載し，プロットの漏れがあったため，新たに確認した果樹をその都度更新している．

②は，いずれ果樹を使った交流活動を行う場合，都市の人が利用しやすくなるように，住民から庭の果樹になる果実をいただき，大学で縦横比，重量，糖度，pH およびクエン酸含量を測定した．

③では，昨年の 6 件に続き，本年は 5 件に対して聞き書きを行い，原稿を作成した．昨年行った聞き書きの 1 件の原稿を基に「くだもの縁結び」と題して，冊子を作製し，久野脇地区の民泊「まきや」で販売を開始した．「くだもの縁結び」は，ISSN を付し逐次刊行物としてシリーズ化し，継続的に出していく予定である．

以上の 3 つの活動を用いて庭の果樹を都市住民に注目してもらい，久野脇地区との交流促進のきっかけづくりを行った．

図 1　「くだもの縁結び」

4．研究の成果

（1）当初の計画

①　昨年作成した庭の果樹の植栽マップの更新

②　庭の果樹の果実の品質調査

③　聞き書きをまとめた本を出版する

④　引き続き聞き書き活動を行う

（2）実際の内容

①　住民に教えていただいたり，聞き書きの際に庭で新たに見つけたりした果樹をマップに追記して，HP に掲載した．A

②　昨年から引き続き，20 品目に対して果実調査を行った．A

③　当初は，南伊豆町のききがきやが出版している「知ってんけぇ」のように，聞き書き数件分をまとめた本を作製する予定であったが，本研究では庭の果樹にまつわる聞き書きということで，写真を多く載せたかったことや，若者をターゲットにしたことにより，手に取りやすいものにするために，1 件分を 1 冊として出版した．A

④　昨年度に続き，聞き書きを 5 件分行った．A

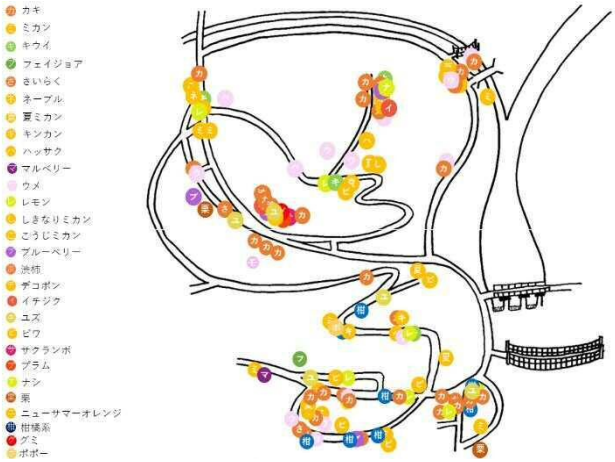


図 2　果樹の植栽マップの更新後

(3) 実績・成果と課題

①　聞き書きの冊子「くだもの縁結び」を作成し，国立国会図書館の ISSN を取得し，出版した．川根本町町長や，聞き書きに携わってくださった方々へ贈呈を行った．民泊「まきや」で販売している．

②　聞き書きを行ったことで，住民が果物を無人販売し始めたり，昔の利用方法で果実を利用したりという人が増加した．このことからも聞き書きによって地域住民の庭の果樹に対する概念に変化を及ぼしたことが確認された．

③　聞き書きでは，久野脇地区に「むかしむかしくのわき」という，久野脇地区にまつわる昔話や伝説等をまとめた本を作製した人がいたことが明らかになった．

④　住民が庭の果樹にまつわる聞き書きに興味を持ち，活動に参加する住民が増加したとともに，聞き書きの語り手に立候補するようになって聞き書き活動によって住民の意識が向上した．

図 3　「くだもの縁結び」を川根本町町長へ贈呈

⑤引き続き訓を秋地区の回覧板「さやか通信」で果樹についての活動を書かせていただいており，活動内容が住民全体へ理解され，受け入れられるようになった．

（4）今後の改善点や対策

「くだもの縁結び」を久野脇地区内や周辺地区，南伊豆町のような中山間地域，都市等，販売場所の拡大を行っていく予定である．逐次刊行物ということで，続けて出版していく．さらに，HP へ果実の品質データの掲載や，聞き書きの一部を掲載するなどの充実化を行い，全国各地で地域のことを知ることができるようにしていき，地域住民と地域外住民の交流が果樹を通して行えるような仕組みを作っていく必要がある．

5. 地域への提言

本研究によって，久野脇地区の住民は特産品のチャのみでなく，果樹にも注目し始めていることは確かである．しかし，HP の更新や，果樹を使っての交流活動が住民のみではまだできる可能性は非常に低いため，地域外のあらゆる専門家と共に活動することは非常に重要であると感じた．

6. 地域からの評価

「くだもの縁結び」を「まきや」で販売した際に，1 か月で 15 冊販売でき，購入者が地域の方々であったことから，活動自体に興味を持っていただけていることが伝わった．また，地区のグランドゴルフ大会で本研究の活動を話したところ，「聞き書きしに来てもいいよ」と住民の方から声をかけていただいた．さらに，3 年前には「こんなの売ってもだれも欲しがらない」と言っていた住民が，庭の果樹になる果実を販売し始めたことからも，庭の果樹に対する価値観へ変化が起こっているといえる．地域で活性化活動を行っている，KM 会のメンバーとは，果樹をどのようにしていきたいのか話を重ねており，ともに活動を行ってきているため，住民と我々との意識の差が徐々に減っていっている．

成果報告書

「かけこまち七間町」を拠点とした認知症予防の展開

静岡県立大学 経営情報学部 東野研究室
教　　員：教授　東野定律
参加学生：経営情報学部 ４年 石井利奈

１．要約

令和元年6月18日に行われた認知症施策推進関係閣僚会議において、「認知症施策推進大綱」がとりまとめられた。認知症に係る諸問題について、政府一体となって総合的な対策を推進体制の構築の具体的な内容が示されているが、基本的な方針として、認知症はだれもがなりうるものでかつ、家族や身近な人が認知症になることなどから、認知症の発症を遅らせ、認知症になっても希望を持って日常生活を過ごせる社会の実現、認知症の人や家族の視点を重視しながら、「共生」と「予防」を車の両輪として施策を推進していくこととなっている。

静岡市においても、認知症である者及びその家族を支援するために、適切な医療と介護等との連携体制の整備及び総合的な認知症対策の推進を図ることを目的に静岡市認知症対策推進協議会が設置され、市が進める「健康長寿のまちの推進」について日々検討が行われている状況である。

静岡市が認知症の方やその家族への総合的な支援を行う一環として、「静岡市認知症ケア推進センター”かけこまち七間町”」を葵区七間町に令和2年10月31日からオープンし1年が経過し、健康長寿や生涯活躍のまちづくりの中において認知症の理解と支援の輪を着々と広めつつある。

そもそもこの認知症ケア推進センターの役割は、認知症に関する困りごとの相談対応や、脳の健康度、認知症に関する知識の普及啓発はもとより、移住支援や人口減少対策、経済効果、中心市街地活性化も期待する地方創生の取組のモデル地区の新たな施設としての機能も期待されており、中心市街地の利点を生かしながら、地域の社会資源とどのように連携していくかが課題となっている。

本研究は、昨年度に引き続き静岡市において設置された「静岡市認知症ケア推進センター”かけこまち七間町”」の利用者に対してのアンケートを実施し、地域で認知症支援に期待されている機能の検討、地域で必要とされる具体的な施設等について検討を行うとともに、実際のイベントに参加することにより参加者のニーズから今後のセンターの展開について検討を行うこととした。

研究の結果、静岡市において設置された「静岡市認知症ケア推進センター”かけこまち七間町”」の認知度は、一年経過したとはいえ未だ十分な状況であるといえず、認知症支援について、既存の広報活動に加えて情報通信手段の活用や、他の事業と連携した情報発信が求められるだろう。また認知症の正しい知識に加えて、認知症当事者やその支援者の拠り所となる場所の普及が必要だと考えられた。

静岡市の認知症支援を充実させていくためには、認知症について学ぶ機会を引き続き創出するとともに、既存の活動と協働した普及啓発や生活支援を行う取組が必要だということが示された。

２．研究の目的

本研究では、昨年度に引き続き葵区七間町に令和2年10月31日にオープンした「静岡市認知症ケア推進センター”かけこまち七間町”」が、今後、認知症の方やその家族への総合的な支援を行う中心拠点がどのように機能すべきか、また認知症に対する知識、地域の中でどのように展開することによって拠点として認知症予防の展開を果たすことができるのかを検討する資料の収集を目的とした。

３.研究の内容

静岡市において認知症予防の展開していくで、静岡市に設置された”かけこまち七間町”を今後どのような内容を展開していくべきか、さらにより多くの利用者を募るにはどのような内容を提供すべきか、認知症予防を進める運営体制として、地域の中のどのような存在であるべきか等、具体的な検討を行うために、本年度は以下の2点の内容を展開した。

（１）静岡市認知症ケア推進センター”かけこまち七間町”」における調査データの分析

本年度、「静岡市認知症ケア推進センター”かけこまち七間町”」で展開されている各種イベントに参加した方に対しアンケート調査を実施し、その結果を分析することから、認知症の認知度をはじめ、”かけこまち七間町”にて得たい情報の内容、情報の入手先、認知症の方にとって必要な施設や場所などの意見を収集し、認知症の拠点として認知症予防の展開を果たすことができるのか、効果的な拠点なるための基礎資料を収集することができた。

（２）先進事例の事業展開についての検討

他の自治体においても、まちなかでの事業展開や住民の暮らしの中で行われている先進的な認知症施策が数多く存在することから、センターの今後の事業展開方針について、他の自治体の事例を概観し、今後のセンターが効果的に事業を展開するために必要な内容についても検討を行った。

４.研究の成果

(1)当初の計画

当初の計画では、認知症支援拠点である“かけこまち七間町”にてアンケート調査を実施し、静岡市における認知症支援に期待されている機能の検討、“かけこまち七間町”周知に関する取り組みやマップ作り、地域で必要とされる具体的な施設等について検討することであった。

(2)実際の内容とその理由（B：一部修正）

令和3年12月19日と同年12月23日に「静岡市認知症ケア推進センター“かけこまち七間町”」にて、同センター職員協力のもと、イベント参加者に対してアンケートを実施することができ、静岡市における認知症支援に期待されている機能の検討、地域に必要な認知症支援の施設等について検討することができた。

一方、新型コロナ感染症拡大するなか、本来は街中にある商店などに協力を呼びかけ“かけこまち七間町”周知に関する取り組みやマップ作りなどを検討する予定であったが、本年度は緊急事態宣言、まん延防止等重点措置の要請などがあり、実施可能な状況になく具体的な内容の展開が不可能となったが、今後の周知に関する事業の展開については、既存の文献、先進的な自治体の認知症高齢者への取り組み事例などを参考にし、今後の形を検討することで代替ができた。

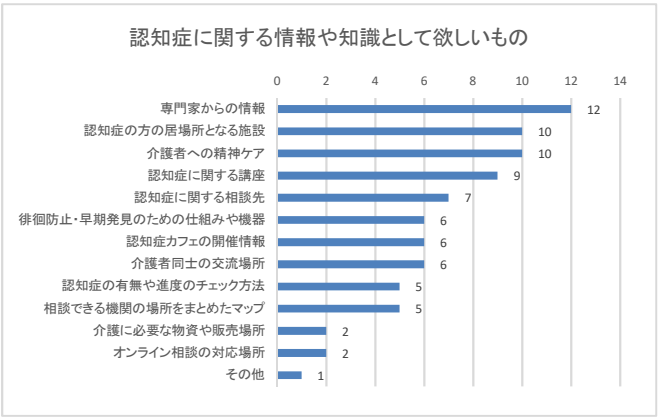
(3)実績・成果と課題

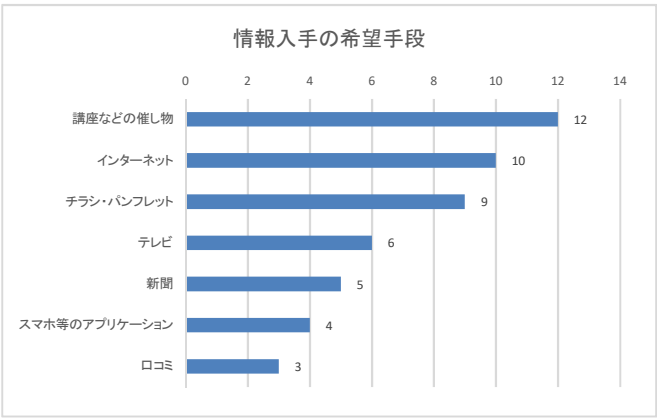
研究で得られた結果についてまとめると主に以下の通りである。

① 認知症と周辺情報についての普及と課題

認知症に関する情報や知識として欲しいものを尋ねたところ、多い回答から順に「専門家からの情報」、「認知症の方の居場所となる施設」、「介護者への精神ケア」、「認知症に関する講座」、「認知症に関する相談先」等が挙げられていた。また、情報入手の希望手段を尋ねたところ、「講座などの催し物」が最も多く、次いで「インターネット」「チラシ・パンフレット」が同数、そして「テレビ」、「新聞」、「スマホ等のアプリケーション」、「口コミ」という結果になった。

以上の結果と昨今の状況を鑑みるに、認知症支援について、既存の広報活動に加えて情報通信手段の活用や、他の事業と連携した情報発信が求められるだろう。また認知症の正しい知識に加えて、認知症当事者やその支援者の拠り所となる場所の普及が必要だといえる。





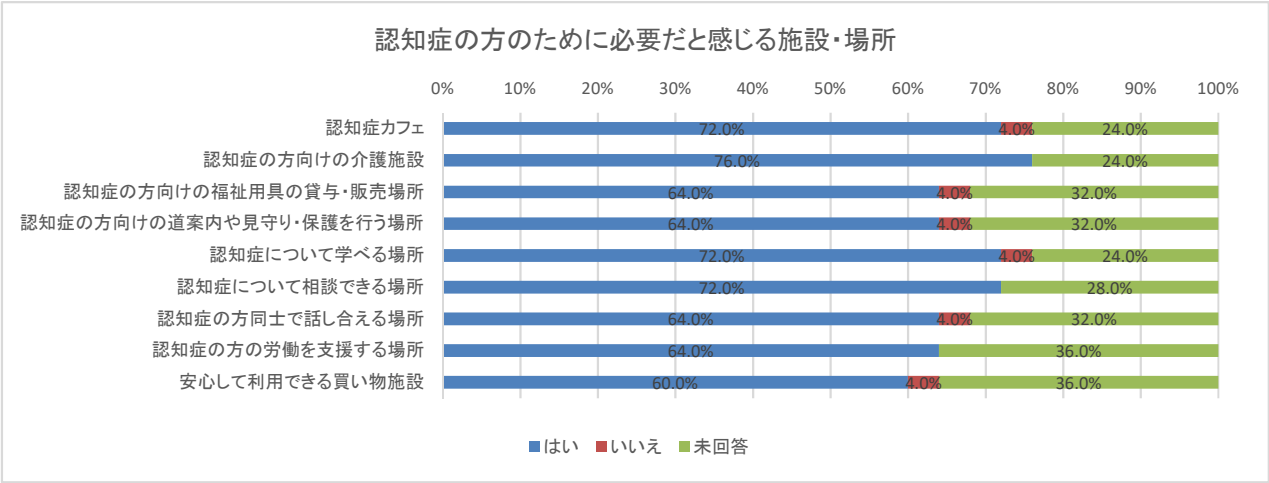


図1　「静岡市のまちなかにおける認知症の方へのサポート」の調査結果の一部

② 静岡市の認知症支援に求められる機能の検討

「静岡市のまちなかにおける認知症の方へのサポート」の調査で尋ねたコンテンツに関する主な意見をまとめた。

認知症の方のために必要だと感じる施設・場所について、幾つかの施設等への考えを尋ねたところ、どの項目も回答者の6割以上が必要と感じていることが分かった。更にそれぞれの項目で回答の理由を尋ねたところ、必要だと考えた理由として「認知症カフェ」は、・意見や情報の交換のため・人とのつながりや居場所のため・地域社会での活動や交流を保つため・認知症の理解や早期対応のためといった意見が寄せられた。「認知症の方向けの介護施設」は、・他人と話をして知ることや本人と家族以外の助けが必要だからという意見があった。その他の項目についても、日々の暮らしや早期発見、情報の共有・更新といった面で必要であると感じていることが分かった。

また認知症の方の支援者のために必要だと感じる施設・場所について、同様に尋ねたところ、ほとんどの項目で回答者の6割以上が必要と感じていた。ただし、「福祉用具の貸与・販売場所」と「認知症の方とともに安心して利用できる買い物施設」について必要だと感じる者の割合は5割程度であった。こちらも回答理由を尋ねたところ、必要だと考えた理由として「認知症カフェ」は、・意見交換が必要だから・支えるための正しい知識の提供と支援者の苦労や日々の生活に対する手厚い支援が必要だか

らといった意見が寄せられた。「認知症について学べる場所」は、・認知症を身近に感じるため・疾患を理解することで介護負担を軽減するためという意見があった。その他の項目についても、介護は孤独なイメージがあるから、使用や利用に当たっての知識が必要であると感じていることが分かった。

以上より、静岡市の認知症支援を充実させていくためには、認知症について学ぶ機会を引き続き創出するとともに、既存の活動と協働した普及啓発や生活支援を行う取組が必要である。

(4)今後の改善点や対策

本研究の結果から、認知症に関する情報や知識の必要性は高く、認知症高齢者の居場所や認知症の家族に対する専門的な知識、相談が可能となる窓口の必要性が高いことが明らかになった。また、情報の入手の仕方について、今までのチラシやパンフレット口コミなどとともに、地域の活動などに関連する講座や催事などを通しての情報伝達、ネット等を通じた情報発信など幅広い層への周知が必要であることも明らかになった。

また、今回の課題として、感染症拡大などによって人が集まる場の設定が困難になっている中、なかなか街中にある支援拠点の良さが活かしきれない状況があるが、人々の関心を引くための試みを地域の住民と進めていくことができるのか今後検討していく必要がある。

図2　かけこまちの認知症カフェに参加している様子①

図3　かけこまちの認知症カフェに参加している様子②

５.地域への提言

本年度の調査結果からも明らかであるが、認知症への正しい理解が浸透しているとはまだまだ言い難い状況がある。

先進事例の取り組みにあったが、認知症という切り口のみならず、健康推進、フレイル予防などの内容から、認知症の支援をしていく方が、自然であり、認知症予防につながる窓口も広がるのではないかと考えられた。すでに“かけこまち七間町”で実施されている各種イベントについては、健康推進、フレイル予防などの内容を含んでいること、これから認知症の支援者となる高齢者の相談などに対応してほしいという意見もあり、今後一層、幅広い世代を対象とした拠点整備が求められる。

６.地域からの評価

感染症拡大により、本年度も地域の活動が制限されている中で、地域の認知症支援が困難になっているが、感染予防を徹底した上で、遠隔講義などができたことに対する満足度については、概ね高い評価を得ている。認知症の内容を深く知らない市民などさらに幅広い利用を求めていくためには、現在センターで実施されている内容について、いろいろな媒体を用いて認知してもらい、リピーターとして利用する内容について地域資源をうまく利用しながら考えること、引き続き市民が気軽に利用できる環境づくりが必要であることが示された。

（成果報告書）

静岡県立川根高等学校の魅力化向上

静岡県立大学 薬学部 分子病態学分野
教　　員：講師　刀坂泰史、砂川陽一
参加学生：上原渉、片桐宇大（薬学部5年生）

（以下本文）

1. 要約

川根高校では学生数の減少を改善するため「川根留学生」制度を立ち上げ、県内および県外から川根留学生を募集している。そこで多くの生徒から選ばれる高校となるよう、魅力向上を図り、高校荏続による川根地域の活性化を目指している。そこで川根地域・川根高校より大学との連携の企画提案と実施について提案をいただき、協力のもと本プロジェクトを実施した。

上記目的のため、静岡県立大学薬学部分子病態学分野の提案概要は「薬学部教員および薬学部生が高校生と一緒に取り組む実験実習授業を行い、現役高校生の理解意欲向上、県内大学および医療系学部への進学意欲向上に貢献する」ことを提案した。本プロジェクトの実施により中学生へアピールできる、魅力向上・ブランド化に貢献する。

川根高校理科教諭との打ち合わせを経て、高校生物の時間の2コマを高校生物の範囲を超えた実習を実施した。具体的には血圧測定と血圧変化を体験し、血圧変化のメカニズムを学ぶ実習である。砂川講師および薬学部5年生の学生2名と協力し、講義から実習を実施した。高校生には少し難しい内容を含んでいたが、実施後に行った川根高校教諭との会議では、高校生の理解度も十分であり、本実習は下記の点で有意義であったと考える。

・大学（薬学部はじめ医療系学部）で学ぶ内容に触れることで、大学での学びにリアリティがでることで学習意欲が向上する。
・進路選択（進学、学部選択）に有意義である
・高校の学習範囲を踏まえての実習であり、高校学習内容の理解も深まる
・静岡県立大学を身近に感じることで、進学意欲が向上した

以上の内容より、川根高校生徒にとって有意義な実験実習授業であり、本プロジェクトの目的を達成できたと考える。最終的な目標である高校のブランド化については短期的には難しく、卒業生の進路や本プロジェクトを継続することで長期的な視野で考える必要があり、継続的な実施が望ましいと考える。

2. 研究の目的

学生数の減少により、高校存続が危慎される状況を鑑み、平成 26 年度から「川根留学生」制度を立上げ、県内全域を対象に生徒事集を開始した。平成30年度からは募集対象を県外にも拡大し、今年度、全校生徒数132名のうち71名、約半数以上が川根留学生になった。これまで以上に留学生または川根地域〈高校連携中学3校〉の生徒からも選ばれる高校となるよう、魅力向上を図り、高校存続による川根地域の活性化を目指す。

上記目的のため、静岡県立大学薬学部分子病態学分野の提案概要は「薬学部教員および薬学部生が高校生と一緒に取り組む実験実習授業を行い、現役高校生の理解意欲向上、県内大学および医療系学部への進学意欲向上に貢献する」ことを提案した。本プロジェクトの実施により中学生へアピールできる、魅力向上・ブランド化に貢献する。

3. 研究の内容

川根高等学校の魅力向上・ブランド化を目的として、高校生を対象とした授業連携・実験実習を行う。薬学に関する実習を行うことで、学習内容のより深い理解、大学研究への理解と進学意欲向上、また薬学・医学領域への興味を持ってもらうことで学生の進路決定に重要な機会となると考える。静岡県立大学との密な連携をとっていることは県内大学への進学を目指す高校生にとってアピールにもなり、魅力向上につながると期待する。

具体的提案としては、「薬学部教員および薬学部生が高校生と一緒に取り組む実験実習授業」である。当教室は医学薬学生物学を中心に研究、さらに大学教育を担当しているため、高校生が学習した内容を中心に応用発展的な課題について取り組む。さらに以降、継続的に授業連携を実施することで定着化、ブランド化につながると考える。"

4. 研究の成果

(1)当初の計画

血圧とは、心臓のポンプ作用によって全身に血液が送り出されるとき、血管の内壁にかかる圧力のことで、心臓が収縮したときの血圧を最高血圧（収縮期血圧）、心臓が拡張したときの血圧を最低血圧（拡張期血圧）という。高血圧を発症すると脳卒中、心筋梗塞、心不全、慢性腎臓病といった疾患の発症リスクが増大するため、定期的に血圧をモニタリングすることは大切である。
血圧は疾患以外にも運動、温度変化、体位変換、深呼吸といった要因により生理的に変化する。本実習では血圧測定法の体得と合わせて、生理的な要因で変化する血圧の測定及び、血圧変動の作用機序を考察する。

(2)実際の内容（Ａは予定どおり、Ｂは一部修正、Ｃは中止など）とその理由

Ａ：予定通り実施した。

(3)実績・成果と課題

高校2年生11名のクラスを対象に2コマ（100分）の講義と実習を行った（写真参照）。川根高校理科教諭との打ち合わせを経て、高校生物基礎の時間の2コマを高校生物の範囲を超えた実習を実施した。具体的には血圧測定と血圧変化を体験し、血圧変化のメカニズムを学ぶ実習である。砂川講師および薬学部5年生の学生2名と協力し、講義から実習を実施した。高校生には少し難しい内容を含んだが、実施後に川根高校教諭との話より学生の理解度も十分であり、本実習は下記の点で有意義であったと考える。

・大学（薬学部はじめ医療系学部）で学ぶ内容に触れることで、大学での学びにリアリティがでることで学習意欲が向上する。
・進路選択（進学、学部選択）に有意義である

・高校の学習範囲を踏まえての実習であり、高校学習内容の理解も深まる
・静岡県立大学を身近に感じることで、進学意欲が向上した

(4)今後の改善点や対策

実習実施後、高校教諭、川根本町、大学の3者にて改善点と対策について協議した。実施内容・講義については大きな問題はなく、高校生の満足度も高く、継続して実施することで長期的目的が達成できると考えられる。以前の最も大きな課題であった、高校授業との兼ね合いと日時調整について、高校側のご協力により2コマ連続での実施が実現した。2コマでの実施により、講義および実習結果の考察の時間を十分に取ることができ、より充実した内容とできたと協議会での結論となった。さらに、2コマ実施で時間の余裕を持つことで、大学生が実験などでメンター的な役割で関わり、コミュニケーションをとる時間を取ることができ、県内大学および医療系学部への興味関心の向上が期待できる。

次年度の改善点として、現在は2年生を対象としているが、3年生を対象とした生物実習・講義を検討しており、その具体的な実施計画を立案、協議中である。

５．地域への提言

「川根留学生」制度は一定の成果を挙げており、地域活性化において大変素晴らしいプロジェクトであると考える。静岡県立大学はCOC事業をはじめ、地域貢献を重要事案として進めており、静岡県内市町村や企業の魅力化向上のために貢献している。高校の魅力は多様であり、またこれまでの歴史があるため新たなブランド化は短期間では困難であると考える。今回のような大学との連携プロジェクトを継続することで、高校生の進路選択（特に県内進学希望、医療系学部志望者の増加）に寄与し、次に続く学生の高校選択に影響を与えることができると考える。またこのように高校が魅力的になることで地域そのものの魅力向上、地域医療の充実、など川根地域の活性化につながると期待する。

６．地域からの評価

昨年度の課題や反省を踏まえ、オンラインでの高校教諭・大学間での打合せなどを早い段階で重ねたことで、高校・大学ともに効果的な授業の実施ができた。
高校教諭からは、「普段の教科授業の発展的な学習を、大学講師や大学生による指導により実現できた。普段の授業では集中力が続かない生徒も、積極的に参加できていた。薬学部に興味のある生徒は、大学生との交流にとても意欲的に参加でき、喜んでいた。」等の声をいただいた。
次年度以降も継続的な実施に加え、より専門性の高い3年生の教科授業においても大学との連携を深め、発展的な学習の機会を作りたいという意向を受けた。

導入講義

実習の説明

大学生による
血圧測定指導

血圧測定実習の様子

ミーティングの様子

大学生への質問

「しずまえ」ブランド普及拡大のため、近隣地域の消費者ニーズ調査

東海大学　海洋学部　水産学科　清水研究室
教　員：特任准教授　清水　宗茂
参加学生：本山亮介　祖母谷真生　山口知温　松本結太

1　要約

山梨県民として、東海大学付属甲府高等学校の教職員４０名を対象に、水産食品を中心とした食習慣に関するアンケート調査を行った。その結果、回答者の 70%以上の方が、週に 1 回以上魚介類を食していること、鮮度の良い魚を用いた刺身や寿司を好むことが明らかとなった。アンケートの集計結果より、山梨県民が求めるしずまえ鮮魚を用いた食品として、「冷凍寿司」や保存性が高くすぐに食することが可能な「レトルト食品」が候補と考えられた。

2　研究の目的

本研究では、山梨県民を対象とした食習慣等に関する調査を通じて、同県民が期待する「しずまえ鮮魚」を用いた食品について明らかにすることを目的とした。

3　研究の内容

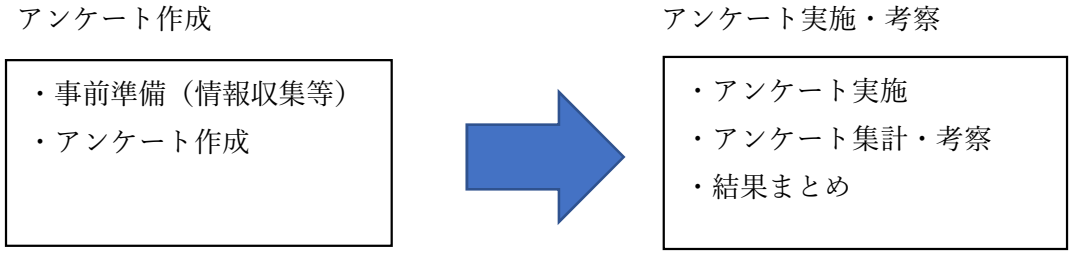


図１　研究内容

4　研究の成果

（１）　当初の計画

アンケート[1)]を作成し、しずまえオクシズまつり、産業フェアしずおか 2021、山梨プロモーション等イベント及び東海大学付属甲府高校の教職員の方にご協力いただきアンケートを実施する（静岡県、山梨県、それぞれ１００名前後の回答を収集）。その結果を分析・考察し、得られた結果をもとに山梨県民のニーズを満たす商品を模索し、来年度の商品開発への土台を構築する。

（２）　実際の内容　（A は予定どおり、B は一部修正、C は中止など）とその理由

B：新型コロナウイルス感染症の拡大により、当初予定していた「しずまえオクシズまつり」、「山梨プロモーション」への参加が中止となった。一方で、東海大学付属甲府高等学校の教職員４０名および産業フェアしずおかの参加者４０名から、アンケート収集を行い、データの解析等を実施することができた。

（３）　実績・成果と課題

１）認知度について

しずまえ鮮魚の認知度について、山梨県民では４０名中３名、静岡市民では４０名中３１人が知っていると回答した。また、静岡市民のなかで、しずまえ鮮魚を認知している方に、具体的な魚について伺ったところ、図２の結果が得られた。マグロ、桜エビ、しらすは水揚げ量が多い等の理由で広く知られているが、他の水産資源については一部に限られていた。

静岡市民

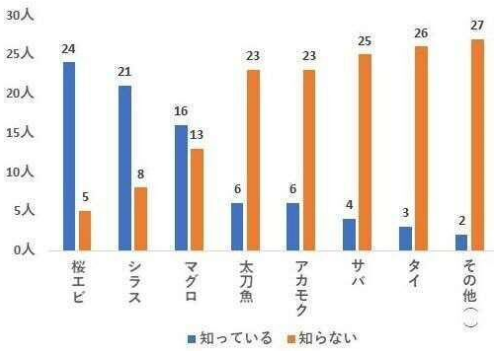


図 2，しずまえ鮮魚として知っている魚

２）山梨県民の水産食品摂取状況について

山梨県民が魚介類を食べる頻度は図 3、好きな魚介料理は図 4、買うときに重視する点は図 5 に示した。図 3 より、70%以上の山梨県民は、週に 1 回以上、魚介類を食べる習慣を有すること明らかとなり、「しずまえ鮮魚を用いた商品開発」の必要性を確認することができた。さらに図 4 から、好きな魚介料理は刺身、寿司はともに 80%の人が選択していた。また、購入の際、重視する点として、鮮度が 63%で 1 番多く、価格が 50%と 2 番目に多い結果となった。これらより、山梨県民は、鮮度の良い魚を使った刺身や寿司をできる限り安価で食べたいとのニーズを有することが明らかとなった。また、どんな商品を望んでいるかという質問に対して、開けたらすぐに調理できるもの、すぐに食べられるものを望んでいるとの回答が複数認められた。

また、山梨県ではマグロの消費量が全国でも極めて高い[2)]ため、しずまえ鮮魚を用いた新商品に用いる食材として、マグロは欠かせないと考えられた。以上より、山梨県民に向けたしずまえ鮮魚を用いた商品として、「冷凍寿司」や「缶詰等のレトルト食品」が候補と考えられた。

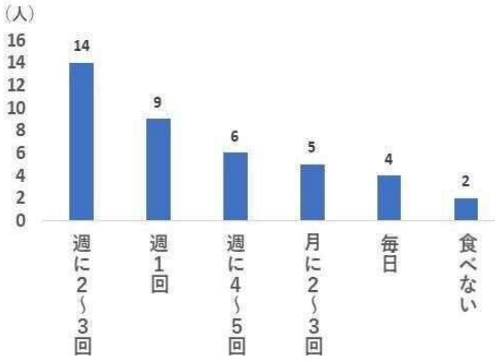


図３，魚介類を食べる頻度

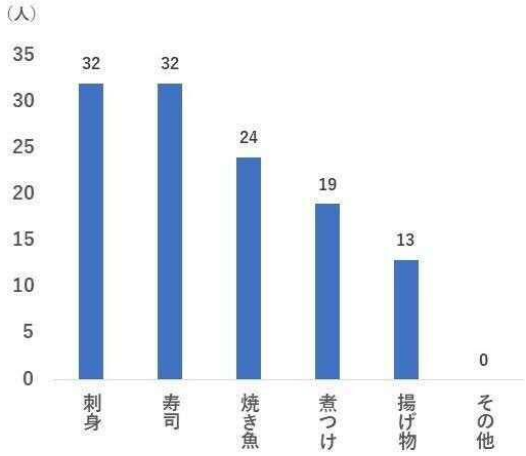


図４，好きな魚介料理　（複数回答可）

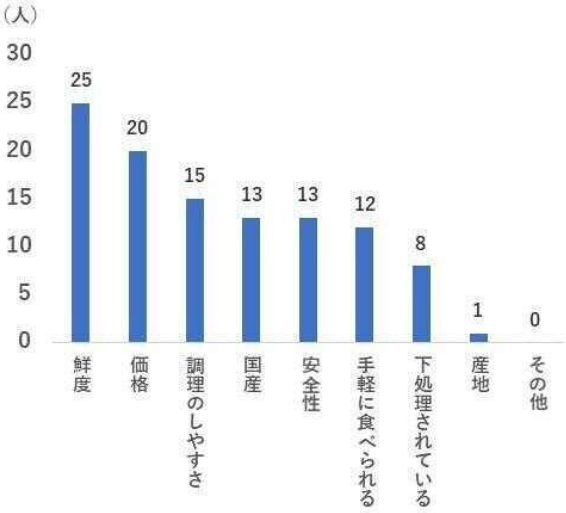


図５，買うときに重視する点　（複数回答可）

（４）今後の改善点や対策

「しずまえ鮮魚」を用いた新商品をどのようにプロモーションして行くのか、販売ルートを含め、関係部署や製造先との連携が不可欠となる。

（５）地域への提言とこれからの展望

本研究を通じて、山梨県民は、静岡市民と同様に魚を食する習慣を有しており、「しずまえ鮮魚」を県外に拡大して行くための候補先として、山梨県が有力であることが明らかとなった。さらに、マグロをはじめとする新鮮な刺身を食べたいとのニーズを伺うことができ、新商品の開発にあたり、具体的なコンセプト策定に繋がる情報を得ることができた。

今後は、具体的な商品を試作し、今回協力いただいた山梨県民を対象とした試食会などを通じて率直なご意見を頂戴することで、「山梨県民が望むしずまえ鮮魚を用いた食品」を実現させて行きたいと考えている。

参考文献

（１） SHOPDX．商品開発、改善のための効果的なアンケート実施方法 ． 2021.08.12
https://shopforce.jp/blog/8605/

（２）久保哲朗 ．都道府県別統計とランキングでみる県民性 ．2017.04.24
https://todo-ran.com/t/kiji/10827

資料１　アンケート用紙

1.年齢

1.１０代　２．２０代　3.　30 代　4.　40 代　5.　50 代　6.　６0 代　7.　70 代以上

性別　1.　男　2.　女　　　　　　　　職業（　　　　　　　　　　　　　）

居住地　（　　　　　）市

2.　しずまえ鮮魚を知っていますか？

1.知っている　　2.知らない

知っている場合、

どこで知ったか（例　テレビなど）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

しずまえ鮮魚として知っている水産品はありますか？

1.マグロ　2.桜エビ　3.シラス　4.サバ　5.タイ　6.太刀魚　7.アカモク

8.その他（　　　　　　）

他に知っている、水産品のブランド等はありますか？また、なぜそれを知っていますか？

ブランド　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

理由　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

3.水産食品（加工品を含む）を食べる頻度はどのくらいですか？

1.週に１回　2.週に２～３回　3.週に 4～5 回　4.毎日　5.月に 2、3 回　6.食べない

7.その他（　　　　　　　　　）

その頻度で食べる理由　（例　釣りによく行っているから　健康を意識しているからなど）

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

4.どのような水産食品（加工品を含む）をよく食べますか？

1.缶詰（シーチキン、鯖缶）　2.練り製品/蒲鉾　3.干物　4.かつお節　5.刺身　6.買わない

7.その他（　　　　　　　　　）

買う理由

＿＿

5.水産品（加工品）を購入するとき重視する点について、重要な順に３つ選んでください。

1.価格（安さ）　2.鮮度　3.国産　4.手軽に食べられる　5.安全性

6.調理のしやすさ　7.下処理されている（切り身や、骨や内臓を取り除いたもの）8.産地

9.その他（　　）
１番　_____　２番_____　３番_____　　←回答場所

6.魚介料理で好きなものを教えてください（複数回答可）
1.刺身　　2.寿司　　3.焼き魚　　4.揚げ物　　5.煮つけ
6. その他（　　）

7.水産物に対するイメージを教えてください（複数回答可）
1.健康に良い　2.おいしい　3.栄養がある　4.カロリーが低い　5.調理が面倒　6.値段が高い
7.魚の処理が面倒　8.その他（　　）

8.水産食品の摂取について、日頃から意識していますか？
1.意識している　2.まあ意識している　3.あまり意識していない　4.意識していない
何を重視して摂取を意識していますか　（例　カルシウムを取るため　認知症の防止など）
_____

９.水産物由来の健康食品に対する印象は？
1.摂取している　2.摂取したい　3.興味ない

10.今後、「しずまえ鮮魚を用いた食品開発」を進めて行く予定です。
　食べてみたい商品などございましたら、自由回答をお願いいたします。
_____

「静岡市はマグロ王国」であることの認知度向上

東海大学 海洋学部 後藤ゼミ、浅川ゼミ
教　　員：教授　後藤慶一、准教授　浅川倫宏
参加学生：渡辺翔、早川孟、安藤碧、高木海、森川颯一朗、
安田篤史、佐々井豪、林宗司、古戸燦、林椎、
小川果枝、平山将大朗、室井仁美

１　要約

静岡市民、静岡県民、他都道府県のマグロを愛する方たちから読み札が寄せられ、清水マグロ認知度向上のためのフレーズを選定することができた。その読み札に見合った絵札を、静岡県立駿河総合高校の生徒がコンペ形式で作成した。印刷業者にマグロかるた300個を発注し、静岡市内の全小学校と児童クラブに配布した。本取り組みを清水マグロまつりでPRした。

２　研究の目的

清水港は「冷凍マグロの水揚げ日本一」であること、さらに静岡市は「マグロにかける一世帯当たりの年間支出が日本一」であることを認知している市民は多くない。誰もがその事実を知っている状態、特に幼小時の教育課程から認知することにより、市民が「静岡市はマグロ王国」である事実を誇りに思える状態を目指したい。そこで、日頃より慣れ親しむことのできる「しずまえ鮮魚普及教材」として、マグロかるたを開発し、シビックプライド醸成教育を行うことを目的とする。

３　研究の内容

マグロかるた読み札の公募をどのようにするか、また絵札の作成をどのように行うかを検討した。公募で集まった読み札の選定に関し、フレーズの信憑性、ウンチクの妥当性、および内容の重複がないような検討を行った。印刷に際しては、紙質の検討、サイズの検討、裏面表示の検討、説明文札の検討を行った。

４　研究の成果

(1)当初の計画

・マグロかるたの公募にあたり、はがきでの募集を行う予定であった。
・静岡鉄道の全駅でのポスター掲示とビラの設置を予定していた。
・マグロかるたの配布先を幼稚園と小学校を予定していた。
・マグロかるたをイベントなどで学生がPRする予定であった。

(2)実際の内容（Ａは予定どおり、Ｂは一部修正、Ｃは中止など）とその理由

Ｂ

・はがきでの募集では十分なフレーズが集まらないと考えられたため、ネットでの応募ができるようにシステムを構築し（Google Formsを利用）、twitter等でも周知することとした。

・予算の都合上、ビラの設置は取りやめ、新静岡駅、草薙駅、新清水駅、バスターミナルおよび地下通路でのポスター掲示に変更した。また、エスパルスドリームプラザや河岸の市でのポスター掲示は予定がなかったが、先方の協力で、ポスターを掲示してもらえることとなった。加えて、市役所の配慮で、静岡市役所内、および静岡市内の生涯学習センターでビラとポスターを設置してもらえることとなった。

・読み札の内容的に、幼稚園児には難易度が高いと判断し、配布先を小学校と児童クラブに変更した。

・コロナ感染対策のため、イベントでの学生によるPRを中止し、読み札の展示のみ清水マグロまつりにて実施した。

(3)実績・成果と課題

・読み札を募集するためのポスター（図1）とビラを作成した。

・作成したポスターを新静岡駅（写真1）、草薙駅、新清水駅（写真2）、バスターミナルおよび地下通路、河岸の市、エスパルスドリームプラザ、静岡市役所、生涯学習センター、東海大学海洋学部で1ヶ月間掲示した。また、ビラを静岡市役所、生涯学習センター、東海大学海洋学部、静岡県立駿河総合高校等に設置した。駿河ブルーラインのHP、東海大学海洋学部のHPおよびTwitterでアナウンスした。

図1　作成したポスター

写真1　新静岡駅での掲示

写真2　新清水駅での掲示

・はがきでは28通の応募があった。Google Formsからは370の応募があった。詳細を表1に示す。

表1　五十音別の応募数一覧

あ	12	か	23	さ	9	た	11	な	5	は	7	ま	16	や	6	ら	11	わ	4
い	12	き	14	し	14	ち	7	に	6	ひ	6	み	8			り	3		
う	9	く	6	す	7	つ	12	ぬ	8	ふ	7	む	8	ゆ	4	る	10	を	5
え	5	け	5	せ	14	て	6	ね	13	へ	3	め	9			れ	11		
お	26	こ	9	そ	4	と	14	の	2	ほ	6	も	4	よ	3	ろ	7	ん	7

・応募総数398フレーズの中から、重複しているものは先着順、内容が適切なもの、専門過ぎないもの等の観点で46個の読み札のフレーズを選定した。フレーズに添えるウンチクに関して、内容を吟味し、意味が変わらないように文字数を調整した。

・清水マグロまつりで読み札のお披露目を行った（2021年12月5日清水マリナート）（写真3、4）。

写真3　全体の展示風景

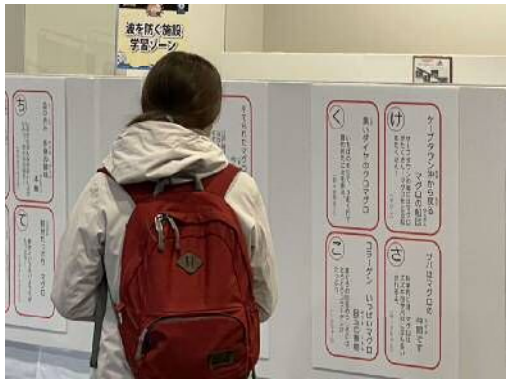


写真4　フレーズに見入る訪問者

・46個の読み札ファイルを静岡県立駿河総合高校に送付し、生徒による絵札の図案の作成を行った。2022年1月上旬に全ての絵札が揃い、405候補（表2）の中から46個の絵札を選定した（表3）。

表2　五十音別の絵札候補一覧

あ	9	か	7	さ	10	た	11	な	10	は	8	ま	10	や	10	ら	10	わ	9
い	9	き	9	し	12	ち	10	に	9	ひ	10	み	10			り	9		
う	9	く	11	す	9	つ	9	ぬ	10	ふ	11	む	8	ゆ	10	る	11	を	5
え	9	け	11	せ	8	て	10	ね	9	へ	10	め	11			れ	10		
お	9	こ	8	そ	11	と	10	の	9	ほ	10	も	9	よ	10	ろ	12	ん	8

表3　デザイン案抜粋

・かるたの裏面のデザインを作成した。デザインには、新たに公募で決まったしずまえのロゴ、東海大学と静岡県立駿河総合高校の校章をデザインとして入れた。また、かるた作成主旨を入れた説明札を作成した。

・デザインの微調整を行い、斎藤印刷に入校し、300個のかるたの製造を委託した。

・2月28日にかるたが納品され（写真5）、個包装後、市役所を介して、市内小学校（95校）および児童クラブ（82クラブ）へ配布した。

写真5　完成したマグロかるた抜粋

・3月22日に東海大学付属翔洋小学校でお披露目会を開催した（プレスリリース実施：静岡新聞、中日新聞、東海大学新聞、静岡朝日テレビ）（写真6）。

写真6　東海大学付属翔洋小学校でのお披露目風景

・静岡市役所清水庁舎での展示を3月22日から4月5日で行う。

・しずチカでの展示を4月7日～4月19日で実施予定。

(4)今後の改善点や対策

初めての取り組みのため、広報の費用の試算が十分でなかった。今後は事前に十分な調査を行い、計画したい。読み札の応募期間が1ヶ月しか設けることができなかった。絵札作成の期間との兼ね合いがあるためであるが、もう少し公募期間を長く設けたかった。コロナ禍のため学生によるPRができなかった。安全対策をしっかりと施して実施する事も可能ではあったが、リスクを考えると、展示だけにせざるを得なかった。

５　地域への提言

マグロかるたを小学校や児童クラブで活用していただき、マグロ愛を育んでもらうとともに、静岡市清水港が日本一のマグロ基地であること、地元への愛着を醸成してもらいたい。

６　地域からの評価

販売してもらえないかとの問い合わせがあり、かるたの評判は高いものと考えられた。今後、小学校や児童クラブで活用してもらい、マグロ、ひいてはしずまえの認知度向上につながることを期待したい。

新たな働き方に対応した移住促進施策

常葉大学　経営学部　小豆川ゼミ
教員：教授　小豆川裕子
参加学生　3年：◎坂井媛香、天野颯汰、池谷昂大、宇佐美花奈、内堀由依子、大高剣斗、尾崎太一
小田悠輝、川口藤馬、野神志帆、平岡優輝、森岡修也、良知幸都　（13名）◎ゼミ長

1. 要約

静岡市では現在、テレワーク等による新たな働き方に対応した移住促進策を推進中である。静岡駅を中心にコワーキングスペース・シェアオフィスが立地しており、常葉大学小豆川ゼミではこれまで令和元年度事業『2020年版 静岡市まちごとテレワークマップ』の制作によって、市内コワーキングスペースの特徴把握を行った。令和2年度事業では、静岡を訪れるコワーキングスペース利用者がまちを楽しみ、まちの魅力を発見し、生活の便利さを知り、交流していただくことを目的に、『2021年版 静岡市まちごとテレワークマップ』を制作した。令和3年度事業ではこれまでの取組を発展させ、静岡ワーケーションとして、学生らしい発想と企画でプロモーション施策として、動画制作を行った。

具体的には、マーケティング施策の検討を行い、あわせて学生が面白い、魅力的だと思う、PR動画の調査とポイントの共有を行った。続いて6グループに分かれ、動画で取り上げるエリアの選定とアピール点の整理、アポどり等の取材交渉、モデル学生の選定、各エリアでの撮影を実施した。その後、編集・音楽付与の協力をいただき、静岡市企画局の意見もいただきながら全体を精査し、動画を完成させた。

2. 研究の目的

静岡市の交流人口を増加させ、移住・定住促進策の一助とすることを目的に、学生らしい発想と企画で動画制作を行う。

3. 研究の内容

「静岡ワーケーション」をテーマに、マーケティング施策を検討し、コワーキングスペースの利用者（20代～30代前半）をコア・ターゲットに、ワーケーション・コースを選定した。6グループに分かれて企画コンテを作成、取材交渉を行い、動画撮影を実施した。その後Oozin Aahs Records代表社員村田貴紀氏より編集・音楽付与の協力をいただき、静岡市企画局の意見もいただきながら、映像を完成させた。

(1) マーケティング施策

学生が検討した本事業のマーケティング施策は、図表1のとおりである。

図表1　静岡ワーケーションのマーケティング施策

セグメンテーション・ターゲティング		
20代～30代前半（コア・ターゲット） 若い人たちに静岡に気軽に訪れて、その体験を発信して欲しい。 ＜ワーケーションの実践者（誰と訪れるのか）＞ 企業勤務の同僚：幅広い層の拡大を狙い、企業にワーケーション文化を組織に普及させるため、フリーランスではなく企業勤務者がメインである。		
施策テーマ		
同僚と仲良くなれる、静岡ワーケーション		
施策概要		
・コロナ禍で、職場の仲間と過ごす時間が激減。一方、いつでも、どこでも仕事ができるテレワークを実践する人が増えている。 ・静岡ワーケーションは、東京から1時間程度で、さまざまな静岡の魅力にアクセスできる。 ・職場の同僚と集中してディスカッションしたり、地元の人たちと交流したり、普段の仕事に磨きをかけるとともに、一緒に静岡の自然、文化・歴史、グルメ、ものづくりを体験することで、仲良くなって、チームビルディング、組織のエンゲージメントへの効果が期待できる。		
ターゲットのニーズ	施策内容	施策のもたらす効果
同僚との仲を深めたい、チームを元気にしたい! 何か楽しい事をしたい。 日常から離れてリフレッシュ（自然、文化・歴史、グルメ、ものづくり・・・）	住んでいる場所を問わず、テレワークで仕事ができる人、そのような環境を提供している企業へ静岡のワーケーションエリアを紹介し、新しいワークスタイル、ライフスタイルを提案する。	静岡ワーケーションが、働く人とチーム、組織を元気にし、気軽に訪れることで、さまざまな出会いと新たな発見で、静岡フアンを拡げていく。

(2) 魅力あるPR動画の事例収集

動画のシナリオを検討するにあたって、1)一般的な商品・サービスのプロモーション動画の好事例、および2)移住・定住、テレワーク移住、ワーケーションをテーマとした動画の好事例の収集を行った。2)において、学生が捉えた好事例のポイント例として以下を示す。

①宮崎県小林市

- 第三者目線の紹介動画になっていたので、市の魅力を紹介されたときに、自分の頭の中で想像することができた。また、面白い冗談を含めながら、話を進めていたので、短い動画だったけれど退屈せずに見ることができた。
- 一見堅い動画のように見えるが、所々に散りばめられた小ネタが面白い。動画から得られる小林市の情報が少ないからこそ、逆に気になったためうまく興味を引いている。西諸弁に気が付かず、もう一度見返したくなる動画だった。
- フランスから来たフランス人の方が、流暢なフランス語で小林市を紹介している動画に一見見えるが、実はフランス語ではなく西諸弁を使って小林市を紹介していたという面白いオチがある。

②和歌山県紀の川市

- 設定が面白い。芝居も最初は、田舎だからみたいな感じで緊張していて、必死に良さを説明するが空回りしている。そして、面接官が知りたいのはそこではないといい、そこから自信満々に地元を説明し、良さを人それぞれに伝えていて面白いと思った。また、途中で出てくる和歌山県紀の川市の動画で住んでいる人に注目して撮っており、地元の人たちの笑顔が良いと思った。

③長崎県大村市

- 地域の魅力を伝える上で重要なことは自分がその地域のことを好きなことである。その地域を好きでなければオススメの場所も魅力も知らないし相手に何も伝わらない。実際私はテレワークマップの時自分がどれ程静岡のことを知らなかったのか痛感したし、伝えれる情報を何も持っていなかった。しかし取材して色んなことを知り、人の温かさをしり静岡のことを前より好きになったと同時に魅力を伝えれるようになった。この経験から人に魅力を伝える時はまずは自分がその地域を好きでないといけないと思った。

(3)スケジュール

プロジェクトの活動スケジュールは以下のとおりである。

2021年

8月～10月：

- プロジェクト全体の目標の共有、進め方に関する検討
- マーケティング施策の検討
- 魅力あるPR動画の事例収集

11月：

- 動画企画

①1日もしくは、1泊2日を想定し、静岡市でのワーケーションをプランニング（計6カ所）
②撮影の可否を確認、③撮影シーンの要件：食事、ワーケーション（エリア）、Workしているシーン、④役割分担と経費計上

- 担当・役割分担の決定および予算案を作成。

12月：

- 映像シナリオ案の検討

①さまざまなアプローチ案作成、②全体方針の決定、③撮影エリアの決定、④企画コンテの作成

2022年

1月：

- 撮影企画の確定・ロケハン・撮影の実施

①企画コンテの確定、②アポどり、日程確定、
③取材準備：モデル決定、撮影シーンの確認、撮影日決定、撮影進行の決定、ロケハン
④撮影の実施（1/25、1/28）

2月～3月：

①映像の集約、②編集、音楽付与、③修正作業、④映像完成、実績・成果報告書の作成

4. 研究の成果

(1) 当初の計画　2021年8月よりプロジェクト全体の目標の共有、進め方に関する検討を行い、年末までに撮影を実施し、2月末までに成果物を完成し、3月に成果発表を行う。

(2) 実際の内容　B:一部修正。年末年始コロナ禍で取材条件に制約があったが、取材先からの多大なご支援をいただき、1月に6グループに分かれて撮影を実施した。その後編集・音楽付与を行い、静岡市企画局の意見もいただきながら、映像を完成させた。概要を図表１に示す。当初3月に行う予定であった成果発表については、関係者との調整を行い4月以降実施する予定である。

(3) 実績・成果と課題

①実績・成果

地方創生テレワークやワーケーション等が注目されるなか、学生の視点で企画・制作した映像発信は、静岡市への移住・定住促進の一助として期待できる。学生は静岡市の魅力の発掘、映像制作の知識の習得、シナリオ作成、取材交渉から撮影までを実践し、多様な関係者との折衝・調整力・柔軟な対応力を身につけ、活きた学びを習得することができた。

制作協力いただいた合同会社Oozin Aahs Records代表社員村田貴紀氏からのコメントは以下のとおりである。

- 学生さんには、予算・時間など限られた中から企画を提案してもらいました。
- 今回の企画で、「V-Log」形式を採用したのが、若者視点らしい動画コンテンツになったと思います。特に飲食店の取り上げ方は、企業、行政には出来ない自由な取り上げ方が出来たと思います。
- 「静岡市ならではのワーケーション」を動画では紹介出来ましたが、より人の注目を集める「静岡市でしか出来ないワーケーション」の造成や提案は出来なかったので、更なる自発的な下調べや、企画の発案、ブラッシュアップ等があると、より良いコンテンツになると思いました。

②課題

課題として、ゆとりのあるスケジュール設定、活動の定義づけとプロジェクトの進捗状況の全体共有が挙げられる。

(4)今後の改善点や対策

今後の改善点や対策として、学生のさらなる主体性、創発性を促すしかけづくり、スケジュール管理の徹底等があげられる。

5. 地域への提言

学生が検討した地域への提言例は、以下のとおりである。

- 動画に登場する各地点のスタンプラリー、割引券、クーポンによる観光促進が考えられる。
- 情報技術の発達により都心にいなくても仕事ができること、静岡市に住み仕事もプライベートも充実させる新たなライフスタイルが画期的であり現代的でおしゃれだというイメージを進展させるべきである。外部企業の協力も加えながらSNSを活用して認知度をあげていけば良い。
- MICEと関連づけた展開が考えられる。

6. 地域からの評価

地域からの評価は以下のとおりである。

このたびは、「新たな働き方に対応した移住促進施策」について調査いただきましてありがとうございます。テレワークの急速な普及とともに、ワーケーションや２地域居住など新たな働き方や生活方式が注目されています。本市の魅力を首都圏居住者等に発信するとともに、ワーケーションを促進するためのプロモーション動画を制作していただきました。

本調査の成果物は、本市への「移住の促進」や「関係人口の創出」等の「人口活力維持」の取組に大いに活用させていただきます。（静岡市企画局企画課　移住・事業推進係）

＜謝辞＞

本事業の映像撮影は、新型コロナウイルス対策まん延防止等重点措置実施期間に、感染対策を徹底しながら行われました。撮影にご協力いただいたエリアスポットの皆様には、心より御礼を申し上げます。あわせて、静岡市地域おこし協力隊小林大輝氏、合同会社Oozin Aahs Records 代表社員村田貴紀には、専門のお立場から多大なご支援・ご指導を賜りました。重ねてお礼を申し上げます。

図表2　静岡市ワーケーション映像の概要

	動画シーン例	Cut 例	Terop	概要
※	タイトル画面		同僚と仲良くなれる静岡ワーケーション	静岡ワーケーションのコンセプトを提示
※	イントロダクション		仕事（WORK）×休暇（VACATION） 東京から新幹線で1時間 仲間と一緒に、静岡めぐり	静岡ワーケーションの特徴を提示
1	静鉄のコワーキングスペース／シェアオフィス「=ODEN（イコールオデン）」 〒420-0839　静岡市葵区鷹匠2丁目8番10		まずは仕事。＝ODENへ 色とりどりでワクワクしてきた 仕事が捗る～！ さあ、休憩だ 静岡の人ってあたたかい	仕事はもちろん、打ち合わせ、人脈作りなどコミュニケーションの場としてもお使い頂くことができます。「＝ODEN」から新たな出会いやビジネスが生まれることを目指しています。 https://oden.shizutetsu.net/
2	さわやか（静岡瀬名川店） 〒420-0913静岡市葵区瀬名川２丁目39-37		そろそろお昼の時間だな～ お腹空いたな～ お肉のいい匂いがする！ さわやかといったらげんこつハンバーグだよね 乾杯！ キター！げんこつハンバーグ！ おいしかったー！ この調子で午後も頑張ろう！	げんこつハンバーグの炭焼きレストランさわやか「安心・安全・元気の出るおいしさ」で、静岡県下34店舗展開中。 https://www.genkotsu-hb.com/shop/senagawa.php
3	久能山東照宮 〒422-8011静岡市駿河区根古屋390		食後の運動で1159段の階段は少しきつい・・・ でも駿河湾の絶景を仲間と一緒に見ることができていいリラックスに！ そして、迫力満点の真っ赤な門！ 清めの手洗い場でしっかりと綺麗にしてから先に進みます 一番奥にあるきれいな御殿！ これからも同僚と仲良く仕事ができますように・・・ 最後におみくじを！！ 結果は小吉だったので結んでおきました	徳川家康公をお祀りする最初の神社本殿、石の間、拝殿は国宝指定。 参拝は、静岡鉄道　日本平ロープウエイの利用、もしくは久能山下からの徒歩ルートがある。 https://www.toshogu.or.jp/
4	一棟貸の宿「日本色」 レセプション 〒421-0122静岡県静岡市駿河区用宗2丁目２６－８シーサイドハイツ１F		今夜の宿へ。古民家をリノベーションした一棟貸の宿 日々の忙しさを忘れられる、ゆったりとしたひとときを 映画鑑賞やゲームを仲間と一緒に 地酒と地元の干物を堪能 おしゃれな用宗クラフトビール 故郷に帰ったような、くつろぎのひとときを満喫	自然の色、四季の色、静岡の色。 静かな港町、用宗で仲間とすごす、ゆとりのひとときを。 各棟には備え付けの囲炉裏が完備。 食事付きプラン以外にも、持ち込んだ好きな食材や地元の魚介類でバーベキュースタイルの食事が楽しめる。 JR用宗駅から無料送迎サービス　無料貸出自転車あり https://nihoniro.jp/
5	駿府の工房　匠宿 静岡県静岡市駿河区丸子3240－1		駿府の工房　匠宿 展示品もとてもきれい　職人ってすごい！ みんなで創作体験もできる！ 期間限定の染物展も色鮮やかできれい 昼食は施設内のカフェで：HACHI&MITSU おいしそう！ 今度はみんなで創作体験やろう！	静岡の伝統産業から　「創る・遊ぶ・学ぶ・触れる・観る・味わう」ことができる体験型施設。たくさんの方に駿府に触れていただき、次代に伝えていくことで この豊かな文化を未来へと結んで行きます。 https://takumishuku.jp/
6	T's green omachi（ティーズグリーン オマチ） 〒420-0035 静岡県静岡市葵区七間町１６－ ７ OMACHIビル 1階		静岡の味を堪能できる T'S green Omachi お茶の良い香り 静岡の宝石箱や～ 最高！ ごちそうさまでした 静岡の味を堪能できたー また静岡で仕事したい	お茶と和スウィーツを五感で楽しめるくつろぎのお茶カフェ 映える甘味の人気店。

人口減少が続く中山間地の移住者増加策の検討
～　移住マップとあおいくんちゃんねる制作を通して　～

常葉大学 経営学部学部 山田雅敏ゼミ（情報学ゼミ）
教　　員：　講師　山田　雅敏
参加学生：　矢崎理子，稲垣涼佳，金指光希，有賀健太郎，
桑原諒也，杉本康平，堀池稜人

1.　要約

本研究では，人口減少が続く静岡市葵区オクシズへの移住者を増加させるために，(1)葵区オクシズに関する移住マップの制作，(2) YouTube「あおいくん ちゃんねる」動画シナリオを作成の2点の実施を目的とした．方法として，7月中旬に葵区役所地域総務課の担当者とキックオフミーティングを実施した．その後，現地調査およびアンケート調査を行い，オクシズの移住に関する情報を収集した．そして，移住マップへの掲載内容の検討を行い，マップ制作を行った．並行して，オクシズの魅力に関する情報を配信するために，葵区役所公式YouTube「あおいくん ちゃんねる」で配信するオクシズの紹介動画のシナリオを作成した．成果として，移住マップは3月下旬に完成した．また，シナリオに沿ってオクシズを紹介する動画が撮影された．今後の予定として，市役所内や関連施設，移住者向けのイベント等で移住マップを配布，およびYouTube動画が配信される予定である．以上の試みにより，葵区オクシズへの移住者増加の一助として寄与すると期待される．

2.　研究の目的

少子化が大きな社会問題となっている昨今，静岡市も例外ではなく人口減少の傾向が解決課題として挙げられる．そこで，静岡市では人口ビジョンの総合戦略を掲げ，人口減少対策を推進することにより2040年の推計人口が558,931人から594,305人と6.3%上方修正されるなど減少速度が緩和され，対策の効果が認められた．

しかし一方で，旧安倍６村に焦点を当てると，2012年から2020年の8年間でマイナス22.3%と人口の約４分の１が失われている状況にあり，自治会連合会長の聞き取り調査からも，著しい人口減少に対する不安の声が認められた．

そこで本研究は，葵区オクシズの人口減少を緩和するために静岡市葵区役所地域総務課と連携し，移住検討者向けの移住マップ制作と，葵区公式YouTubeチャンネル「あおいくん ちゃんねる」の動画作成（シナリオ担当）を行うことを目的とした．研究の意義として，移住検討者に対して情報が発信されることにより，オクシズへの移住の認知が促進されることが期待される（図1を参照）．

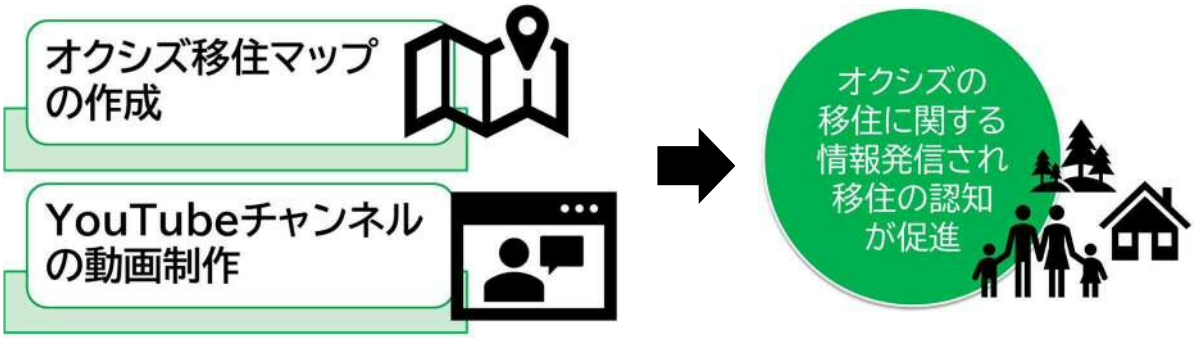


図1　移住マップ制作とYouTube動画作成を通した人口減少緩和の対策

3.　研究の内容

3.1.　実施スケジュール

- 7月上旬　キックオフミーティング
- 7月中旬　葵区役所地域総務課の職員と打ち合わせ（静岡市コ・クリエーションスペース）
- 8月～11月：アンケート作成，移住マップ掲載内容の検討，YouTubeのシナリオ作成，現地調査
- 1月～2月：アンケート結果と分析，画像の収集，移住マップの作成，YouTube動画の撮影
- 3月下旬：　移住マップの納品（YouTube動画は後日，配信予定）

3.2.　ミーティング方法

コロナ禍において対面によるミーティングが制限される中，対面とオンラインを併用したハイブリッド型のミーティングにより情報共有を行った．7月には静岡市コ・クリエーションスペースを利用して葵区地域総務課の担当者との打合せを行った．またゼミ学生は，学内の教室，もしくはMicrosoft Teamsを利用して，それぞれ移住マップとYouTube動画のシナリオを検討した（図2参照）．

図2　ハイブリッド形式によるミーティング方法

3.3.　移住マップの制作

現地調査およびアンケート調査を実施し，オクシズの移住に関する情報を収集した．続いて，絵コンテを作成してデザイン案を考案し，校正作業を経て移住マップを作成した．

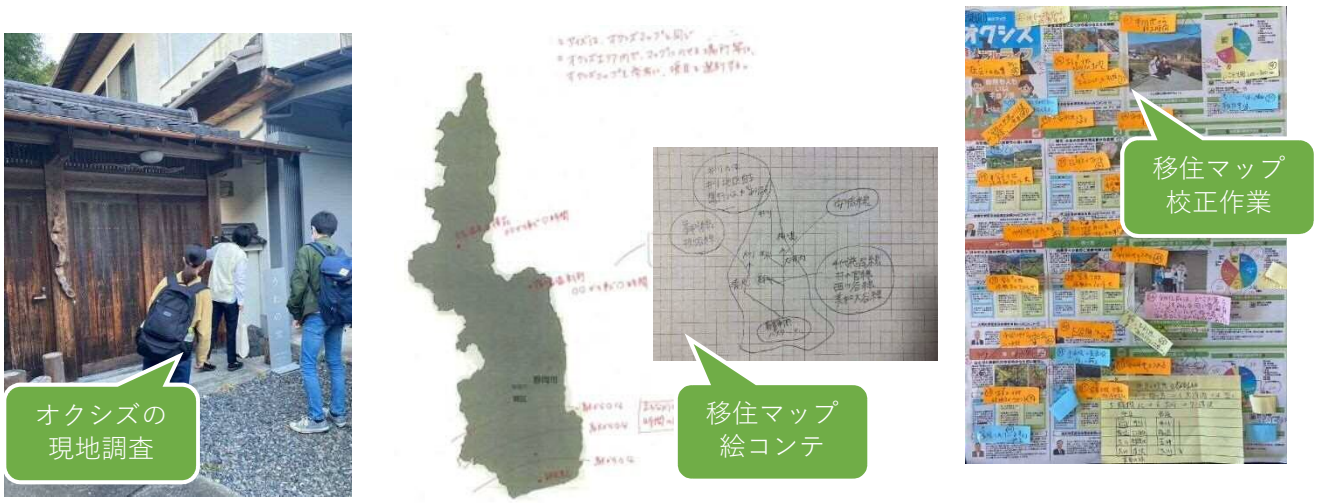


図2　オクシズ現地調査（左画像），移住マップの絵コンテ（中画像），移住マップの校正（右画像）

3.4.　YouTube動画「あおいくん ちゃんねる」のシナリオ作成

「あおいくん ちゃんねる」のシナリオを検討した後，オクシズの梅ヶ島などを中心に撮影を行った．今後，映像編集を経て，YouTubeに配信される予定である（図3参照）．

図3　YouTube動画のシナリオ作成（左画像）と撮影風景（右画像）

4.　研究の成果

(1) 当初の計画

7～8月：　インターネットや先行研究によりオクシズへの移住に関する調査

9～11月：　YouTube「あおいくんちゃんねる」のシナリオ作成

※　動画の撮影・編集に関しては，静岡市の委託事業者が担当

10～1月：　葵区オクシズの移住マップの制作

(2) 実際の内容（Aは予定どおり、Bは一部修正、Cは中止など）とその理由

A：研究はほぼ計画通り，実施された．

（まん延防止等重点措置が適用された期間は，学外での活動自粛し，オンラインにより対応）

(3) 実績・成果と課題

葵区オクシズ人口減少対策プロジェクト「葵区Move To Okushizu」の報告会が実施され，その様子は静岡新聞にも掲載された（許諾申請済）．また移住マップが3月下旬に完成し納品された．さらに，YouTube撮影も終了し，今後は編集作業を経て配信される予定である．これらの移住情報が発信されたことにより，移住検討者に対する移住への認知が促進されることが期待される．さらに，大学生が移住マップや映像制作に直接参加したことにより，葵区の人口減少に対する対策が若い世代にも広まったと推察される（図4参照）．

オクシズ人口減防げ
静岡市 産官学連携
魅力発信事業など報告

図4　葵区オクシズ人口減少対策プロジェクト「葵区Move To Okushizu」の報告会の様子

※静岡新聞の記事に関しては，掲載の許諾申請済み

図4　葵区オクシズの移住マップ（プライバシー保護のため，一部ボカシ処理を行っています）

(4) 今後の改善点や対策

移住マップなどの紙媒体に加え，オクシズへの移住や交通網・住居などに関する情報をインターネットにより発信することが必要と考えられる．

5.　地域への提言

葵区オクシズは静岡駅周辺から身近な距離にあるエリアも多くあり，想像されるような不便さは少ないと考えられる．そこで，移住マップ配布に加えて，ホームページによりオクシズへの交通網や住居の情報を積極的に発信することで，移住への認知が促進されると考えられる．

6.　地域からの評価

葵区役所をはじめ，オクシズ移住者や地元市民，大学生との共同で移住マップとYouTube動画が作成され，報告会やホームページにおいても幅広く活動が周知されたことから，地域からの評価は一定程度得られたと推察される．

謝辞

本研究は，令和3年度しずおか中部連携中枢都市圏地域課題解決事業「人口減少が続く中山間地の移住者増加策の検討」の助成採択を受けたものです．静岡市葵区役所地域総務課の職員の方々をはじめ，インタビュー，アンケートにお答え頂いた市民の皆様，ご協力頂いた方々に謝意を表します．

参考資料

- 静岡市公式公式ホームページ(最終閲覧日:2022年3月16日UTC) https://www.city.shizuoka.lg.jp/
- 葵区オクシズ人口減少対策資料（2021年5月）
- 葵区オクシズ人口減少対策プロジェクト「葵区Move To Okushizu」令和3年度活動報告会資料（2022年3月）

住民主体の効果的介護予防プログラムについて

常葉大学健康科学部静岡理学療法学科
教　　員：教授　磯崎弘司　講師　中野聡子

1. 要約

内閣府によれば2021年わが国の高齢化率は29.1%、2050年は36.5%と予想されている。日本の高齢化問題は世界に例を見ない問題であり、世界的にも注目されている。地域高齢者の健康増進や介護予防は、高齢者問題を解決するための焦点となっている。そのため地域高齢者の健康増進や介護予防を目的に各地でご当地体操が考案されており、静岡市では、介護予防体操「しぞ～かでん伝体操」の普及促進に取り組んでいる。

本年度、市内7会場で行われる筋肉量測定会(全２回)に参加した65歳以上の一般高齢者を対象にマルチ周波数体組成計測及び自立体力測定を前後で実施。対象者には、日常生活活動量計を3か月間使用してもらい活動量を調査した。調査は筋肉量測定会1回目、3か月後に2回目の調査を実施し、各調査項目に対し3か月間の変化について比較検討を行い、以下のことが明らかとなった。

① 自立体力測定により、自分の体力結果を見える化することは介護予防活動に向けて有効な動機づけにつながると考えられる。
② 活動量計を使用して活動量を自己モニタリングすることは、全体として歩数を増やし、活動量を確保することに効果的であると考えられる。
③ 体組成計測により筋肉量の減少がみられたことから、運動負荷量を増やす必要が考えられる。

今回、市民に対し自分の健康状態を「見える化」し、市民自ら自己の健康・運動状態を確認できること、個々の状態への適切な運動負荷量の設定は、より有効性の高い健康への自己啓発につながると考えられる。

2. 研究の目的

静岡市では静岡市版介護予防体操「しぞ～かでん伝体操」を中心とし、この体操を自主的に取り組む市民グループ及び活動拠点は、市内約171個所にのぼり、約3800人の市民が介護予防に取り組んでいる。市が推奨している介護予防活動には、手足の筋力強化、認知機能の維持向上、口腔ケアなどがある。課題が多岐にわたり高齢者の特徴に応じて、総合的な介護予防の取組につながるよう普及啓発している。

研究の目的は、この介護予防プログラムの有効性を調査すると共に、新規対象者獲得に向け、その動機づけとなる取組の有効性を検証することで、市民の実態に合わせた介護予防事業の展開につなげていくことを目指す。

3. 研究内容

(1)　研究方法

方法は、筋肉量測定会としてマルチ周波数体組成計測(TANITA:MC-980A-Nplus)、および自立体力測定(羽立工業自立体力測定　形式:NicePeople)を実施し、日常生活活動量計(オムロン自活動量計:HJA405T)を3か月間使用してもらい、筋肉量と活動量の3か月間の変化について比較検討を行った。

(2)　対象者

筋肉量測定会に参加申し込みをした65歳以上の市民264名を対象とした。対象者には研究についての説明と同意を得た。

(3)　測定項目

測定項目はマルチ周波数体組成計(写真1：体重、体脂肪率、脂肪量、除脂肪量、推定骨量、筋肉量、水分量、BMI)、羽立工業自立体力測定(写真2：歩行、写真3：手作業、写真4：身体調整、写真5：生活習慣アンケート)、日常生活活動量計(写真5)の変化を調査した。

(4)　分析方法

調査データは統計ソフトSPSSを用い多変量データ解析を行い、参加時と３か月後の調査データ(体重、体脂肪率、脂肪量、除脂肪量、推定骨量、筋肉量、水分量、BMI、歩行、手作業、身体調整、姿勢変換)を比較検討した。3か月間の運動量変化については、運動量モニタリング群と運動量モニタリングなし群の2郡に分け、2群間の自立体力測定値を比較検討した。両解析の有意差は5%とした。

写真１：体組成計

写真2：歩行

写真3：手作業

左　写真4：身体調整

右　写真5：
生活習慣ｱﾝｹｰﾄ・活動量計

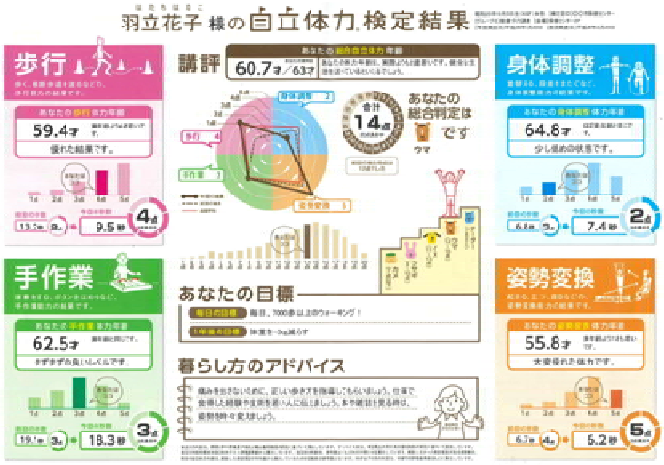


図1：自立体力測定結果シート

4.　研究の成果

(1)　当初の計画

筋肉量測定会は、葵区（地域リハビリテーション推進センター・アイセル21・北部交流センター・鯨が池老人福祉センター)、駿河区（来てこ・南部保健福祉センター)、清水区（はーとぴあ清水）の7会場で実施予定。参加者は530人の予定。

(2)　実際の内容（Aは予定どおり、Bは一部修正、Cは中止など）とその理由

B　一部修正

新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言下のため参加者が集まらず、参加者合計は232名であった。

(3)　実績・成果と課題

参加者のうち、1回目と2回目のデータに欠損値のない141名を解析対象とした。全体値の羽立工業自立体力測定の結果では、歩行、身体調整、手作業、姿勢変換で有意に改善がみられた。一方でマルチ周波数体組成計の結果より、体重は変化しなかったものの、筋肉量は有意に減少し、体脂肪は有意に増加していた。全身の筋力を反映する握力は前後で変化が見られなかったことから、筋力に影響するほどの筋肉量の減少ではないことが確認できた(表１)。筋肉量の減少と脂肪量の増大は、新型コロナウイルス感染拡大による行動制限が原因と考えられる。

日常生活活動量を3か月間自己モニタリングした活動量計測定結果より、1週間当たりの平均値を確認した。その結果、1日の歩数は5004歩±2384歩であり、65歳以上の運動として静岡市が目標としている6000歩に近い値であることが確認できた。さらには、1週間に2回以上6000歩以上の歩数があるものは全体の52%であり、運動習慣が定着している者が多い事が確認できた。一方で、早歩きの歩数は1652±1838歩であり、歩数全体の3割程度であった。

3か月間の歩数推移を個別に確認すると、開始時よりも歩数が増加している者が3割程度あることが確認できた。その他の参加者においても約半数は3か月の間、1日平均5000～7000歩程度の活動量を確保し続けていることが確認できた。一方で、モニタリングをしていても1日平均の歩数が2000～3000歩程度の者が2割程度存在することが示された(図2)。

活動量計を用いた日常生活活動量を自己モニタリングしていた者とそうでない者の自立体力測定結果を比較すると、モニタリングしていた者では歩行と姿勢変換に改善が見られた。活動量を保つことは体力指標の歩行や姿勢変換に効果があることが示された(図3)。

表１：自立体力測定結果　1回目(ﾍﾞｰｽﾗｲﾝ)と2回目　3か月間の変化

全体像（N=141）

		ベースライン			2回目			*P*-value	
年齢		74.25	±	5.61					
性別	男	29							
	女	112							
身長		153.99	±	7.44					
体重		52.54	±	9.34	52.58	±	9.26	0.670	
BMI		22.98	±	11.30					
筋肉量		35.68	±	6.11	35.42	±	6.05	0.002	*
体脂肪		27.56	±	7.83	28.22	±	7.79	<0.01	*
握力	右	25.32	±	6.29	24.91	±	6.04	0.541	
	左	23.67	±	6.52	23.65	±	6.60	0.268	
歩行能力		12.05	±	2.22	11.56	±	2.06	<0.01	*
身体調整能力		9.01	±	2.50	8.39	±	2.29	0.002	*
手作業能力		27.37	±	5.62	26.07	±	3.66	<0.01	*
姿勢変換		11.28	±	4.91	10.50	±	3.05	0.004	*

5. 地域への提言

以上の結果より以下の課題を提案する。

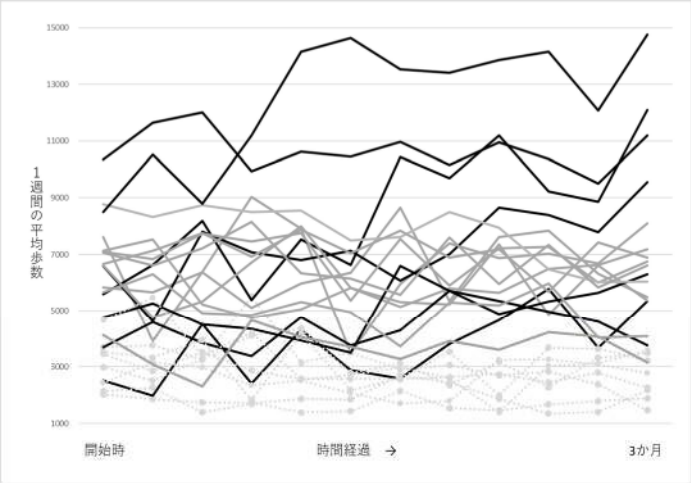


図2：3か月間の活動量計自己ﾓﾆﾀﾘﾝｸﾞの推移

増加群(黒 n=7) 目標歩数維持群(灰色 n=12) 歩数低値維持群(点線 n=7)

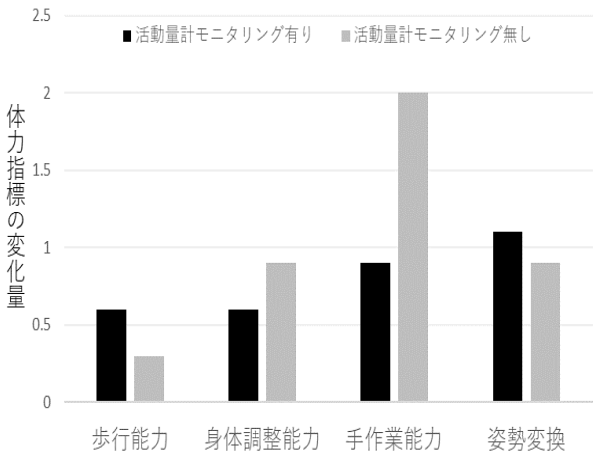


図3：活動量計ﾓﾆﾀﾘﾝｸﾞ有無による体力指標変化量

活動量モニタリング有(黒 n=91) 活動量モニタリング無(灰色 n=50)

①筋肉量測定及び自立体力測定により、自分の体力結果を「見える化」することは介護予防への有効な動機づけにつながると考えられる。事後アンケートの結果から、測定会に参加することで自身の体力や健康にむけた意識向上につながったとの回答が７割を超えた。これを機に、静岡市が推奨する「しぞ～かでん伝体操」「しぞ～かちゃきちゃき体操」「歯っぴー★スマイル体操」など具体的に取り組める体操の助言を行うことでさらに効果が高まるのではないかと推察できる。

②活動量計を使用して活動量を自己モニタリングすることは、全体として歩数を増やし、活動量を確保することに効果的であると考えられる。将来的には、静岡市で取り組む元気静岡マイレージ等に反映し、身近なスマートフォンやPC電子媒体などで健康状態や活動ポイントを有効に活用できるアプリを開発し活用することが、健康長寿を支える一つのアイテムになりうると考える。

③体組成計測により筋肉量の減少がみられたことから、運動負荷量を増やす必要が考えられる。

歩数を確保することはできていたが、筋肉量の減少が確認できたことから、運動負荷量が少ない可能性が考えられる。自己の能力に応じて歩行中の早歩きの割合を高めることや、「しぞ～かでん伝体操」で使用する重錘負荷量を増やすなど個人の状況に合わせた負荷設定を積極的に取り組むことが推奨される。また市民が身近で気軽に健康増進が図れる環境としてハイキングコース等の整備・拡充も望まれる。

今回の調査では、栄養・休養・ストレスに関して明確に実施していない。今後は住民の運動機能に加え、これらの点においても「見える化」を行い、総合的なフィードバックが必要であると考える。このことが、健康寿命の延伸への足掛かりとなることを望む。

6. 地域からの評価

大多数の参加者からは、自分の健康状態を「見える化」し、各自にフィードバックしたことに大変好評価を得ている。自分の健康状態を「見える化」し、市民自ら自己の健康・運動状態を確認できることは、健康への自己啓発につながると考えられる。今後もこの事業を継続し、健康管理・増進につなげたい声が多かった。活動量計の継続使用を望む声もあり、市民の健康増進・運動量向上にむけた身近な媒体として活動量計等の活用も有効な方法である。

一般的に高齢者は社会参加活動の低下がみられる。高齢者が健康でいることは社会参加につながり自分の役割を確立・認識でき、高齢者の生きがい・QOL向上につながることを期待したい。

「静岡市はマグロ王国」であることの認知度向上に関する研究

常葉大学 sun ＆leaf
教　　員：准教授 中村俊哉
参加学生： 川上瑠菜、清水　希紗良　他

１ 要約

日本一のマグロの水揚げ量を誇る清水港。大間や三崎、焼津に比べ認知度が低い。この状況を改善するため、本研究では、将来の静岡市を担う子ども達に向け、地域の特色を知り、慣れ親しみ、地域への誇りをもてる「しずまえ鮮魚普及教材」を開発し、その効果を検証することを目的としている。具体的には、小学校低学年対象とした教材開発（すごろく）を行った。清水港の特色や歴史、この地域を支えている文化としての価値をみいだせるような内容とした。この取り組みを通し、小学生での清水港やマグロに対しての認識は深まり、子どもたちが地域に愛着をもち、誇りがもてるという成果が見込まれる。また、将来的には、静岡市民の地域や自然環境の大切さの認識やライフスタイルの転換が図られると考えられる。すごろく作成には、しずまえ振興協議会員・経済局農林水産部水産漁港課などに協力していただいた。より活用してもらえるよう静岡市内のすべての放課後学童クラブに作成したすごろくを郵送した。取材や調査に基づいたすごろくを作成することができたことはよかったが、コロナの影響で実際に放課後学童クラブに行き、一緒にすごろくをすることはできなかった。水産漁港課の方から、小学生対象のすごろく作成について、好意的な見解をいただけた。

２研究の目的

静岡市を担う子ども達に向け、地域の特色を知り、慣れ親しみ、地域への誇りをもてる「しずまえ鮮魚普及教材（すごろく）」を開発し、その効果を検証する

３研究の内容

静岡市には、日本一の冷凍マグロの水揚げ量を誇る清水港がある。静岡市は、マグロにかける一世帯当たり年間支出額も全国一だという。さらに、ツナ缶のメーカーも、静岡市の清水区に集中するということである。このようなことは、歴史の積み重ねで築き上げられたもので、文化でもある。将来の静岡市を担う子ども達が、地域の特色を知り、慣れ親しみ、地域への誇りをもつことは、地域愛が育まれるきっかけにもなり、重要なことである。

そこで今回は、子ども達が親しみながら学べるように、すごろくを作成することとした。すごろくのマスには、○×や三択などのクイズを取り入れたり、マグロに関する情報を載せたりすることによって、マグロについての知識を増やせるようにした。対象は、小学校低学年とした。低学年でもできるようなすごろくであれば高学年においても行えることと、配布することにした放課後学童クラブに通う子ども達は、低学年が多いと調査から明らかになったからである。高学年でも使えるよう漢字も使用し、ふりがなを振るようにした。

本来であれば、様々なマグロに関するイベントに参加したり、子ども達と仮のすごろくで遊んだりする活動も通して、静岡市民の方のマグロについての愛情や実態を把握していきたかったが、コロナ禍のため、実際のマグロの水揚げやセリの様子の取材もできず、イベントの多くも中止になり、学校や放課後学童クラブにも行けず、十分な取材や実態調査は行うことができなかった。しかし、12月5日に行われた「マグロ博」には、参加することができ、漁港の雰囲気や資料を多く得ることができ、それを中心にすごろく作成をおこなった。また、静岡市経済局農林水産部水産漁港課の方からも資料をいただくこ

ともできた。

またすごろくの完成後にも、子ども達と一緒にすごろくで遊ぶことを通しながら、評価を行いたかったが、コロナ禍のため行うことができなかった。

写真1　しずまえ博の様子1

写真2　しずまえ博の様子2

写真3　しずまえ博の様子3

写真4　しずまえ博の様子4

写真5　しずまえ博の様子5

４研究の成果

(1) 当初の計画

日本一の冷凍マグロの水揚げ量を誇る清水港の特色を生かした教材（すごろく）を開発し、子ども達と実践することにより評価を検証する。また、静岡市が取り組んでいるマグロに関わるイベントを学生とともに行い、その効果を調査する。

(2) 実際の内容（Ａは予定どおり、Ｂは一部修正、Ｃは中止など）とその理由

1. しずまえ鮮魚普及教材(日本一の冷凍マグロの水揚げ量を誇る清水港の特色を生かしたすごろく）を開発・・・B
   - 遊びながらマグロについて学べるようすごろくの作成とした。
   - 様々な学年でも遊べるよう小学校低学年を対象としたすごろくとした。
   - 活用をしてもらうために放課後学童クラブに郵送した。
   - 子ども達とすごろくができず評価まで至らなかった。
2. 小学校内での授業の実施と効果検証・・・C
   - コロナ禍のため、実施できなかった。
3. イベントへの参加と「しずまえ新聞」の紙面を活用した啓発活動・・・B
   - 静岡市は、マグロの認知で向上のために様々なイベントを行っているが、コロナ禍のため、多くが中止となった。しかし、12月5日に行われた「清水マグロ博」は行われたため、参加した。

(3)実績・成果と課題

静岡市を担う子ども達に向け、地域の特色を知り、慣れ親しみ、地域への誇りをもてる「しずまえ鮮魚普及教材」としてのすごろくを作成した。しかし、評価の検証はできなかったため、より効果的な「しずまえ鮮魚普及教材」の開発を行うことが求められる。

(4)今後の改善点や対策

今回の取り組みは、小学校低学年を対象としたすごろくの作成であったが、興味のある子どもしか行われない可能性がある。今年度はできなかったが、静岡市全ての子ども達を対象とした普及教材があるとよりよいと考える。そのためには、各年齢に応じた授業プログラム開発もよいかと考える。各校種のカリキュラムに位置づけられるような授業を開発することで、授業として実践されていく可能性も高まる。また、今回、他大学の学生とイベント参加できたが、交流まではできなかったようだ。学生同士の交流も踏まえた認知向上の取り組みができたらさらに盛り上がることができたかもしれない。今回は静岡市を中心とした取り組みであったが、マグロの文化は静岡県全体に関わってくるものである。そのため、現段階では静岡市の取り組みとして行ったが、近隣の市も視野に入れた取り組みができるようにすることも必要である。

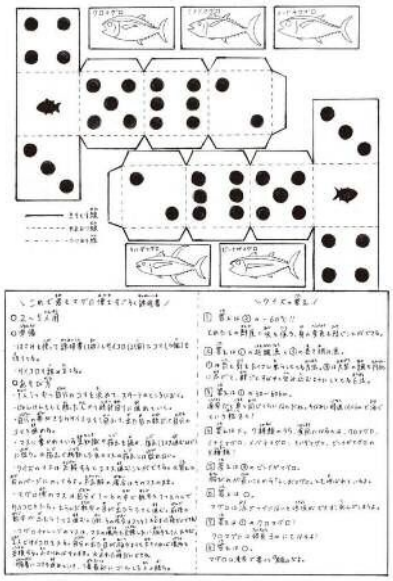


図1　さいころとルール

図2　すごろく

５地域への提言

どのような事柄においても日本一の地域に住んでいると知ることは、子どもたちにとって地域の自慢になり、地域を愛するきっかけになり、地域アイデンティティを育むものである。そのため、今回においては、冷凍マグロ水揚げ日本一であることや、それにまつわる情報をすごろくにした。改善点でも取り上げたが、教育の一環として取り上げることができるようになるとさらに素晴らしいと考える。そのためには、教育委員会や各学校の校長先生や現場の先生との連携が求められるため、市役所など、様々な部署の横断的な情報共有や教職員用の研修などを行うことが理想であろう。

６地域からの評価

水産漁港課の方から、小学生対象のすごろく作成について、好意的な見解をいただけた。

「町民一人一スポーツの実現」に向けた事業運営戦略

常葉大学　健康プロデュース学部村本ゼミ、神力ゼミ
教　　員：准教授 村本名史、助教 神力亮太
参加学生：茂木英治、新海悠河、常葉大学陸上部

１要約

吉田町民のスポーツ実施率向上を目指し、①吉田町のスポーツ施設や実際に実施されているスポーツ資源の発掘、②吉田町の全ての方々が参加しやすく実施しやすい新規スポーツ種目の考案、③吉田町の方々が使いやすく効果の期待できるランニング等のアプリの紹介、④駅伝大会などのスポーツイベントへの学生による運営サポート、⑤中高年の方だけではなく若い世代の方々へのスポーツ参加を促すことが期待できる魅力的なコンテンツに関する情報発信、⑥運動やスポーツ参加を促し吉田町の魅力を発信できるノベルティの開発を実施した。その結果、他地域等で実施されているスポーツや運動、アプリ等を紹介・提案した。また、スポーツ大会参加者等からのアンケート結果から、大会参加者を増やすための基礎的資料を得ることができた。さらに、スポーツ参加を促し吉田町の魅力を発信できるトートバッグも作成すると共に、スポーツ推進委員会のオンライン会議も実施した。

２研究の目的

吉田町民のスポーツ実施率向上につながる内容を提案し、その実施や補助を行うことを本事業の目的とした。

３研究の内容

本事業では吉田町民のスポーツ実施率向上を目指し、①吉田町のスポーツ施設や実際に実施されているスポーツ資源の発掘、②吉田町の全ての方々が参加しやすく実施しやすい新規スポーツ種目の考案、③吉田町の方々が使いやすく効果の期待できるランニング等のアプリの紹介、④駅伝大会などのスポーツイベントへの学生による運営サポート、⑤中高年の方だけではなく若い世代の方々へのスポーツ参加を促すことが期待できる魅力的なコンテンツに関する情報発信、⑥運動やスポーツ参加を促し吉田町の魅力を発信できるノベルティの開発を実施した。

４研究の成果

(1)当初の計画

①スポーツ資源（施設等のハードと行事等のソフト）の発掘（8月以降）
②全ての町民が参加しやすい新規スポーツ種目の考案（8月以降）
③町民が使いやすいランニング等のアプリの紹介（8月以降）
④スポーツイベント（駅伝大会等）への学生サポート（2022年1月）
⑤若い世代へのスポーツ参加促進を期待できる魅力的なコンテンツに関する情報を発信（8月以降）
⑥スポーツ参加を促し吉田町の魅力を発信できるノベルティを開発（8月以降）

(2)実際の内容とその理由

①スポーツ資源（施設等のハードと行事等のソフト）の発掘　A
②全ての町民が参加しやすい新規スポーツ種目の考案　A
③町民が使いやすいランニング等のアプリの紹介　A
④スポーツイベント（駅伝大会等）への学生サポート　B

スポーツイベントの実施会場として予定していた吉田町総合体育館がワクチン接種会場のためにスポーツ行事には使用できなくなったため、会場を吉田町体育センターへ変更し「ソフトバレーボール大会」と「ダーツ大会」のみサポートを実施した。また「駅伝大会」は、津波警報のために中止となった。

⑤若い世代へのスポーツ参加促進を期待できる魅力的なコンテンツに関する情報を発信　A

⑥スポーツ参加を促し吉田町の魅力を発信できるノベルティを開発　A

(3)実績・成果と課題

①スポーツ資源（施設等のハードと行事等のソフト）の発掘

吉田町スポーツ推進委員やスポーツイベント参加者（年代、性別、居住地、参加動機、参加費、感想）への聴き取り調査、インターネットを利用した情報収集などを実施した。これまで吉田町教育委員会と吉田町スポーツ推進委員会によってソフトバレーボール、ファミリーバドミントン、インディアカ、ダーツが行われてきた。吉田町の名所・旧跡を利用したウォークラリーや公園、海辺の砂浜でのスポーツイベント実施の可能性も挙げられた。

②全ての町民が参加しやすい新規スポーツ種目の考案

他地域等で実施されているゆるスポーツや超人スポーツ、高齢者や低体力者にも実施可能なホッケーバレー、吉田町の食材を活用したマラソン等の多くの町民が参加しやすいスポーツや運動を提案し、次年度に向けてスポーツ参加を促すための「スポーツ栄養教室」なども発案した。

③町民が使いやすいランニング等のアプリの紹介

「TATTA（タッタ）」というRUNNET連動のGPSアプリを紹介した。これは、練習の走行距離を記録し、走行データを自動アップロードするものであり、マラソン大会の他の参加者との比較が可能である。また、日本生命保険相互会社様からは「あるくと」をご紹介頂き、次年度以降に活用方法を含めて検討を進めて行く予定である。また、吉田町や吉田町の企業へ「スポーツエールカンパニー」制度や「FUN+WALK PROJECT」推進することも提言した。

④スポーツイベント（駅伝大会等）への学生サポート

吉田町総合体育館がワクチン接種会場のためにスポーツ行事には使用不可となったため、大幅な計画変更となったが、「よしスポ―サークル」における活動（ソフトバレーボール親睦大会【2021年11月7日】、ダーツ大会【2021年11月28日】）において、現在実施している活動の改善案を提案するための参加者等へのアンケート調査を実施した。ソフトバレーボール親睦大会での参加動機には「楽しむため、体を動かしたいため。」「運動不足解消のため。」「イベント役員による紹介。」「例年参加している。」「会社の人に誘われてきた。」「毎年参加しているから。健康のため。」「友人の紹介、親世代が参加するから一緒に参加。」などがあった。

写真1　アンケート調査を実施したソフトバレーボール大会

またダーツ大会では「去年に引き続き参加、スポーツ推進委員からの勧め。」「吉田町のダーツクラブに所属していて毎年参加しているから。」「教室に通っており、毎年の定例で参加。」「スポーツ推進委員の勧め、以前の大会で準優勝であったからリベンジ。」「10年以上続けていて、6回目ぐらいの参加。」「毎年の参加。」「ダーツ教室繋がりで参加。」「20年近くダーツしている、毎年出場していて週一で練習している。」「優勝を求めて。」などの参加動機があった。

⑤若い世代へのスポーツ参加促進を期待できる魅力的なコンテンツに関する情報を発信

吉田町の公式LINEアカウントや吉田町の広報誌「広報よしだ」だけでなく、FacebookやInstagramなどの他のSNSも使用し、吉田町の運動を含めた様々な企画に関する情報発信を提案した。

⑥スポーツ参加を促し吉田町の魅力を発信できるノベルティを開発

スポーツイベント参加者やスポーツを多く実施した吉田町民へ配布することを念頭に置いてノベルティを作成した。スポーツで使用する衣服やシューズを入れることができるトートバッグに、吉田町を一目でイメージできる吉田町PR部長の「よし吉」と学生サポートを通じて吉田町のスポーツ活性化を支援する常葉大学のロゴマークをプリントした。使用者からの感想を集め、さらに喜ばれるノベルティの開発に役立てる予定である。

写真2　吉田町と常葉大学のコラボトートバッグ

また、定例の吉田町スポーツ推進委員会会議は平日夜間に実施されており、移動時間の短縮や参加者の利便性の向上、感染症予防対策のためにオンラインによる会議の提案し実施した。このことによって、遠隔地の若者などからもスポーツ推進会議への意見をリアルタイムに取り入れることが期待される。

写真3　オンラインによる吉田町スポーツ推進委員会会議

(4)今後の改善点や対策

今年度は吉田町総合体育館が使用できず、スポーツ大会の会場が小規模な吉田町体育センターへ変更され、大会の参加者も少なく制限することとなった。今後は吉田町の有する様々なスポーツ資源を活用し、学生を含めた若者による様々なスポーツイベントを実施することにより、吉田町民のスポーツ実施率向上が期待される。このために、先ずは小規模なスポーツイベントを安全性や効果を検証しながら実施し、スポーツイベントの持続可能性についても検討していく必要がある。

５地域への提言

今年度は新型コロナウィルス感染症予防対策のため、大きな会場を使用できず密集を避けるため、スポーツの紹介と競技大会を同時開催する大規模スポーツイベントを実施することができなかった。この状況が改善されれば多くの吉田町民だけでなく近隣の市町からの参加者も含めた様々なイベントを実施することが期待される。

６地域からの評価

定例や臨時のスポーツ推進委員会会議やスポーツ大会に学生と共に参加し、参加者や大会関係者から吉田町におけるスポーツ実施状況などについて様々な情報を得ることができた。常葉大学学生からの意見も伝えることができ、次年度の向けてのウォーミングアップに使用するＤＶＤ制作の計画も提案され、吉田町と常葉大学の良好な関係を築くことができたと思われる。今後は、さらに大きな活動規模として本事業を継続・発展していく予定である。

（成果報告書　記載方法）

地域のことばの保存と継承を目指して

静岡英和学院大学 人間社会学部 日本語学ゼミ（研究室）
教　　員：講師 大槻知世
参加学生：（※学生が参加予定の活動は中止）

1　要約

本稿は、令和3年度「しずおか中部連携事業中枢都市圏地域課題解決事業」に応募し採用された研究課題において、静岡英和学院大学日本語学ゼミのメンバーによって行われた調査活動について報告するものである。

本研究課題は、2021年7月に採択され、2022年2月まで活動を行った。研究計画は、主に二つの内容から成る。一つは、静岡市中山間地域である葵区井川で、ゼミのメンバーが調査員となり方言調査を行い、地域のシニアの方々から方言を教えていただくというものである。

もう一つは、静岡市葵区中心部で民話の語りや方言劇などの活動を行っている、かたかご会の活動に参加させていただき、ゼミでも講演を行なっていただくというものである。

井川での調査は2022年2月に対面で行なうことを予定していたが、新型コロナ・オミクロン株の感染拡大という当時の状況に鑑み、計画を中止した。

かたかご会の活動には、教員が定例会や秋の夕べに参加させていただき、方言研究者の方や語り部の方々との連携体制の基礎を構築・強化することができたが、ゼミでの講演は、対面を計画していたため、実施を見送ることとした。

2　研究の目的

方言調査や方言による朗読劇などの活動を通して、シニアが知識と経験を他の世代に伝えることで自己有用感をより強く得ることが期待される。さらに、方言はその話者の精神的な支柱であり、地域社会との紐帯を意識させるものであることから、方言で同世代と語ることで、受容される感覚や、地域の人々や社会とのつながりを改めて見出すことになり、地域の活動に参加するきっかけになることが見込める。

3　研究の内容

井川調査

計画では、調査は2022年2月に井川生涯教育交流センター（葵区役所井川支所庁舎に併設）にて、学生9名と教員1名が参加し、地元の4名の方にご協力いただき、方言調査を行なう予定だった。しかし、当時の状況から、参加者全員の健康を守る目的で、調査を取りやめることとした。

そこで、前年度（令和2年度）に同じ話者の方に教えていただき実施した方言調査のデータを精査し、方言研究を進めるという内容に変更した。データ量はまだ小さく、井川の方言の全体的なすがたを捉えるのに十分なデータサイズではないが、井川方言固有と思われる特徴を窺い知ることができた。

かたかご会の活動

かたかご会の定例会に教員が参加させていただき、主に静岡市葵区の方言による朗読や語りをお聞かせいただいた。2022年11月には北部図書館で開催された「十五夜さんの夕べ」にも観客として出席した。

方言を用いる当地の慣習や風土を朗読劇から知ることができた。演目の一つである、地元の方言研究者の方の講演では、古語との関係が示唆され、新たな視点を得ることができた。

4　研究の成果

(1) 当初の計画

当初は、次のような計画をしていた：

井川調査

A　日本語学ゼミ所属の学生9名の参加見込

B　午前・午後に調査を1回ずつ行う調査日を2日設け、のべ4回調査を行なう

C　調査協力者は4名

かたかご会の活動

D　定例会に教員が参加し、方言や朗読劇への理解を深める

E　かたかご会の方々にゼミで講演していただく

F　学生も協働して朗読など方言による活動を体験する

(2) 実際の内容

実際には、今年度の井川調査は実施できなかったため、Bは達成できなかった。

しかし、2022年1月時点では学生の調査参加者はのべ11名、井川の調査協力者（話者）は4名であり、AとCを達成することができた。学生が井川に関心をもつ土台を作ることができたと考える。静岡市高齢者福祉課、井川支所といった静岡市の方々のご協力のおかげで、地元のシニアの方々から継続的な協力を得られており、本研究課題において、方言を通じた世代間の交流を進める用意ができている。

かたかご会の活動については、Dは、夏と秋の定例会に出席し、達成することができた。方言による表現の可能性について観取した。

Eについては、ゼミでの対面形式を考えていたものの、コロナ禍における大学の活動方針も考慮して、実施を見送った。したがって、Fも達成することができなかった。

(3) 成果と課題

変更前に計画していた、井川方言調査、ならびに、かたかご会と学生との交流は実施することができなかった。しかし、井川地域については、前年度に井川方言調査にご協力くださった方々の、本研究事業への継続的な協力のご意思を伺うことができた。前年度の調査結果を精査したところ、概ね共通語化の傾向が見られたが、そのような中でも、一部の話者の調査データに、二重母音の短母音化や、独自の方言語彙といった特徴が垣間見られた。言語学的に「言語の島」と呼ばれる井川地域に固有の方言的特徴を見出すことができた。

かたかご会との協働については、会員の方々に加えて、静岡方言の研究や語り部活動をなさっている、地域のシニアの方々との協力体制を広げることができた。

計画変更を余儀なくされたが、総じて、継続的な課題解決サイクルの確立につながる基礎を築くことができたと考える。

(4) 今後の改善点や対策

いつでも調査を実施できるよう、日頃から連携をとり、教員の計画と実行状況を伝え、機動力を高めていく。

学生が自発的に参与できるようなイベントをゼミで考え、地域のシニアの方々と、互いに楽しんで活動するような環境を作りたい。そのためには、既存のイベントを参考にしつつ、本ゼミの特色や、学生

の興味・関心も取り入れた催しを企画・実行したい。

5　地域への提言

地域の活動にシニアの方々が参加するためには、参加意欲を刺激するモチベーションが重要である。

シニア世代で心身の健康を保ち、認知機能の低下の度合いが小さい人には、三つの要因が認められるという。すなわち、教育、自己効力感、運動である。このうち、自己効力感とは、必要な行動をとり課題を達成することができるという信念、自信と言い換えられる。

日本語学ゼミの活動では、伝統的な方言という、シニアの話者がもつ知識を教えていただくことで、ご協力くださったシニアの方々が、自己効力感をより強く意識することができると考える。

6　地域からの評価

今回は井川に赴いてお話を伺うことはできなかったが、昨年度に引き続いて話者の方々が調査をご快諾くださったことは、本研究が地域から評価されているものと解釈できるだろう。

また、かたかご会の方々にも、好意的に受け容れていただき、学生との交流も積極的に検討していただいている。静岡方言の研究者の方、語り部の方とも引き合わせていただき、本研究の活動の輪を広げていただいた。今後はかたかご会の活動に本ゼミも貢献できればと考えている。

牧之原市「魅力ある公園づくり」に関する研究
－日本古典文学と桜の花－

静岡英和学院大学　人間社会学部　人間社会学科
畑ゼミ（研究室）
教　　員：教授　畑　恵里子
参加学生：沢田　明日香、柴　治親、野田　真衣、
藤巻　祐太、三輪　碧、水上　遥花、
加藤　義大、奥村　悠里、栗島　理奈子、
津島　大晟、山本　ひかり

１　要約

静岡県牧之原市には30箇所程度の公園が設置されている。遊戯を備えている規模の大きな公園もあるが、地域に根ざした小規模の公園も、比較的多く点在している。一方、牧之原市が過年度に実施した市民アンケート等では、「公園そのものがない」「子供が遊べるものがない」等の回答が、大半を占めている。つまり、認知度向上活動と利用者の要望の収集とが、おもな課題となる。今年度は、牧之原市内で地元住民等に植樹されてきた歴史を持つ桜並木を中心に取り上げて、チラシ・ポスター・ポケットティッシュを制作して、広報活動を行った。

２　研究の目的

本事業は、静岡県牧之原市内の公園や、その周辺にまつわる植物・自然・風景に焦点を当てた上で、効果的な公園周知活動を検討し、広報活動を行うことを目的としている。牧之原市と協議した結果、牧之原市内（旧　静岡県榛原郡榛原町）の勝間田川沿い等の桜並木を今年度は取り上げて、当地の認知度を高めるようにする。

３　研究の内容

本課題の基軸は、静岡県牧之原市内に位置する公園の周知活動である。よって、牧之原市民を対象としたチラシ・ポスター・ポケットティッシュの作成や配布が、主な内容となる。

その際、過年度の継続事業である点を鑑みて、令和元（2019）年度の勝間田公園のツツジや秋葉公園のアジサイ、令和２（2020）年度の東光寺の長藤に続く、「花めぐり」をひとつの基軸に据えて、活動することにした。この「花めぐり」をテーマとする広報活動は、牧之原市公式HP等にも掲載されている（牧之原市公式HP　https://www.city.makinohara.shizuoka.jp/）。令和３（2021）年度は、牧之原市榛原地区にある勝間田川や坂口谷川の桜並木、および、その近辺の公園を対象として、植物と人々との文学的連携を新たな角度から伝える。そして、日本古典文学のゼミであることを生かして、自然と人間との繋がりや、五七調のキャッチコピーを考案して掲載、市民へ呼びかけることとする。

４　研究の成果

（１）当初の計画は、以下の通りである。

１　日本古典文学の桜花の意味性を分析する。
２　学生と協働して１を生かした公園散策マップを制作する。
３　イメージキャラクターを新規開発する。同市出身の少女漫画家である花森ぴんく氏へのデザイン依頼は調整済である。

４　過年度に花森氏がデザインした同市イメージキャラクターや同市公式キャラクターを用いて親しみやすいマップ等を制作する。
５　４の配布を行う（新聞折込、公民館等）。
６　公園利用に関する市民アンケートを実施する。

図１　ポスター・チラシ（同デザイン）

図２　ポケットティッシュ挿入チラシ（同デザイン）

（２）実際の内容は、以下の通りである。

・実施内容：「Ｂ（一部修正）」に相当する。

・その理由：上記１～５は遂行したが、上記６は、新型コロナウイルス感染症の流行がおさまらず、予定通りに遂行できなかったため。

（３）実績・成果と課題は以下のとおりである。

１　日本古典文学の桜花について、日本神話のコノハナサクヤヒメ、『古今和歌集』の小野小町の和歌、『源氏物語』の「若紫」巻や「野分」巻、歌舞伎等を通じて、桜花の意味性を分析した。

２　学生と協働して、１を生かしたポスター・チラシ、ポケットティッシュの各デザインを作成した。キャッチコピーは、ゼミ学生がそれぞれ作成して検討、選出した。（**図１、図２**）。

　ポスター・チラシのキャッチコピー「見に行こう、淡紅の春が　散る前に」を選出した理由は、以下のとおりである。

・五七調の俳句形式。

・桜を連想させる『淡紅の春』。

・倒置法で『見に行こう』を強調。

　ポケットティッシュ挿入チラシのキャッチコピー「＃　はらはら桜、まきあがる」を選出した理由は、以下のとおりである。

・ハッシュタグ（＃）はSNS拡散を表現。

・「まきあがる」という言葉。

・言葉が語感を意識している。

３　イメージキャラクターを新規開発した。今回も、同市出身の少女漫画家である花森ぴんく氏へキャラクターデザインを依頼、無償による全面協力を得た。キャラクター名は、ゼミ学生が作成して検討、選出した。選出した理由は、以下のとおりである（**図３**）。

・牧之原市の「まきのはら」の「はら」と「はらはら」散る桜の「はら」とを掛けた。

図３　イメージキャラクター「は～らちゃん」

・「は～らちゃん」の名前の波線からは、サーフィン文化が盛んな牧之原市がイメージされる。
４　過年度に花森氏がデザインした同市イメージキャラクターや同市公式キャラクターの「チャーフィン」を再度配置して、継続事業であることを示唆すると共に、親しみやすいマップを工夫した。
５　チラシやポスター、ポケットティッシュの配布を行った。今回、牧之原市の全新聞購読世帯へ新聞折込を合計２回に増加して、桜の開花直前の時期に、効果的にチラシを配布した（令和４（2022）年２月および３月）。同時に、牧之原市役所を経由して、市内の公民館等にも配置した。牧之原市長面談を実施して、本事業の活動内容をゼミ学生と報告した（令和４（2022）年２月）。ゼミ学生へのインタビューによる本事業の記事が、静岡新聞に掲載される予定である（令和４（2022）年３月予定）。

課題としては、新型コロナウイルス感染症のため、今年度もフィールドワークや市民アンケートの実施が困難であった点である。

（４）今後の改善点や対策としては、以下のとおりである。

市民アンケートを実施する場合、どのような方法が有効的か、検討する。あるいは、学生間で、どのようにすれば講演集値が効果的か、別の角度から意見を募り、議論を重ねる。

５　地域への提言

今回の桜花の場合、開花時期（２月下旬～４月上旬）を迎える前に、ポスターやチラシ等を集中的に配布したり、近隣にポスターを掲示したりすることによって、効果的な集客を見込むことを提言した。また、継続的な広報活動やインスタグラムなどによる定期的な情報発信の必要を指摘した。

６　地域からの評価

牧之原市民から直接反応を得る機会は、残念ながらほとんどなかった。ただし、新聞折込チラシを見た市民から、関心を抱いた旨、口頭などによる感想を得た。

７　学生による参考文献

・タイトル画像のリンク、牧之原市ホームページより
https://www.city.makinohara.shizuoka.jp/uploaded/image/33457.JPG
・制作物の画像(一昨年) http://www.shizuoka-eiwa.ac.jp/media/pockettissue10.jpg
34088.pdf (city.makinohara.shizuoka.jp)
・制作物の画像(昨年) http://www.shizuoka-eiwa.ac.jp/media/20210212153315495_0001.jpg
34089.pdf (city.makinohara.shizuoka.jp)
・制作物の画像(今年) http://www.shizuoka-eiwa.ac.jp/media/20220215112444549_0001.jpg
http://www.shizuoka-eiwa.ac.jp/media/20220215113327654_0001.jpg
・モチーフキャラクターの作者について、キャラクターの画像
http://www.shizuoka-eiwa.ac.jp/media/20220215113327654_0001.jpg
・百人一首　参考文献
小沢正夫　『日本文学全集　古今和歌集』　小学館　昭和４６年４月１０日初版発行
・コノハナサクヤヒメの画像
作品紹介「コノハナサクヤヒメ」 | 草場一壽公式サイト (kusaba-kazuhisa.com)

※　陶彩画「コノハナサクヤヒメ」制作　草場一壽工房の許諾済。

・コノハナサクヤヒメの定義
https://kotobank.jp/word/%E6%9C%A8%E8%8A%B1%E9%96%8B%E8%80%B6%E5%A7%AB-503609/post-goods/570/
・阿部秋生　秋山虔　今井源衛　鈴木日出男　『新編日本古典文学全集源氏物語③』(小学館、1996年)
・山桜のイメージ画像のリンク
https://www.uekipedia.jp/%E8%90%BD%E8%91%89%E5%BA%83%E8%91%89%E6%A8%B9%E2%91%A1/%E3%83%A4%E3%83%9E%E3%82%B6%E3%82%AF%E3%83%A9/
・樺桜のイメージ画像のリンク
https://hellokcb.or.jp/kotennohi/article/archives/emaki-group/%E7%AC%AC%E5%85%AB%E5%B7%BB

以上

「藤枝セレクション」を起点とした藤枝市のシティ・プロモーションへの取り組み

令和 3 年度 成果報告書

静岡産業大学 情報学部
専任講師 植松 頌太

1. 要約

本稿は，令和 3 年度しずおか中部連携中枢都市圏地域課題解決事業助成金により，藤枝市産業振興部 産業政策課（以下，藤枝市産業政策課）と，株式会社日本デザインセンター，ならびに筆者が所属する静岡産業大学の協働により開発を進めた，静岡県藤枝市の特産品ブランド「藤枝セレクション」のロゴマーク整備を中心とした藤枝市のシティ・プロモーション施策へ係る成果報告書である。

藤枝市は，静岡県のほぼ中央に位置する人口 14 万人ほどの地方自治体であるが，東部には静岡市に加えて熱海・伊豆地域，西部には浜松・掛川地域が位置し，かねてより人流の通過点となっていることが課題となっていた。藤枝市と筆者は，令和元年度より藤枝市のビジュアル・アイデンティティ（＝シティ・アイデンティティ）の整備へ取り組み，本年に至るまで市章や市名を示すロゴタイプの改良を続けている。ここまでの前提を踏まえて，藤枝市をより効果的に全国へ向けてプロモーションするために，藤枝市が主宰する特産品ブランド「藤枝セレクション」のリブランディングへ取り組むことを趣旨として本研究へ取り組んだ。本稿では，主にロゴマーク選定までのプロセスと今後のブランドの展望について述べる。なお，本研究ならびに藤枝市との一連の協働事業については著者（植松）の所属する学会論文誌へ投稿予定であることを付け加えておく。

2. 研究目的

本研究と対象とした特産品ブランド「藤枝セレクション」も含み，ブランディングの要件として，対象とするブランドの固有の価値を構築し顧客に識別されることが求められる。すなわち，単に認知度を高めることはブランディングとは言えず，藤枝セレクションであれば，他の地域の特産品ブランドとの差違やオリジナリティを明示する必要がある。「藤枝セレクション」においては，ブランドの趣旨やセレクション選定商品の選考基準，選定商品を示す意匠などにおいてオリジナリティがなく，他のブランドとの差別化がなされていない状態であった。このため，本研究では特色ある特産品ブランドの構築を目指し，ブランドを再定義することを目的と定めた。

3. 研究内容および研究成果

3-1.「藤枝セレクション」の経緯と現状

研究課題である「藤枝セレクション」の取り組みは，藤枝市を代表する特産品が認定される地域特産品ブランドであり，2014 年にスタートして以来，毎年 11 商品が認定され，2019 年までに 55 商品が選ばれている。しかしながら，ブランドそのものの知名度が低く，認定事業者においてもメリットが少ないことなどから，応募商品数の減少が続き，2019 年度には応募商品数が 24 商品へ留まるなど，事実上の瓦解状態にあった（参考：藤枝市産業政策課提供資料）。

前記までの現状を踏まえ，2021 年度に藤枝市産業政策課らによって，認定商品を 3 商品へ絞ること，認定商品に販路拡大へ向けたベネフィットを提供すること，これらを取りまとめるブランドを象徴するロゴマークを全国公募することが思案された。

3-2.「藤枝セレクション」のブランド再定義への取り組み

本研究は，筆者が上記までの藤枝市産業政策課の取り組みのうち，「藤枝セレクション」の新たなロゴマークの公募を告知するフライヤーを手にし，藤枝市産業政策課へ直接アポイントを取ったことが始点となっている。藤枝市産業政策課との協議の上，主にはロゴマークの全国公募に際し，デザイン領域の専門家をアサインすること，選考プロセスにおけるフライヤーやウェブページなど各媒体の制作を請け負うこと，ロゴマーク選考へむけたウェブサービス環境を整備すること，選考会場における空間デザイン等のクリエイティブ実務を担当する等，実践的なアプローチを実行することを趣旨と定めた。以下に実際に展開された各媒体の一例を示す（図 1 - 5）。

(図 1, 2)「藤枝セレクション」ロゴマーク公募フライヤー図案

(図 3, 4, 5)「藤枝セレクション」ロゴマーク審査会風景（写真撮影：後藤健人）

上図で示した各媒体（フライヤー，ポスター，フラッグ，スタッフポロシャツ）は，筆者が 2019 年度より藤枝市企画創生部企画政策課と協同で開発を進めている『藤枝市シティ･アイデンティティ』（以下，CI）へ準じて制作され，CI で定められた指定色である「藤枝パープル」（図 6）を基本色として用いたほか，市名を示すロゴタイプで使用した書体を継承するなどして，藤枝市が目指すビジュアル･アイデンティティへ準じることに重きを置いて制作を進めた。

(図 6) 藤枝 CI 指定色例

3-3.「藤枝セレクション」のロゴマーク全国公募プロセス

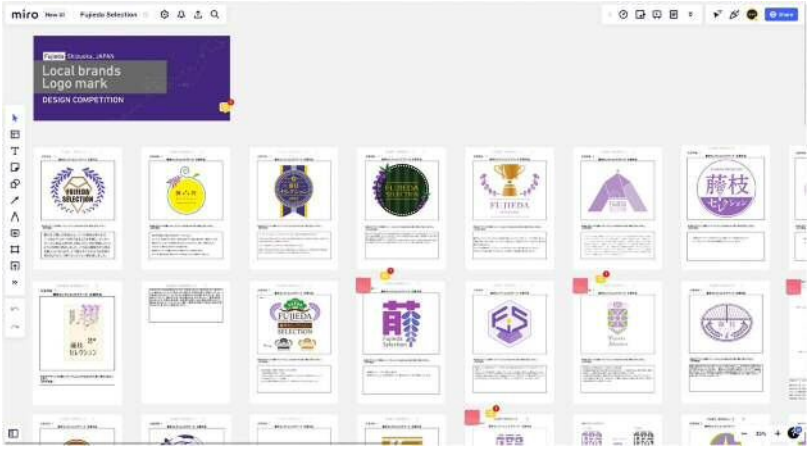
リブランディングの柱のひとつとして，当初計画より「藤枝セレクション」を示すロゴマークを全国公募することが決まっていたが，選考プロセスにおいて専門家の意見が反映されるスキームではなかったことから，筆者からグラフィックデザインの専門家を招聘することを藤枝市産業政策課へ提案･協議の上，株式会社日本デザインセンターへ声かけを行い，同社グラフィックデザイナーの小磯裕司氏に特別審査員を務めていただいた。加えて株式会社日本デザインセンターにてプロデュ

ーサーを務める杉本瑞樹氏，同社にてアートディレクター / Web デザイナーを務める後藤健人氏からも，オブザーバーとして審査へ参加いただけることとなり，加えて筆者自身も同じくオブザーバーとして審査へ参加することを藤枝市産業政策課より許諾いただいた。これにより藤枝市，株式会社日本デザインセンター，静岡産業大学の 3 者の協働が実現した。

上記のスキームの確定と同時に，前記したロゴマーク公募フライヤーの制作や，同一のテイストを踏まえたウェブ媒体（SNS アカウントを含む）での広報等，藤枝市が持つプロモーションチャネルにてロゴマークの公募を再告知したところ，最終的に全国から 539 件（藤枝市産業政策課発表）の応募があった。地方自治体が実施する近似したコンペティションにおいて，応募総数が 100 件程度を超えれば御の字であると言われるところ，500 件以上の応募があったこと，さらに上記のスキームへ準じた筆者によるビジュアライズは公募期間（2021 年 4 月 30 日から 8 月 31 日まで）のうちの後半（2021 年 7 月下旬以降）から展開されたものであり，公募フライヤー等のリデザインを行なったのちに応募数が増加したことから，ビジュアライズの重要性とクリエイティブへ従事することへの責任を改めて感じる機会ともなった。

3-4. 全国公募されたロゴマークの事前審査

ロゴマークの審査会が迫る中，想定を上回る応募作品をどのように審査するかが課題となった。当時，COVID-19 に係る緊急事態宣言が発出されていたこともあり，とりわけ東京都内を拠点とする株式会社日本デザインセンターとのやりとりはインターネットを介することが現実的であったことから，筆者の提案によりオンラインホワイトボードサービスである miro（ www.miro.com ）上へ，藤枝市産業政策課より提供いただいた応募作品データを適切な形式へコンバートしたのち，ボード上へ並べ，審査権並びに専門家としての発言権限を持つ者が付箋を貼付する仕組みを構築し（図 7），オンライン上での事前審査を実施した。これによりロゴマーク審査会当日には規定時間内に審査を終えることができるように努めた。



（図 7）オンラインホワイトボード上での事前審査の様子

3-5.審査会と選出作品

前項までの事前審査を踏まえて迎えた審査会当日においては，各分野の専門家による議論が尽くされ，満場一致でロゴマーク原案が選出された。とりわけデザイン的知見を十分に尊重いただいた審査員の方々には感謝を申し上げたい。原案者が偶然学生であったことから，筆者がブラッシュアップ作業をサポートすることとなり，本稿執筆時においてもオンラインでの交流を主として，サポートを続けている。完成した意匠は次項を参照されたい。

4. 実績・成果と課題

原案者との意見交換ならびに共同作業を重ね，右図（図8）のようなロゴマークとタイポグラフィの基本組み合わせと，いくつかの展開例を策定し，ブランド展開へ係る最低限の各種ツール（認定商品へ貼付するステッカー，認定証書，認定トロフィー等）を研究期間内に制作することができたほか，藤枝市観光協会の厚意により「藤枝セレクション」のロゴマークをあしらったオリジナルのショッピングバッグ（紙袋）を制作することができた。

(図 8) 藤枝セレクション アイデンティティ例

このように，関係各所の力添えのもと，単年度の取り組みとしては，ある程度の目に見える成果を納めることができた反面で，「藤枝市における特色ある特産品ブランドの構築」と言う本研究の原点へ立ち返ると，部分的な進捗しか達成できなかった現状を認めざるをえないと言えよう。現時点ではロゴマークをはじめとした意匠を「制定」したにすぎず，前記したような認定商品に対する販路拡大へ向けたベネフィットを提供する以前に，ブランドが目指すべきビジョンの設定と共有はおろか，ブランドとユーザーとのタッチポイント等も不明瞭なままであり，ブランドを構成･運用するための要素の大半が，ロゴデザイン変更前の「藤枝セレクション」のスキームを踏襲している。現状の状態で今後ブランドを運用しても「ロゴマークが変わっただけ」となり，本年度の取り組みが意味を成さない結果を招くことが懸念される。ブランドを如何にインプルーブさせるかが，本研究の本質的な課題であることを，筆者をはじめ藤枝市政関係者は改めて認知し，中長期的に課題解決へ努めることが必須であると考える。

謝辞

本研究にあたっては，とりわけ株式会社日本デザインセンターの皆様より，学術的にも商業的にもイレギュラーである要件のなか，専門的知見からロゴマークの審査を賜っただけでなく，研究協力者としての枠組みを超えて，広く協力を賜りましたこと，御礼申し上げます。

島田市の地域観光資源を連携・周遊させる手法の提案

静岡文化芸術大学　文化政策学部
文明観光学コース　石本ゼミ
教　員：非常勤講師　石本東生（國學院大學研究開発推進機構教授）
参加学生：前田絢佳、横山理那、喜瀬川優稀、小澤美樹、屋良泉岐、白川沙季、村上茉優、山口紗和

1. 要約

本研究では、昨年 4 月以降、島田市役所の方々によるご講演、また現地フィールドワーク（以下、FW）により、静岡県島田市が有する歴史文化や観光計画について理解を深めた。また、令和 4 年 3 月 26 日「大井川川越遺跡」（以下、川越遺跡）で開催されたイベント「和菓子バル」にて、先述のご講演や FW での情報をもとに島田市や「和菓子バル」の現状分析を行い、イベントの高付加価値化・観光交流人口の増加を目的とする企画立案・イベント運営を行った。さらに、研究や「和菓子バル」での企画立案・イベント運営を通して得た結果をもとに、イベントの高付加価値化・観光交流人口の増加に効果的な施策について展望した。

２．研究の目的

静岡県島田市には、「お茶」をはじめとし、「川越遺跡」「諏訪原城」「蓬莱橋」「大井川鐵道」など貴重な歴史文化が数多く存在する。なかでも、川越遺跡にて過去 2 回開催されている「和菓子バル」は新たな交流人口を生み出すイベントとして期待度が高い。しかし、現状としてこれらの観光資源が広く認知されるには至っておらず、魅力的な観光ルートとして繋ぎ合わされた状況ではない。

本研究の目的は、島田市内に点在する観光資源の歴史的・地理的な背景や意味を探り、それらのストーリー性を繋ぎ合わせ、観光ルートのモデルコースを作成・提案すること、そして、「和菓子バル」についても同様の分析を行い、観光集客策の提案をすることである。

しかし、【①新型コロナウイルスの影響により、距離のある観光スポットを繋ぎ周遊性を高めることが難しい】【②その中でも、「和菓子バル」を最大限活用できる方法を検討する】という 2 つの理由から、研究対象領域を川越遺跡とその周辺の和菓子店に絞った。また、「和菓子バル」にて川越遺跡の歴史的・地理的な背景を活用した企画を作成・実施することで、イベントの付加価値を高めること、そして観光交流人口を増やすことを新たな目的とした。

３．研究の内容

本研究は大きく分けて３つある。各項目について以下で詳細を述べていく。

① 島田市役所の方々によるご講演および FW により、島田市の観光資源・観光計画について理解を深める

本研究では、全体を通して島田市役所の方々によるご講演を 2 回、FW を 3 回行い島田市、川越遺跡、「和菓子バル」に関する情報収集やイベント準備を行った。島田市役所の方々によるご講演では、島田市が有するお茶を活用した緑茶化計画や大井川で川越文化が構築された経緯など「島

田市の歴史・文化」について理解を深めた。また、「和菓子バル」について、JR 東海のウォーキングイベント「さわやかウォーキング[1]」や島田市の和菓子店と連携を取ったこと、和菓子が早い時間に売り切れてしまったことなど「過去 2 回の実績や課題」について学んだ。

ここで、川越遺跡について簡単に説明する。1601 年、徳川家康は東海道の整備を行ったが、橋を架けることも渡船も禁止された大井川は流れが急なために旅人が渡ることは難しく、この手助けを職業とする人々が現れた。これが後の川越人足である。1696 年には「川越制度」という制度ができ、川会所を拠点に川越業務を行うようになった。旅人は川会所にて川札と呼ばれる券を購入し、その枚数に応じて川越人足は肩や台に乗せて川を越した。また、大井川では水位が上がるために川越しを中止する「川留め」が頻繁に行われ、島田宿に滞在することになった旅人たちよって詠まれた俳句や、川留めにまつわる物語が多く残され「川留め文化」と呼ばれている。現在、川越遺跡は国指定の史跡であり、島田市は遺跡の保存だけでなく、活用にも力を入れている。FW では、実際に川越遺跡や大井川に足を運び、川会所にて川札を売っていた場所や旅人を運んでいた台を見てまわった。さらに、「和菓子バル」に向け街道の活用方法を検討し、きものさんぽの会[2]や島田市の和菓子店を訪れ、学生企画のイベントのための聞き取りやご協力の依頼を行った。

図 1）川を越す際に使われていた台

② ご講演や FW での情報をもとに分析を行い、和菓子バルの企画立案を行う

ご講演や FW 終了後、収集して得た情報を分析し、イベントの付加価値を高め、観光交流人口を増やすために本研究チームができる企画について検討した。分析をするにあたり、観光マーケティングの観点から SWOT 分析を行った。以下はその一部をまとめたものである。

表 1）和菓子バル・川越遺跡の SWOT 分析

Strength（強み）	Weakness（弱み）
・国指定史跡の活用を積極的に行っている ・特有の文化・遺跡をもつ ・さわやかウォーキングのコースに含まれる	・他の観光資源と連携・周遊させる仕組みが構築できていない ・リピーターの確保に繋がりにくい
Opportunity（機会）	**Threat（脅威）**
・静岡文化芸術大学生の参画 ・マイクロツーリズムの流行 ・オンライン技術や SNS の発達	・新型コロナウイルスの影響（開催できるか不明／イベントに制限が出る可能性あり）

上記の分析結果、またご講演や FW による情報をもとに【川札企画】【クイズラリー】【Instagram ＃投稿】【フォトスポット案内】【アンケート調査】【ポスター作成】の 5 つの企画を「和菓子バル」

にて実施することとした。ここからは各企画について、企画の目的・詳細について述べていく。

まず、「川越遺跡特有の文化・歴史を持つ」という強み、そして「周遊させる仕組みが構築できていない」という弱みから【川札企画】を行うことにした。本企画では、和菓子の購入やその他企画の参加により、本研究チームが作成した川札（抽選券）を獲得することができる。そして、特定の枚数を集めると和菓子店のクーポンやその他景品に交換できる抽選に参加できる。川札文化について認知を広めること、また、抽選の景品を和菓子ではなく、和菓子店のクーポン券にすることで、直接和菓子店に足を運んでもらう、つまり周遊性を高めることが目的である。

次に、川札企画と同様の強み、弱み、またファミリー層の割合が比較的高いという情報から【クイズラリー】を行うことにした。本企画では、本研究チームが作成した川越遺跡にまつわるクイズに回答すると川札やお菓子を獲得できる。「和菓子バル」当日、川越遺跡内での周遊性を高めること、そして川越遺跡の文化や歴史について気軽に楽しんでもらうことが目的である。

図 2）ポスターデザイン

続いて、「静岡文化芸術大学生の参画」「オンライン技術やSNS の発達」という機会、また「リピーターの確保に繋がりにくい」という弱みから【Instagram＃投稿】【アンケート調査】【フォトスポット案内】を行うことにした。各企画では、「#和菓子バル 2022」というワードを付けて Instagram に「和菓子バル」の写真を投稿する、また Google フォームによるオンラインのアンケートに参加することで川札を獲得することができる。また、きものさんぽの会にて着物を着た人に向け、Instagram に投稿したくなるフォトスポットを案内する。さらに、Instagram＃投稿を促進させるため、Instagram アカウントを立ち上げ広報活動を行った。Instagram の投稿やアンケート結果を次年度の集客告知や集客案作成に繋げることが目的である。最後に、ポスター作成について。「静岡文化芸術大学生の参画」という機会から【ポスター作成】を行うことにした。デザイン学部の学生にポスター作成を依頼し、和菓子バルの魅力がより伝わるポスターを作成、またそれを島田市のホームページや駅前、本研究チームの Instagram にて PR を行った。

③ 和菓子バルでの企画立案・イベント運営を通して得た結果を分析し、島田市において、イベントの高付加価値化・観光交流人口の増加に効果的な施策を考える

「和菓子バル」終了後、イベント、そして各企画の結果は以下の通りとなった。

イベント当日の来場者数は約 1000 人となった。昨年より約 500 人来場者が減少している。原因としては、当日の天候が優れず、さわやかウォーキング経由の来客が大きく減少したことがあげられる。また、各企画では、川札企画に 213 人、クイズラリーに 162 人、Instagram＃投稿に 6 人、アンケート調査に 12 人、フォトスポット案内に 0 人が参加した。また、本研究チームが運営している Instagram アカウントはフォロワーが 300 人を超え 316 人となった。

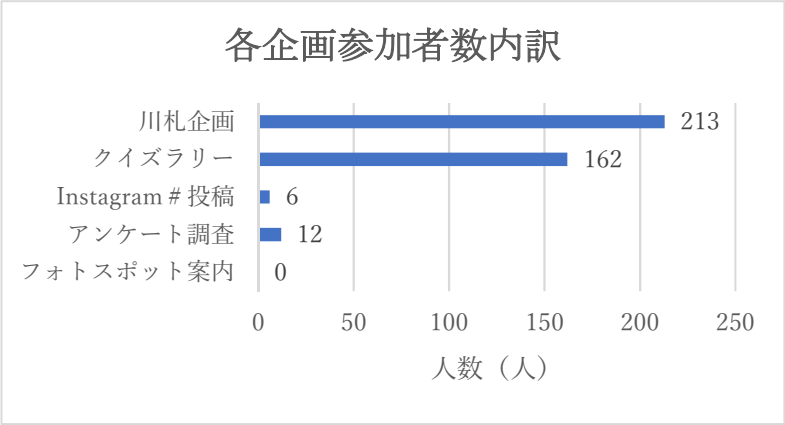


図 3）和菓子バル各企画への参加者内訳グラフ

これらの結果より、川札企画、クイズラリーは企画の中でも多くの参加者を集めることができたことが分かる。川札企画は、和菓子の購入と抽選を結びつけたことにより、参加者が気軽に参加できたことが結果に繋がったと考える。抽選にてクーポン券が当たった参加者が対象の和菓子店を訪れ、本来の目的であった周遊性を高めることに繋がったかどうかは現在調査中である。またクイズラリーは、誰でも楽しみながら気軽に参加できたことにより、ターゲットとしていたファミリー層だけでなく、小さな子どもから高齢の方まで多くの年代の方が参加したことが結果に繋がったと考える。

一方で、Instagram＃投稿やアンケート調査、フォトスポット案内は、若者の来場者が少ない、かつ Instagram やオンラインアンケートになじみがない人が多く、参加者数獲得に繋がらなかった。

以上より、抽選やクイズといった気軽に、かつ誰でも楽しみながら参加できる企画は和菓子バルにおいて高付加価値を与えるものになり得るということが分かった。また、和菓子バルにおいて、Instagram やオンラインになじみのある若者層の来場者数がまだまだ少ないことから、若者の来場者数を増やすことが、「和菓子バル」の観光交流人口増加に繋がると考える。

４．研究の成果

本研究では、島田市内の現地調査により、川越遺跡は特有の文化・歴史をもっているという現状の中で周遊させる仕組みが構築できていないといった課題があることが分かった。それらの課題解決に向け、【川札企画】【クイズラリー】【Instagram＃投稿】【アンケート調査】【フォトスポット案内】【ポスター作成】という企画を立案・実施した。そして、当日のイベントでは川札企画、クイズラリーにおいてそれぞれ 150 人を超える参加者を獲得することができた。加えて、各結果の分析より、島田市において、イベントの高付加価値化・観光交流人口の増加に効果的な施策は「気軽に、かつ誰でも楽しみながら参加できる企画」「若者の来場者数を増やす企画」であるという考えを導くことができた。

５．地域への提言

本研究により、島田市において、イベントの付加価値を高める、そして観光交流人口を増やすためには「気軽に、かつ誰でも楽しみながら参加できる企画」「若者の来場者数を増やす企画」が効果的ではないかと本研究チームは考えた。事実、川札企画やクイズラリーにて、子どもから高齢の方まで幅広い層の参加者を獲得できたという結果に繋がったことから、特有の文化・歴史を気軽に楽しみながら触れることができるという点が「和菓子バル」の高付加価値化に繋がるのではないかと考える。また、若者の来場者数が少ないからこそ、若者をターゲットとする企画を設

けることで、来場者の年齢幅を広げ、観光交流人口の増加に繋げることができるのではないかと考える。しかし、本研究での企画は一度しか実施していないため、本当に効果が期待できるかは検証不足である。また、周遊性を高めることに関しては現在も調査中である。よって、引き続き効果検証を続けていくことで、島田市の観光交流人口を増やす方法・「和菓子バル」の付加価値を高める方法を模索していきたい。

６．地域からの評価

（島田市市役所 文化資源活用課 文化政策担当　櫻井雄太様より）

コロナ禍の中で、様々な制約がかかる中、歴史文化資源を観光に活用しきれていないという課題に対して、何ができるかを考え、行動して、一生懸命取り組んでいただいたことに、大変感謝し、評価しています。

歴史文化資源を観光に活用するという大きな課題において、当方と協議し、まずは１つのスポットを重点的に調査・研究することとし、国指定史跡「大井川川越遺跡」について調査・研究していただきました。具体的な調査・研究方法として、現地調査だけでなく、毎年川越し街道で開催している、本市の歴史文化資源である“和菓子”と“川越遺跡”を掛け合わせたイベント「和菓子バル」に参加し、来客者に対して川越遺跡について知ってもらい、「また来たい」と思ってもらえるような企画を検討していただきました。学生自ら川越遺跡や市内和菓子店に、複数回足を運んで調査し、SNS を活用して川越遺跡の魅力を大学生の視点で発信し、幅広く周知に努めたことについて高く評価しています。この調査研究において、「和菓子バルでは、もっと川越遺跡をＰＲすることができるはず。」と考え、同イベントでの学生独自企画として、江戸時代の川越し文化における最重要アイテム「川札」をフォーカスした企画を検討し、来客者に和菓子バルを楽しんでもらいながら、川越し文化についてＰＲする方法を考案していただきました。この企画は川越しの文化資源を活用した秀逸な企画だと思います。

和菓子バル当日においては、前述の川札企画や川越遺跡にまつわるクイズラリーを実施していただき、来場者に楽しみながら川越し文化を学んでもらうことができました。更に、来場者が SNS で情報発信することを促す企画により、幅広く川越遺跡を PR することができました。「川越遺跡」や「和菓子」は、比較的年齢層の高い世代に認知され、好まれる傾向にありますが、SNS を介して大学生等の若年層にも認知されるよう努めていただいたことは、高く評価しております。

今後は、今回提案及び実施していただいた内容を活かしつつ、重点的に川越遺跡における観光活用及び情報発信を続けながら、その仕組みを全体に波及させられるよう施策を進めてまいりたいと思います。

【謝辞】本研究においては、島田市役所文化資源活用課の方々をはじめとする職員の皆様、そして島田市の住民の皆様に、多大なご協力を頂戴した。ここに厚く御礼を申し上げたい。

---

[1] さわやかウォーキングとは、東海旅客鉄道が企画・主催するウォーキングイベントである。川越遺跡を通るコース以外にも、数多くの日程・コースが設けられている。

[2] きものさんぽの会とは、島田を訪れた人に着物を着て町を歩いてもらうことを目的に、街歩きイベントを企画し、着物レンタルと着付けを行っている。

（成果報告書）

地域ブランド「しずおか葵プレミアムAWARD」認証品の
プロモーション（販売促進）戦略に関する研究

大正大学 地域構想研究所
地域活性化研究会「鴨合の集」
教　　員：教授 北條規
参加学生：小川由乃輔、永塚歩実、渥美結斗
小林実加、石井大智

１．要約

静岡市では平成21年に「しずおか葵プレミアム」の認証制度を始動させ、地域性、希少性、独自性や市内の地域資源・原材料・素材へのこだわりに加え、伝統的技術や技法、ストーリー、市場性など複数の要件や選考基準を満たした商品を認証品として認定し、静岡市のイメージアップと産業の振興のために続けられている。令和元年には「しずおか葵プレミアムAWARD」として認証制度をより発展させ、企業の製品の発掘とブランド化を推進している。本研究はテストマーケティングや取材を通して当該事業の課題解決にむけた調査とさらなる活性化に向けた今後の戦略を考察するものである。

２．研究の目的

当研究で取り上げた「しずおか葵プレミアムAWARD」は静岡市に根付く誇るべき逸品を広く市内外に情報発信するために、市民に「100年先まで大切に残していきたい」と思う商品に投票してもらい、選ばれた商品を静岡市の地域ブランドとして認証している。しかし認証制度や商品が市民に認知されていない、運用面での事業者ニーズとのギャップ、市民が商品を手に取ってもらう機会が少ない等の課題がある。当研究では認証事業者への取材を通して当該認証事業の効果や課題をあぶり出すことと、首都圏流通店舗で認証商品をテストマーケティングを行い、認証制度の売場での有効性を図り、認証制度の課題解決に向けた方策を探る。

３.研究の内容

①「しずおか葵プレミアムAWARD」商品テストマーケティング

②　認証事業者および販売店への取材調査

令和3年9月23日から26日に大正大学が運営するアンテナショップ「ガモールマルシェ」にて「静岡市フェア」を開催し、静岡市の特産品と合わせて「しずおか葵プレミアムAWARD」認証品のテストマーケティング販売を行った。今回のフェアでは都内での実店舗で「しずおか葵プレミアムAWARD」の販売プロモーションをするとともに売上やブランド情報への反応を調査した。今回収集した売上データと考察をもとに「しずおか葵プレミアムAWARD」の今後の方策について考察する。また、令和3年11月2日にはブランド認証を受けた企業、静岡駅ビルで認証商品を販売している店舗を訪問し、当認証制度について取材を通して当該制度の有効性について調査する。

４．研究の成果

(1)当初の計画

1. オープンデータ等を用いた地域ブランドとしての影響力を調査やプロモーションの検討
2. 認証事業者のメリット、販促への貢献度を調査し、地域ブランドとしての影響力の計測及びプロモーション案の検討を行う。
3. 実店舗販売でのプロモーション、テストマーケティング

(2) 実際の内容

1. C：オープンデータ等を用いた地域ブランドとしての影響力を調査やプロモーションの検討

当初はオープンデータやビッグデータ等を用いて当該ブランド認証事業の認知率の計測や既存の認知率の高い静岡市の地域資源との比較を行い、課題解決の検討を行う計画であったが、Yahooの検索エンジンによるインサイトデータ等の調査を実施したが、「しずおか葵プレミアムAWARDという単語でのヒットが極めて少なく、サンプル数が限られていることから、認知率の計測には至らなかった。認知率の高い静岡市の地域資源との比較に関しては実店舗での消費性向で確認することとした。また、市民への認知度や購買意欲のアンケート調査に関しては、コロナ感染対策上今回は見送らざるを得なかった。

2. B：認証事業者のメリット、販促への貢献度を調査し、地域ブランドとしての影響力の計測及びプロモーション案の検討を行う。

認証事業者および認証商品を販売している店舗への取材通して認証事業者の認証メリットや販売促進への効果などを調査した。

3. A：実店舗販売でのプロモーション・テストマーケティング

複数のアプローチからのプロモーションを行い、売上やブランド情報への反応をもとに実店舗販売後の地域ブランドへの影響度合いを調査した。

(3)実績・成果と課題

①「しずおか葵プレミアムAWARD」商品テストマーケティング

令和3年9月23日から26日にガモールマルシェにて「静岡市フェア」を開催し「しずおか葵プレミアムAWARD」商品の中からセレクトしてテストマーケティング販売を行った。

・テストマーケティング　売上実績

静岡市フェア商品と合わせて「しずおか葵プレミアムAWARD」商品を取り上げた。

下記の売上実績一覧表の黄色網掛け欄が対象商品

商品名	販売総売上	販売商品数
あおさ入りいわし粉	¥ 11,830	70
阿部川もち	¥ 27,016	44
しらす餃子　生麺屋岡崎	¥ 28,440	40
静岡おでん　八千代	¥ 24,531	39
駿河湾産　冷凍釜揚げ桜えび	¥ 37,506	38
駿河湾産　冷凍釜揚げしらす	¥ 21,588	28
静岡葵きんつば羊かん	¥ 2,580	20
海苔いわし	¥ 6,660	18
茶飴	¥ 4,284	12
生しらすのくぎ煮　生姜	¥ 5,540	10
生しらすのくぎ煮　山椒	¥ 5,540	10
生しらすのくぎ煮　紫蘇の実	¥ 5,540	10
8の字袋入り	¥ 4,860	10
まぐろオリーブ油漬ファンシー ヒラ３号缶（株式会社　由比缶詰所）	¥ 3,650	10
まぐ兵衛　プレーン	¥ 3,430	10
清水もつカレー缶	¥ 3,960	9
葵　大丸	¥ 3,087	9
まぐろオリーブ油漬フレーク ヒラ３号缶（株式会社　由比缶詰所）	¥ 3,042	9
桜えびご飯の素	¥ 6,400	8
駿河湾産　天日干し桜えび	¥ 7,280	7
延命酢	¥ 5,803	7
原藤グラタン　いわし	¥ 2,793	7
まぐ兵衛　黒胡椒	¥ 2,058	6
あらしお焼き塩セット	¥ 2,070	5
食べるいわし削りぶし（水谷商店）	¥ 1,620	5
やきとり缶　うま辛味	¥ 546	3
やきとり缶　ブラックペッパー味	¥ 546	3
やきとり缶　柚子こしょう味	¥ 546	3
しっかりとした濃い旨味の味わい 「老舗の出汁80g	¥ 1,512	2
まぐ兵衛　一味マヨネーズ	¥ 686	2
やきとり缶　たれ味	¥ 364	2
やきとり缶　塩レモン味	¥ 364	2
やきとり缶　塩味	¥ 182	1
	¥ 235,854	459

□4日間のフェア期間中での店舗全体の売上金額に占める割合は下記となっている。

・期間：9月23日～26日　4日間

ガモールマルシェ全体の売上金額：1,263,885円

静岡市フェア売上金額：235,854円（18.66%）　認証品売上金額：46,919円（3.71%）

□販売実績の上位は「桜えび」「しらす」「静岡おでん」静岡市を代表する特産品あるいは特産品の地域資源を利用した加工食品となっている。認証品の「安倍川もち」は知名度が高いことで結果につながっている。一方で、売上個数では「あおさ入りいわし粉」単価が低いことからトップとなった。来店した常連のお客様にヒヤリングすると、静岡市の特産で認知しているものは安倍川もち、桜えび、しらす、お茶、青島みかんであった。「しずおか葵プレミアムAWRD」のフラッグ、ポスター、POPを用意してもブランドとしての認識はなく、あくまで静岡市の特産品として購入している。認証された商品のパッケージに認証の表記がない限り消費者には訴求されないため、域外市場ではシール貼り等で対応すべきと考える。首都圏には多くの自治体アンテナショップが存在しているが、実施店舗は日本全国の商品が扱われ、冷凍、冷蔵、常温といった温度帯での分類と調味料、缶詰、麺類、菓子等も分野ごとに陳列されており、地域もバラバラになっている。そのような売り場環境下、静岡市フェアとしてブースを設けて販売したが、店舗全体の2割近くまで売上を占めており、地域物産フェアでの成果は十分あったと考えられる。冷凍ゾーンに配置した桜えび、しらす、餃子は全て上位を占めているが、残念ながら認証品は含まれていない。コロナ感染拡大による計画消費や備蓄用としても添加物の少なく賞味期限の長い冷凍品への人気が高いと考えられるので、新規認証品を選ぶ場合にはライフスタイルも意識する必要があると考える。

②　認証事業者および販売店へのヒヤリング調査

写真は左からa.株式会社駿府楽市　b.株式会社やまだいち　c.株式会社近藤酢店　d.株式会社ホテイフーズ

a.株式会社駿府楽市

Q.しずおか葵プレミアムをアピールするにはどうすべきか？

・共通のステッカーを作るべき

Q　プレミアム専用のコーナーを設置できたらいいのでは?

・競合として「しずおかおみや」等があり、あまり売り場としては差を出せない。

・静岡市や行政が主導している⇒消費活動に至らない傾向がある

・お店としては第3セクターとして平等に商品を使わねばならず、販売での難しさがある。

Q　統一感を出すことで商品に付加価値がつくのでは

・パッケージングで分かりやすくすることが顧客にとって一番波及性が高い

・８の字に関してはライセンスを新しく買った会社が販売しており、パッケージや売り方が斬新である。しかし、現状は知名度で売れていそうだ。

・延命酢は数年前までは知る人ぞ知る商品であった。 数年前からドラックストアで売るようになって単価が下がり、商品のイメージもどこでも買える商品イメージに変わってしまった。

・他ブランドは老舗商品が鰹節やツンツン漬がプレミアムを上手くパッケージに活かしている。ツンツン漬は特にレストランなどでも扱われるようになった

B.株式会社　やまだいち

新幹線の開業以来商品改良し、静岡市お土産（長持ち型）の安倍川餅と本来の姿である安倍川餅と2種類がある。販売はどちらも市内が中心。やまだいちの安倍川餅は、歴史から本来の要素を伝統として現代まで存続させている面と時代に合わせ伝統を進化させている面、2つの側面を持つ伝統菓子で、しずおか葵プレミアムという百年愛される商品に、相応しい商品である。安倍川餅にとってのしずおか葵プレミアムは、市内で認められているという市民の認識を視覚したものと考えられる。安倍川餅自体が、しずおか葵プレミアムのブランドに何か動きを求めるという方向性ではなく、お互いが持つ「伝統」という要素が一致しているように思うので、改善というより、現状を継続させていく事が最善である。名物はその地域で食されお土産需要にもつながるが、「赤福」「信玄餅」のように他地域の駅でも売られているような扱いにはしたくないと社長は強調している。伝統菓子として地元でしか手に入らないことは大切にしたいとのこと。

c.株式会社近藤酢店

手作りで製造されている延命酢だが昔は酢屋での量り売りだけであったのが現在はスーパーでも販売され、でも簡単に手に取りやすくなっている。しずおか葵プレミアムAWARDに認定されたメリットことは出ており、社員のモチベーションの向上や地域内からのお声がけに繋がっている。現状として生産量増加や販売戦略は特にない。延命酢を手に取っていただいたお客様の口コミによって今よりも多くのお客様の手に届く商品となってほしい。主な顧客層は60歳以上と中高齢向けの商品になっている。課題として、30代・40代への顧客層の拡大が挙げられている。他社のお酢との比較ができないこと、中高齢向けが今後拡大していきたい年齢層への妨げになっているのではないかと考える。

d.株式会社ホテイフーズ

認証に関しては、店頭販売、投票会に参加し、市民の皆様の声を聞くよい機会となった。また、静岡競輪、ガモールマルシェなど、静岡市からいただく案件には大変感謝しており、今後も取り組み強化を図りたいと思っている。やきとり缶詰は全国販売されているが、それが静岡生まれということは知られていない。「静岡は缶詰生産量日本一」をキーワードに缶詰の売場提案を行い、そのなかで「缶詰の街、静岡が生んだロングセラー」としてPRしているが、認証ロゴのアイキャッチ効果と、世の中に様々な認証がある中で「静岡市」という公的機関のお墨付きという点は静岡みやげとして特に効果があると感じている。今後は県内の土産品としても販売を伸ばしていきたい。静岡おみやでは商品開発を行ったが企業としてのストーリーをつくる難しさを感じたが、認証品は箔付けになっている。また、清水港に集まる缶詰メーカーは武器だと感じる。

(4)今後の改善点や対策

実店舗で販売と取材を通して明らかになったしずおか葵プレミアムAWARDの強みと弱みやそこから考えられる対策について整理する。強みとして「暮らしに浸透している」と「ビジネス拡大に生かされている」の2点があげられる。食卓に直結しているもの、ソウルフード的な存在のものもあり、認証商品は暮らしに浸透している。ただし、域外市場も視野に入れると認証シールやパッケージでの可視化などの改善が必要である。また、各企業が口をそろえて語っていたこととして、認証品に選ばれたことによるビジネス機会の拡大である。自治体が選んだ商品であるため他の企業からコラボや依頼を受けるようになったという。

弱みとしては「購買意欲に影響するほどの力はないということ」と「ブランド内の商品のターゲットの多様化 」の二点である。今回、実店舗での販売でしずおか葵プレミアムAWRDを宣伝していたがさほど売り上げは伸びなかった。また、商品の想定されるターゲットが広く異なる為、認証品を集めてターゲットを絞ることが難しい。また、「さくらえび」「しらす」「青島みかん」など静岡市には全国区の特産品の一次産品が存在している。また「お茶」や「缶詰」「ホビー」など

のように静岡市の産業として地元のアイデンティティとなっているものもある中で、葵プレミアムAWARDで認証された品物をいかにしてブランドとして認知させていくかが課題である。個々の商品を全国区にすることは極めてハードルは高いので、食品であれば食文化の中での位置づけ、料理の世界でのプロモーションも有効である。また視点を変えれば認証商品に缶詰が入っている点で考えていけば、「缶詰王国静岡市」をもっとアピールすることで連動していける。そういった新しいアプローチが必要と考える。

また、2006年の「地域団体商標制度」がきっかけとして、全国の自治体で様々な「地域ブランド」の取組みが行われているが、地域産品の販売拡大、観光戦略、産業振興等内容もレベルもまちまちで比較対象にはなりえない。一例を記載したがその運用方法は異なっており、ものからことまで各自治体の個性が出ている。ブランド認証制度は、消費者に対して特別な感覚を抱かせ、他の商品より積極的に購入したいと思うような定性的な無形資産を形成し、競争優位性を発揮しなければいけない。事業者の協力を得ながら認証マークをアイコンとしての可視化の徹底を図る等継続的に積み上げていくことが肝要である。

自治体名	認証制度名	スタート年度
札幌市	札幌スタイル認証	平成16年度
広島市	ザ・広島ブランド	平成19年度
藤枝市	藤枝セレクション	平成26年度
浜松市	やらまいかブランド	平成17年度
熱海市	熱海ブランド　A-PLUS	平成24年度
秦野市	はだのブランド　みっけもん秦野	平成24年度
つくばみらい市	みらいプレミアム	平成25年度
会津若松商工会議所	会津ブランド	平成27年度

５．地域への提言

時代はウィズコロナに変化しそうであるが、今後商品の購買スタイルがどのようになっていくかはまだ見えていない。しかしながらオンライン、非接触・非対面のスタイルは今後定着し、事業者はそれに対応したビジネススタイルに変化させていかなければならない。オンライン上で消費者は価格、商品内容を比較して、シビアに商品をセレクトしていくであろう。そこでどのように差別化を図り、競争優位性を発揮するかが重要で、その意味でも産地のブランディングは有効に働く。自治体が市民と一緒に選んだ商品というお墨付きはwebで大きなセールスポイントとなってくるであろう。今後、自治体はそこを意識した情報プロモーションやメディアへの取り上げを積極的に図っていくべきで、検索エンジンにどのようにして選ばれやすい環境を整えていくかはとても大切である。シティプロモーションと連動させる、静岡市のＨＰとの連動、市民のアンバサダーなどを活用してＳＮＳでも情報を発信させ、拡散させることも意識的に戦略を組んでいくべきである。

６．地域からの評価

テストマーケティングの際にTBSラジオで当日のフェアの宣伝を実施した。ラジオを聴いた方に粗品プレゼントとアナウンスしたら、想定以上の消費者が来店している。静岡市の事業者に音声を聞かせたら大変感謝された。やはり首都圏のメディアに取り上げてもらえることはとても宣伝になるという。また、商品の追加発注と完売御礼メッセージを流したら大変高く評価してくれ、コロナが落ち着いたら来店したい意向もいただいている。今後数点は定番化を図っている。

以上

令和３年度
しずおか中部連携中枢都市圏地域課題解決事業
研究成果報告書

令和４(2022)年３月
しずおか中部連携中枢都市圏
（静岡市・島田市・焼津市・藤枝市・牧之原市・吉田町・川根本町）

（事務局）
静岡市　企画局　企画課　移住・事業推進係
〒420-8602　静岡市葵区追手町５番１号
電話： 054-221-1022　FAX： 054-221-1295
E-Mail： kikaku@city.shizuoka.lg.jp